
暁空—あかつきそら—

京元 緋呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暁空―あかつきそら―

【Nコード】

N8023I

【作者名】

京元 緋呂

【あらすじ】

とある村と魔物の間で、十年毎に交わされる「契約」。その最終日の夜、魔物に贄として差し出されたのは、鮮やかな色を持つ穢れの子だった――和風ファンタジー/2011・11「昂月」連載再開・不定期激亀更新。

初ノ巻

木々の間を細く長く這っていた夕陽は既に落ち、先程まで僅かに顔を見せていた半月も、今は雲に飲まれ姿を消している。

深い闇の中で揺れるのは、古ぼけた社の前に灯された、小さな篝火。その鳥居の傍には一対の黒い狛犬が鎮座し、社からは薄暗く揺れる光と、人の気配が洩れていた。

地元の人間は普段、滅多に此処へ寄り付かない。それは此処がこの村の霊場であり、立入り自体が禁忌でもあるからだ。此処が使われるのは、十年に一度。あの黒い魔物と、代々の村長が交わして来た『契約』の刻だけである。

其れが始められたのは、かの魔物が此地に現れた頃からと言われているが、具体的な年月は定かではない。しかしその魔物との『契約』は村にとつては必要であり、また悪でもあった。

人外の力に対し、人間のそれは余りに弱い。それが人の魂を喰らう程の魔物が相手なら、尚更である。

例えば、それに襲われたとして。退魔の力を持つ陰陽師や僧侶を擁する、財力のある村なら対処に困らないだろう。しかし大半の小さな村は、祈祷料すら支払いに困るような、貧しい暮らしをして居た。そうした貧村が身を守るため選ぶのが、力有る魔物との『契約』である。

この北ノ郷村に於いては十年毎に、魔物に『一番の好物』である生娘を一人、贄として差し出していた。その代わりに魔物は次の贄を喰らうまで、村に近寄る危険な魔物を追い払い、村人を影から守護する。勿論村も、時の幕府には緘口し『魔物狩』から護る事を誓う。

そして、今夜がその『契約』の最終日。

今後十年の、村の安泰の為に。社の中で息を殺し一人震えるのは、これから贄となる生娘であった。

無風の闇に、何処からともなく足音が響くのを聞き付けて。角隠しを被り、美しく着付けられた白無垢の細い喉が、こくりと唾を飲んだ。

足音は徐々に近付き、社の前で一旦停まると、じやり、と軟石の石段を鳴らし上がる。そしてやがて、白無垢が背を向けて座る扉の前で停まった。

きい、と開けられた扉から淀んだ社の中へ、正座した裸足の爪先を舐めるように、冷たい夜気が流れ込む。しかしそれよりも早く背筋を凍らせたのは、その戸口に立つ魔物こと『黒牙乾』の、二目と見られぬ恐ろしい姿——の、筈だった。

「よお、ご苦労さん」

やたら明るい挨拶に飛び上がった白無垢が、慌て振り向く先には。身の丈六尺を優に越え、派手な緋蛇皮の襟巻に、烏黒の半着袴を着た偉丈夫が、につこりと手を挙げていた。

「ああ、寒いなア。何だよ、火鉢も置いて貰えなかったのか。可哀想になア」

黒牙乾はそう眉を寄せながら、よいしょと身を屈め上がり込んだ。想像していた醜怪な、生臭く黒い体毛に覆われた姿とは、余りにも掛け離れている。伝え言われる鋭い牙も口焰も、長く太い大蛇のような黒い尾も無い。紫がかった長い黒髪と緋の双眸を除けば、何処から見ても『人間の男』に見えるのを、白無垢は何度も眼を擦り上げ見詰めた。

「何だよ、何吃驚してやがる？ ああ、俺が余りにも人間そっくりだからか？」

隣に座り込み、覗き込む緋の瞳が怖いのか、それとも近付けられた精悍な顔に照れたのか。袖口を顔に当て隠れる白無垢の可愛らしい仕草に、黒牙乾は気を良くして話し始めた。

「俺は、人間から勝手に黒牙乾って呼ばれてる。おっと、いきなり喰わないから、安心しなよ」

黒牙乾はそう言つて更ににじり寄ると、やおら逃げる白無垢の肩に、馴れ馴れしく手を回した。しかし直ぐに、背けた首筋のあたりを一嗅ぎし、頭を捻った。

「ん？ お前……本当に女か？ いや、一体何だ……っ！」

突然鋭い風が鼻先を掠め、その長い髪のを僅かに斬られた。

慌てて身を翻し、その体軀に合わぬ俊敏さで、腰の太刀に手を掛け構える。同時に飛び離れ、構えた白無垢の細い手には、短い脇差わきざしが逆手に握られていた。

じりじりと、睨め合う。そのうちに、黒牙乾が低く唸った。

「デメエ、一体何だ？」

「……」

「俺に刃を向けたって事は、この村はもう、契約は結ばねえって、思つて良いんだな？」

そうにやりと黒牙乾が笑い、ふるりと軽く頭を揺らす。すると、長い髪の間から黒い獣の耳が現れ、白無垢を威嚇するように立てられた。

「あーあ、せっかくの贄だから、怖がらずに仲良くなろうと気を遣つたのによ。全く、氣い悪いいなア。で、どうすんだよ、そんなもん俺に向けてよ？」

「……お前を、殺す」

やつと発した白無垢の声は震えていたが、女にしてはしゃがれ、男にしては甘く高い。例えば、丁度変声期を迎えたばかりの少年のようでもある。そのせいか、角隠しの奥から殺気を放つ白無垢の正体に、黒牙乾は興味を抱いた。

「ウオオオッ！」

逆手の刀を左腰に構え、白無垢が気合いを発し動く。そして懷に突っ込んだが、黒牙乾は左手一つで交わし、勢い余つてよろめく白無垢の腕を容易く捕えた。当然だ。たかが非力な人間、それも脇差一本でなぞ、魔物を殺せる訳が無い。

黒牙乾は藻掻く白無垢から脇差を取り上げると、体で押し下から

せ壁に追い詰めた。そして、その両手を掴んで高く掲げ、重ねた掌に素早く脇差を突き立てた。

「ぐあああ！ああつ、はつ、うつ……」

「ククク、親から礼儀を教わらなかったのかよ？ 初顔の相手に向かつてこんな真似しやがるなんて、随分驕がなつて無えな」

「……つ、うる、せえつ！」

両掌を己の刃で貫かれ、その痛みに苦鳴を洩らしながらも、白無垢は未だ射るような眼を向けて来る。それに取り合わず、黒牙乾は目深に被った角隠しを掴むと、勢い良く剥いだ。

「！」

「――へえ」

白布の下から現れたのは、蠟燭の光に鈍く輝く山吹のざんばら髪と、苦痛に歪められた露草の瞳。その鮮やかさに黒牙乾は驚いて、次にいたり、と笑った。

「これはこれは、何てえ可愛らしい餓鬼だ。毛唐か、その合いの子か、それとも穢れか？」

「ちく、しょう……離せつ！」

「暴れんなよ、傷が広がるぜ。しかしお前、本当に何者だ？ 嗅いだ事の無い匂いしやがつて」

「……」

「俺、昔っから鼻だけは良く利くんだけどなア。男か女かすら、区別が出来ねえ。なあ、どっちよ？」

「……」

「……返事する気、無えつてか。はーん、本当に生意気でやんの」
チリチリと黒牙乾の、腰の太刀が抜かれる。その黒く鋭い刀身に戦く子供を、黒牙乾はためらいも無く斜に薙いだ。

「うつ！」

二重に巻かれた白無垢の帯が、ぱらりと割れ足元に落ちる。それから刀を鞘に戻すと、ぐつと眼を瞑った子供の顔を覗き込んだ。

「太刀筋は悪く無えが、いかんせん力が無え。刀の修練だつて、付

け焼刃だろ。誰の差し金か知らねえが、これで俺を殺るなんざ無理だつて。お前だつて、判つてんだろ？」

「はっ、はっ、はっ……」

「だが、その気迫だけは、認めてやる」

グイと大きな手に顎を掴まれ、子供は荒い息を吐きながらも、その緋の瞳を睨み付けた。

板壁に縫いつけられた痛みが、恐怖と共にじくじくと子供を甚振^{いたぶ}る。気が遠くなるのを必死に堪えて、戦慄く薄い唇をきりきりと噛み締めた。掌が脈打ち痛みを刻む度に、立ち込めて行く錆びたような血の匂い。それを一嗅ぎした黒牙乾は、縫い付けられた掌に顔を寄せた。

「うん、若い血は、やっぱり美味えなア」

滴る血に染まる、蛇のように裂けた舌先が、何か別の生き物のように蠢く。

舐め上げられる度に、子供の心は恐怖に駆られ、痛みと相まって冷汗に代わって行く。そうしてふるふる体が震え始めたのに気付いて、黒牙乾は再び子供に鼻を近付けた。

「しかし、どうしても解せ無え。俺の鼻でも、嗅ぎ分けられ無え奴が居るなんてな。どれ、体はどうなつてんのよ？」

「……っ！や、止めてっ！」

嫌がる襟元を力尽くで広げると、その中は細くて色の白い、若い男子の胸板があった。しげしげと不躰に覗かれ、子供が思わず顔を背ける。何をそんなに恥ずかしがるかと、黒牙乾の低い声が嗤った。

「やつぱり男、かア？ いや、化けてるって事も有るしなあ」

「男、だ……俺は、男だッ」

「本当かよ？」

「本当、だから、止めて……」

「俺は、謀^{たばか}る奴は信用しねえ。覚えとけよ、餓鬼」

その声と共に黒牙乾の膝が少年の足を割り、乱れた白無垢の裾に手を滑り込ませる。そのまま隠された太股をなぞり上げ、固く巻か

れた下帯の中へと指を潜らせた。

初ノ式*

「や、っ、このっ、うぐっ！」

逃れんと身を振るが、その度に刀に縫われた傷から、血が零れ激痛が走る。だが子供が苦鳴を上げるのにも構わず、黒牙乾は布の脇から尚も執拗に、薄く毛を生やした其処を探った。掌には小さく縮こまった棹と囊の、柔らかい肉の感触が伝わってくる。

「ああ、本当に男なんだな。しかしそれにしても、お前の年頃じゃあ、随分可愛らしく無えか？」

そう呟いて、黒牙乾は揶揄するように子供の顔を覗き込んだ。

身動きが、出来ない。

身体の最も弱く柔らかい処を何時握り潰されるかと言う恐怖が、子供の背を凍らせる。しかしその手は飽くまでも優しくゆるゆると、震える未熟な股間を弄り続けた。

「造り物じゃ無えみたいだな。ちゃんとひくひくしてら。ああ、そんな心配すんなよ。力尽くてもいだりなんて、そんな恐ろしい事しねえから。ハハハハ！」

「うっ……はあっ、はあっ」

冗談めかしに告げられた言葉など、信用出来る訳がない。子供は恐怖で止まりそうになる息を必死に継ぎながら、早くこの手が去る事を心から願った。しかしそれとは裏腹に、黒牙乾の指は更に奥へ伸ばされる。途端に子供は思い切り眼を見開き、拒絶を叫んだ。

「さわるなッ！」

そう叫んだ瞬間、両掌の傷から血が溢れた。だが、子供の強い反応に更に興味をそそられた黒牙乾は、そのまま指を奥へ進める。すると、ねとりと柔らかい肉に触れた。

「へ？ 何だこりゃあ」

「やめろっ、このっ、あう！」

「何でこんな処割れてんだよ？ 女じゃあるめえし……っ、まさ

か」

「や、やだっ！ 見るな…… あぐっ、ぐあぁッ！」

ばたつく身体に引かれ、縫い止められた両手の傷が更に痛み、血の帯を刷く。黒牙乾は大きな体を屈め、子供の強張る足を片方担いで開くと、隠された内へと顔を近付けた。

「……こりゃあ珍しい、双成りって奴かよ！ へえ、人間のは初めて拝んだぜ」

そう驚く黒牙乾の声に、子供がぎゅうと眼を瞑り、ぐっと身を固くする。いよいよ観念したのだろう。暫く抗わず良いように弄られていたが、そのうちに洩を嚙り上げ、嗚咽を漏らし始めた。

「う……うっ、うっ、もう、こそせ、ッ」

「オイオイ、自分から、何言ってるんだよ」

「こんな、こと、しゃがって……うっっ、うっ」

子供の言葉にまさぐる指を止め、思わず黒牙乾が見上げると。その白粉を塗られた顔は、涙と洩でぐしゃぐしゃに歪んでいた。

「汚ったねえ、面」

「おまえ、の……せいだ」

「ふん、ちよつと見せて貰っただけじゃねえか」

露草色の瞳は涙に赤く充ち、先程放たれていた殺気はすっかり無くなっている。その弱々しい様子に、ついほだされたいらしい。黒牙乾は大きな溜息を吐くと、傍らに落ちた子供の帯揚げを手繰り寄せ、その顔を拭いた。

「ほら、少しはさっぱりしたか？」

「う、うっっ、くっっ……」

「まだ泣くのか、もう止めただらうが！」

「……はやく、こそせ、よ」

「へ？」

「俺、いきてても、どうせ、また……」

「また、って、何だよ？」

「……」

「話せ。気になるじゃねえか」

「……えぐつ、ひくつ……」

「ああ、もう泣くんじゃ無え、この糞餓鬼！」

力無く睨む子供の瞳から、また涙が一粒零れる。ばつが悪そうに眉を顰めた黒牙乾が、今度は手を伸ばし、直に涙を掬い上げた。その優しい感触に目を伏せ、生温い涙を拭われるまま。子供は涙を一つ啜ると、重い口をやつと開いた。

「あなぐら、に、いれられる」

他人と違う髪色、他人と違う瞳の色。そしてたまたま双成りの身体に生まれついたせいで、子供は幽閉され育った。

四肢の欠損も含め、異形異色に生まれついた子供は通常、赤子のうちに殺される。五体満足が人間の証であり、その他を『人外の者』と考える風潮は、この界限では良く有る事だ。

更にその中には、人間と魔物の間に生まれる子供も含まれ、その証は髪や瞳の色に現れると考えられていた。特に鮮やかな色であればある程、魔物に近いのだと言う。そういう子供は殺めれば却って災いを招くとされ、人目に触れぬよう一生幽閉された。故に、普通は持つ筈の無い色で生まれて来たこの子供は、魔物と人間の合の子、つまり『穢れの子』とされて、疎まれて来たのだった。

子供は眼を伏せたまま、たどたどしく言葉を紡いだ。

「あいつが、だしてやる、から、おまえをころせ、つて」

「アイツつて、村長か？」

そう問うと、子供は恐る恐る眼を上げて小さく頷いた。

「へえ、俺を殺せてか。出来る訳無えのに？　つうかお前、そんな戯けた約束、本気で信じたのかよ？」

「……」

「所詮餓鬼だな。ちよつと考えりや判るだろ。見てくれが変わってるからって、お前みたい餓鬼を平気で苦しめる奴等が、そんな口約束守ると思ってるのか？」

皮肉な笑みを浮かべた黒牙乾の言葉に、子供は力無く目を逸らした。

今までの、自分が村人から受けた酷い苦痛を考えれば、確かにその約束は俄に信用し難い。しかしそう思いながらも『解放』と言う条件は、子供にとつて涙する程に魅力的だった。

いつも穴蔵の高く狭い窓から差す僅かな陽光を、思い切り全身に浴びてみたい。時折姿を見せる小鳥達が空を廻るのを、さらさらと風に揺らぐ木の葉を、清々と流れる川を直に感じて見たい。そして、その中を誰に囚われる事無く、駆け回りたい——狂おしい程の憧れを逆手に取られ、子供は黒牙乾との無謀な対決を、余儀無くされた。それが自分の命を餌とした、罠だと知らずに。

項垂れすっかり力を無くした山吹の髪を、大きな掌が無造作に撫でつけた。

「なあ、餓鬼——人間なんてのはよ、一人なら弱えが、束になるとそりゃあ残酷なんだぜ？ 多勢に無勢でなぶり殺された魔物なんか、山程居るしよお」

喋りながら黒牙乾は鼻をひくつかせると、何かに気付いたように目線で探り、耳を揺らす。それから子供の両掌を貫く刃に手を掛けると、腕を抑え一気に引き抜いた。

「ぐあっ！」

「俺の相棒だって、何にもしないのに殺られちゃった……最ももう随分と昔だけだな。おかげで俺はずっと独りだ」

「くっ！……あつ、うっ」

「痛むか？ 悪かったな、傷付けて」

「……え？」

意外な謝罪の言葉に、子供は耳を疑った。

喰われる、若しくはなぶり殺されると思っていた。黒牙乾はそのくらい恐ろしい魔物だと、散々聞かされていたからだ。だが、まさか人間のように『情』を持つなんて、今の今まで知らなかった。

黒牙乾は蹲る子供ににこりと微笑むと、しゃがみ込んで白無垢の

裾を掴んだ。それを少し裂いて細長い紐を作り出すと、子供の両手に巻いて固く結んだ。

「取り合えず、血止めだ。後で、ちゃんと治してやる。それから、餓鬼」

「？」

「やつぱり最初っから、テメエは謀かれてたんだ。だからあんな狸野郎なんて、簡単に信用すんなよ」

黒牙乾はそう言うのと、子供を背に庇うように位置取り、辺りを窺った。

外から僅かにきな臭さが漂って来るのに、子供も気付いた瞬間。頭上の屋根と壁を、何かに幾つも叩かれた。続けてごうごうと低く吼えるような声が、焼けるような熱を伴い二人の頬に吹き付けた。

どうやら社に、火を放たれたようである。焦げる臭いが鼻につき、不意に黒牙乾が激しく咳込んだ。

「ゲフツ、ガフゴフツ！ ああ、臭え……ッ」

「なに？」

「俺の嫌いな香を混ぜてやがる！ 鼻が効くのも良し悪しだな……ゲホッ、はあ」

そう呟き、喉元に巻き付けていた布を鼻の頭まで引き上げる。そして背後に蹲ったままの子供に手を伸ばし、ぐいと肩を抱き込んだ。

「捕まれ、跳ぶぞ」

「へ？」

「落ちたら燻製になるぜ？」

「え、うわっ！」

無造作に抱き抱えられ、咄嗟に黒牙乾の首にしがみつく。炎の舌が回り、屋根が轟音を上げ崩れ始めると同時に、子供の視界を黒い風が覆った。

copyright
K. Aiba
vi
6878
—
294
<

初ノ参

魔物を滅するには、まず奴等の嫌う『封香』を以て感覚を奪い、香木を混ぜて焚き上げた『浄炎』にて弱らせる。それから額に滅印を施し、首を刎^はねる。

これが、陰陽師が退魔を行う時に取る基本である。

今夜もそれに則^{したが}った手法で行われ、今の処手抜かりは無い。滞らず、万事順調——嗣朗^{しろう}はそう口の端を上げ、燃え上がる社を眺めた。その顔は貴族らしく瓜実で、陰陽師特有の白狩衣^{しろかりぎぬ}を脱いだなら、古き都の宮廷で、歌でも詠んで遊んでいる輩にしか見えないだろう。だが本人は名門出身の誇りを胸に、厳しい修行にも真面目に打ち込んで来た。

これで退魔を行うのは九つ目で、今まで一度たりとも失敗は無い。今回は犬のように鼻の良い魔物だと言うから、いつもより封香も多く用いた。きっと今頃はあの炎の中で、動けずに苦しみ悶えているだろう。

「——さて、このまま浄炎で灰と還るか、飛び出して我に滅され、のたうち回^{たまきり}りて消えるか。それともこの魄切銃^{たまきり}で、その魂を打ち砕いてやるのか」

嗣朗は懷に忍ばせた新しい滅具を取り出すと、細かな飾りが施された金の銃身を、愛おしそうに撫でた。

苦しい修行を経て、ようやく手に入れた最新の滅具である。既に込められた鋼の弾三発には、師匠である高僧の助言に倣い、三日間掛けて破魔呪と守護印を施して来た。

出来るなら少しは手応えのある、強い魔物であって欲しい。そうすれば、この銃を使う機会も得られるだろうし、己の名を上げる事だって出来るだろう。嗣朗はそう思いながら、傍らに立つ村の男衆頭に呟いた。

「のう、かの魔物……何と、言ったかな？」

「へえ、黒牙乾、でございます」

「そうそう、その黒が戌とやらは、大層強いと聞いておるが、真か？」

「へえ、そうだと、村長から聞いておりますに」

男衆頭はその猛々しい面をちらりと嗣朗に向けたが、すぐに社を睨み付けて、野太刀を構え直した。

果たして本当に強いのだろうか。田舎者の言う事は、半分は当てにならない。内心そう小馬鹿にしているのを悟られないよう、嗣朗は白檀の扇子を口元に当て、くつくつと笑った。

その途端。

それまで明々と燃え盛っていた社が、一瞬で闇に消えた。否、闇に消えたのでは無い。黒い何かが社を包んだのだ。

「な、何事？」

嗣朗が細い目を見開き、控えて居た二十余人の男衆が戦く。社を包む黒い何かは炎だと、誰かが叫んだ瞬間。社は木っ端微塵に砕け、黒炎の塊が宙へ飛び出した。

「うわあああ、出た、黒牙乾だああ！！」

黒炎を纏った社の破片が飛び散り、男衆を次々に襲う。それが体に当たると、熱を持たぬのに体を焦がし、燃え広がり、腐らせて行く。そのおぞましい炎に一人ひとり倒れて行く様を、嗣朗は信じられないと言った表情で眺めていた。

「嗣朗、様あ、お助け……」

「ひいひいひい！！ 寄るな、け、汚らわしいッ！」

体中を黒炎に冒され、ぐずぐずと肉を焦がせながらも、男衆の一人がにじり寄って来る。その左頬を、嗣朗が咄嗟に扇子で打つと、力を失った体が傾いで呆気無く転がった。その弾みで焼けた顔面から、腐れた左目がぬるりと滑り落ちる。それでもまだ助けを求める左手が、何度も虚しく土を掻いた。

これは一体どうした事か。こんな能力を持つ魔物など、聞いた事も無い。嗣朗は慌てて燃え出した扇子を捨てると、印を切り、自身

に結界を施した。そして懷から新たな扇子を取り出しながら、その場からなるたけ離れようとした。

「ひゃッ！」

焦った足がもつれ、無様に尻餅を付いて情けない悲鳴を上げる。

それが男衆の苦鳴より、一際高く辺りに響くと。宙に浮かんだ黒炎の塊から、とんでも無い程の馬鹿笑いが沸いた。

「ギャハハハハ！ 情け無さ過ぎるぜ、陰陽師殿！ あーあ、俺を笑い死にさせるつもりかよ。新手の退魔行かア？ ハハハハハ！」

「な、何が無礼なッ！ 魔物の分際で、この名門、周防院家の人間を笑うとは。ええい、姿を現せ、早う！」

「周防院？ ああ、思い出した。あの役にも立たねえ、生臭陰陽師ばっかの貴族様かよ。何だ、俺と遊びに来たのか？」

「笑止！！ 我は貴様を滅しに来たのだッ、さあ黒が戌、この魄切銃で、貴様の魂を微塵に砕いてくれるわ！」

嗣朗は慌てて立ち上がると、懷から自慢の滅具を取り出し、震える銃口を声の方へ向けた。撃鉄を両の親指で思い切り引き、引金に掛けた人差し指に力を籠め、撃つ。すると黒炎の塊は割れ爆ぜて、中から黒牙乾が現れた。

宙から勢い良く着地すると、黒牙乾は抱えていた子供を、少し離れた場所に無造作に放った。すると子供は転がり立ち、脱兎の如く木立の中へと身を消す。それを見送った黒牙乾は、銃を構え狙う嗣朗に対峙しながらも、無防備に耳をぼりぼりと掻いた。

「ああ、面倒臭えな。で、何を砕くって？」

「何と気の悪い輩であろう、良いか、戌！ 我はお前を退魔に参ったのだぞ。さあ、そこへ直れ、その穢れた魂を、この魄切銃で木っ端……」

「話、長えつつの。つまんねえ男だな全く。口釈は良いから、さっさとやれよ」

「おのれ、このッ……！」

真ッ赤に怒った嗣朗が力を籠め、二発目の引金を引いた。狙いは

眼の前の、黒牙乾の額。発射された弾は南蛮の高い技術を応用し、音速を超え不可避の速さで狙いを打ち抜く。

「ぐっ！」

黒牙乾が息詰まった呻きを上げ、ぐらりと揺れた。そして膝を付き、手を付き、左肩から鈍い音を発して地に伏す。その間、ほんの三呼吸。

「お、おおお……やった、やったぞー！」

嗣朗は飛び上がり、喜色満面で諸手を上げた。

「口ばかり達者で憎々しい魔物も、やはりこの銃の前では、非力な子供に等しいのだ。様を見よ、わが周防院家を、そして我を笑った罰は、その穢れた魂をもって償うが良い！」

そう嗣朗が嗤い、黒牙乾に近付き唾を吐こうとした矢先。伏していた黒い体が、がばりと起き上がった。

「ああ、吃驚した！ 何だア、今のは？ 急にでこに、がつりと来やがったぜ」

そうごちながら、もぞもぞと血に濡れた額を探る。すると打ち込んだ筈の弾が、ぼろりと掌に落ちた。

「何だこれ、お前の鼻糞にしては硬いな」

「うわあああ！」

もう仕留めたと油断しきっていた嗣朗が驚き、悲鳴を上げながら銃を構える。そして引金を引くが、最後の弾は黒牙乾の右頬を掠めただけで、明後日の方向へ飛んで行った。

おかしい。師匠からは、魄切銃なら大概の魔物を倒せると聞いて来たのだ。最も効果を上げるため滅印を打つ額に当てたし、呪術の掛け方も間違いない。勿論自分の力が劣っているとも思えない。ならば、魔物が強すぎるのだろうか。

否、そんな事はないと眉を寄せ齒軋りする嗣朗に向かって、黒牙乾は皮肉な笑いを見せた。

「ちゃんと当てるよ、下手糞」

「煩い！」

そう嗣朗が叫び、銃を投げ捨てて袂を探る。取り出した封札を右手で挟み、気で放とうと腕なりに構えた時。不意にその手首が何かに囚われた。

「くっ……」

見れば、まるで黒い大蛇の如き黒牙乾の尾が、体の表面に掛けた結界ごと右腕を締め上げている。今までこれを、魔物に破られた事は無い。だが締め付けは収まらず、じわじわと手首に食い込み始めた。

これは、危険である。咄嗟に嗣朗は右腕の結界を厚くすると共に、体内の気を素早く腹へ集め、凝縮した。

「ええいつ、斬術、天剣壱！！」

そう雄叫んでから扇子を咥え、左手で斬術印を刻み、再び扇子を握り直す。それを高く天に掲げると、一閃鋭い刃と化す間に、黒牙乾の脳天目掛け叩き込んだ。

「イヤアーツ！！」

電光石火の刃が、甲高い金属音を発して阻まれる。見れば素早く抜かれた黒牙乾の太刀が、蒼白く輝く天剣を受け止めていた。

「なかなかどうして生臭いわりに、格好良い技、持ってんじゃねえかよ」

「だまれ、戌。このままお前の刃ごと、脳天から斬ってやる。灰になり、消えるが良いぞ」

そう嗣朗は歯を剥くと、ぐぐい、と丹田に溜めた気を放出し、更に天剣を鋭く尖らせる。その庄に黒牙乾が徐々に這いつくばって行くのを見て、嗣朗は勝利を確信した。

あと、もう一息。もうひと押しすれば、熱を発し始めた魔物の刃は砕け散り、その頭を両断出来る。それを滅印代わりにして更に首を刎ねれば、この魔物を滅せられる。

「ククク、所詮戌など、我の敵では無かったわ。さあ、覚悟を決めよ！」

そう凄んだ瓜実顔を見て、黒牙乾はくつくつと低い嗤いを洩らし

た。

「覚悟、かよ？ そりゃあダメエが決めるんだな。やれやれ、そろそろお遊びは終わりにしようぜ、陰陽師殿。それから」

「何だ？」

「俺は、戌じゃねえ」

そう唸り耳を伏せた黒牙乾の、緋の瞳が明るく輝く。すると、今まで耐えていた嗣朗の右腕の結界が、ぎゅうと締め上げられた。みしみし、と軽くひしゃげる音に続いて、硝子のような破碎音が激しく響く。同時に強烈な熱に似た感覚を持って、右手がぐいと曲げられた。

「ギヤアッ！」

ぼきぼきと、骨が折れる。更に強い力が掛かり、捻じられた皮膚が裂け、肉が千切れ、腱が弾けるのを嗣朗は感じた。そしてその後、力を失った天剣が弾き飛ばされた。

いけないと思うより早く、喉元に衝撃が走り、視界から色が消える。そして、意志に反して視界が右に廻った。

響き渡る魔物の嘲笑と共に見えたのは、札を持ったままもがれた己れの右腕と、それに巻き付く長い黒蛇。血の帯を引き弧を描き、遠く離れた社跡へと、音も無く飛んでいく。

「ああ、千切って済まねえな。暫く尻尾は仕舞ってたから、力の入れ具合、間違えちまったぜ」

額と頬から血を流した、憎悪を含んだ凄惨な笑みが、明度を失っていく視界を横切る。

ああ、自分は首を刎ねられたのだと覚った瞬間。嗣朗の視界は地を映し、やがて闇に閉ざされた。

「ご愁傷様。じゃあ、高貴な陰陽師殿の高貴な魂は、有り難く頂くぜ」

黒牙乾は軽い調子で言うのと立ち上がり、虚ろに闇を眺める嗣朗の首を掲げて、嗤った。

初ノ四

木陰に隠れた子供は、震えながら一部始終を見ていた。

混乱していた。僅かな月明かりの中、自分を謀り見殺しにしようとした奴等が、黒牙乾に倒されて行く。そして退魔に來た陰陽師は腕をもがれ首を刎ねられ、今眼前で魂を食われている。

どうするべきだろう。逃げるか、それとも留まるか。定まらぬ思考は、麻痺するばかりで全く意味を成さない。

「はっ、はっ、はっ」

燃え盛る社の中から助けにくれた黒牙乾を、この場で唯一の味方だと感じたのは、気の迷いだったかも知れない。そう思うと余計に震えて、立ち上がれそうにも無かった。

遠くで黒牙乾が骸となった陰陽師を、無造作に捨て去る。そして太刀を一振りし収めると、ゆっくりこちらへ振り返った。

「おーい、糞餓鬼イ！」

びくりと戦慄いた自分の体が、まるで音を発したような気がする。子供は言い知れぬ恐怖に、息を詰めた。

——喰われる。ここで見つかったら、間違い無く喰われる。

だが幸いな事に、向こうからこちらは見えていないらしい。黒牙乾がきよろきよろと辺りを探すのを見て、子供はそのまま応えずに這いつくばった。

「おーい、居ないのか？　　ったく、助けて貰った礼くれえ言っけつつの」

そう呆れたように眉を寄せると、黒牙乾は踵を返し、今度は静かな声を発した。

「じゃあな、俺は『契約』の残りを果たしに、村へ行く。お前は好きにやれ」

「え……？」

「元気でな、糞餓鬼」

そう告げた大きな背は、転がる男衆を踏みつけ、村へ続く小路へと向かう。少しずつ小さくなり、その姿が闇に紛れて行こうとするのを見て、思わず子供は立ち上がった。

——置いて、行く気だ。

相手は魔物で、歯向かう人間なぞ虫けらのように、殺すような相手である。そんな相手に何をすがるうと言うのか。理性がそう叫ぶが、何故か子供の足は、その背を目掛け勝手に走りだした。

「ま、まって！」

だが、歩みは止まらない。子供は足に絡む白無垢の裾を掴むと、掌の激痛を堪え必死に走った。走って走って、その背が目の前まで近付いた時、大きく踏み切り飛んだ。

「こんの、ばかああッ！」

「グアッ！！！」

見事な飛び蹴りが、黒牙乾の大きな背に決まる。蹴られた方は揉んどり打って地に転がり、子供は裾を大きく靡かせて、鮮やかな着地を決めた。

「てっ、 temeエ畜生、卑怯だぞコラ！ 後ろからもろ、蹴り入れやがって！」

「うっう、うるせえッ、この、うそつきッ！」

「ハア？」

転がった無様な姿のまま、歯を向き怒る黒牙乾に向かい、子供は泣きそうな顔で怒鳴り付けた。

「手ッ！ 手、いてえ、ばかッ！」

「へ？」

「うーっ、これだ！」

そう苛々と叫ぶと、子供は黒牙乾の鼻先に、血塗れの両手を突き出した。

「あ……」

「なおせ、はやく！ それから、俺も、いっしょ！」

「いっしょって、まさか、一緒に行くってか？」

「そう！」

我ながら馬鹿な事を口走っていると、子供は思った。一緒に行くなどと魔物に言うのは、おかしいとも。もしかしたら恐怖と痛みに頭がどうにかなったのかも知れない。

けれど、子供は直感していた。置いて行かれれば、二度と今生で会うことは叶わぬだろう。そして自分が心から望めば、黒牙乾は必ず連れて行ってくれるだろう、と。それが伝わったのかは定かではないが、黒牙乾は暫く子供と真つ赤な掌を見詰めた後、面倒臭そうに溜息を吐いた。

「そう、だったなア。口にした約束は、守らねえとならねえ。だが、餓鬼。俺の贄だから連れて行けなんて、簡単にほざくな。それはこれから俺が何をするか、よく見てから決めるんだな」

見上げてくる緋の瞳が、真摯な光を湛えて、子供を捉えた。

何をする気かは、薄々想像が付く。子供は一瞬の間の後に、一つこくりと頷いた。

村と魔物の間で交わされる『契約』——それは村にとっては、存亡に関わる一大事だ。

もし魔物が破れば、村は幕府へ『魔物狩』を依頼する。すると、幕府直轄の『法院処』が、退魔専門の陰陽師または、退魔出来る法力を持つ僧侶を村へ寄越す。これが先の嗣朗のような軟弱な陰陽師とは違い、知識豊富かつ強力な滅具、法力を所持しているものだから、徒党を組み執拗に追われれば、魔物も只では済まない。しかも此処へ届けられた魔物は総て『台帳』に記され、不定期に行われる

『総魔物狩』の賞金首とされる。

魔物とて、人間より遙かに力があるとはいえ、必ず弱点がある。だから頭の良い輩ほど、その能力を隠し山奥に籠るか『契約』によって人間との共存を図る。

そして、今回のように人間が謀り『契約』を破った場合、大概の魔物は報復に村を襲う。尤もそれは『契約』を破らんとする村側も承知の上で、予め陰陽師を呼び寄せ、退魔を行う例が殆どである。

だが、万一失敗した時には、恐ろしい結末が待っている。そして今黒牙乾は、それを実行せんとしていた。

社から林道を四半里下ると、丁度村を見下ろす丘の上に辿り着く。ここから降りればすぐに畑があり、そこから東へ向かえば商店や廉売、集会処などの主要な建物が並ぶ大路に出る。それを端まで行き南に曲がれば、村長所有の広大な畑と家畜舎、そして屋敷が構えられていた。

雲間から顔を出した月が天頂にて身を輝かせる下で、黒牙乾は丘の上からぐるりと村全体を見下ろすと、耳を揺らし鼻を利かせた。

「へえ、今夜は随分人気が無えと思ったら、何やら村長宅で集まってやがる。女子供は集会処でお守り付きの井戸端会議か。だが、俺に襲われるのを警戒してるだけでも無え……どういう事だ？」

そう疑問を投げ掛けられて、子供は少し躊躇してから、小さな声で呟いた。

「おいわい、なんだって」

「誰の？」

「あいつの、むすめ」

「村長の娘？ どういう事だよ」

そう子供に問えば、子供は拙い言葉と手振りで必死に説明する。それによると、どうやら村長の娘は中々の器量良しで、どこぞの殿様の側室として迎えられるらしい。更に村のしきたりから行けば、本来贅として捧げられるのは彼女だった事が判り、黒牙乾は思わず

子供の頭を小突いた。

「いてっ！」

「この糞餓鬼、何で代わったんだよ！　ちつくしょう、お前がそんな事引き受けなかったら、今頃俺は、その娘と楽しく乳繰り合ってたのによ！」

「ちちくり……なに？」

「乳繰りつてのはな……」

黒牙乾はそう答え掛けたが、問い掛ける子供の眼があまりに曇りなく見上げて来るのに気付き、少しづつが悪そうに小さく咳払いした。

「いやいや、そりゃあコツチの話だ、忘れる。ああしかし、畜生、あの狸野郎め！」

逃した魚は大きいと黒牙乾が地団駄踏むのを、子供は呆れて見詰めた。

この魔物は、一体何なのだろう。へらへらとして、良い加減で、そうかと思えば余裕で陰陽師を倒し魂を喰らう。魔物というのは皆こうなのかと子供が訝しがる傍らで、黒牙乾は大きな溜息を吐くと、ぼりぼり頭を掻いた。

「ああ、頗る残念だが、仕方無えな。昔っから美人薄命って言っしなア……じゃあ、始めるか」

そう呟いた緋の瞳が、煌々と輝きだす。途端にその背から、目に見えぬ禍々しいものが生まれ、子供の全身に鳥肌を立てさせた。それはどんどん大きく膨らみ、やがて重く吐き気を伴い、子供に押し掛かる。

「……うつつ」

耐えきれずに背を丸め、子供がふらふらと片膝落とすのを見て、黒牙乾は、ああ、と思い付いたように声を上げた。

「忘れてたぜ、お前、人間だったな。邪気あたりしちまう」

「じゃき……？」

「おう」

軽く頷く声と共に、背から体をがばりと担ぎ上げられる。そして長い髪を大きな手で掻き上げられ、頭の盆の窪に柔らかい何かを押当てられた。

「ひゃっ、く、うわわッ！」

「こら、暴れるな馬鹿ッ」

「う……っ！」

体勢と掛かる吐息の近さに、その柔らかい何かが黒牙乾の唇だと悟った瞬間。子供の背骨を焼けるような熱が疾り抜け、続いて頭と四肢を痺れさすような快感が広がった。

「あ……はあっ、はあっ」

「これでよし、ほら、呆けてんじゃねえよ。さっさと立てっての」

「なに、した……？」

「馴染めば収まる。邪気を纏わせたから、もう動ける筈だ。傷も直に塞がる」

初めての感触に手足が強張り、まだ息が上がっている。だが不思議と体が楽になり、両掌から痛みが引いていく。そうしてようやく子供が立ち上がったのを見てから、黒牙乾は大きく息を吸い込むと、左手で無音の指笛を鳴らした。

「遠き黒き混沌より呼ばん、我が牙、我が手足、我が血肉——」

その呪言が終わらぬうちに、二人の回りの地面がわなわなと震え、波打ち、盛り上がる。そうして土くれの中から沸いて来たのは、黒い炎で形作られた、犬の様な姿をした魔物達だった。

「ひ……！」

「ウウウウ……」

威嚇するように低い唸りを発し、黒牙乾と同じ緋の双眸が、幾つも鋭く子供を睨め付ける。それに気押され後退りするのを見て、黒牙乾が子供の扱いた襟首を掴んだ。

「お前はコイツに乗って来い。その方が、足手纏いにならなくて済む——黒雅、^{くろやび}乗せてやれ」

一番体の大きな、虎ほどもある一頭を呼び寄せ、背に乗せようと

そのまま持ち上げる。すると慌てた子供は、足をばたつかせながら必死に叫んだ。

「わああ、やだッ、うわあッ！」

「大丈夫だ、コラッ、暴れんな、取り敢えず乗れ！」

「ひいッ！」

軽く投げられ、どん、と半分落ちかけた格好で、子供は黒雅の背にしがみ付いた。

普通ならこの緩く燃える炎は、きっとあの男衆達のように、体を焼き腐らせて行くのだろう。だが今の子供には、何の害も及ばさない。それどころか触れれば温かくなめらかで、まるで毛足の長い、極上の段通のようだ。

「……もえない、でも、あったかい、おまえ」

子供がそう呟き背を撫でると、黒雅は目を細めてぐる、と喉を鳴らした。

「じゃあ、行くかア」

まるでちよつと其処まで、という風情の、軽い黒牙乾の声が掛かる。すると犬達は一声上げて、村目掛け一斉に飛び出した。

初ノ五

群れの先頭に行く黒牙乾は、宙を飛ぶが如き速さで丘を下ると、徐に腰の太刀を抜き振り被った。それを合図に黒炎の犬達は分散し、畑の間に点在する民家に向かって跳躍した。

犬達が民家を掠め疾るだけで、その軒先が煙り、黒い炎が立ち上る。稀に飛び出る家人を老若男女問わず、風のように駆け寄る黒牙乾の刃が、斬り裂き打ち捨てた。

黒い群れの一番しんがり、子供を乗せた黒雅が疾る。やがて村の大路に差し掛かると、立ち並ぶ家屋は既に黒炎を纏い、往来の脇には人間だった黒塊が、幾つか転がっていた。

無残な様子である。だが熱と音を持たない炎が現実味を欠いているせいか、子供は少し顔を顰めただけで、黙って黒雅の背に揺られていた。

見回す先に広がる、覚えの無い道と建物。子供は生まれた時から村に居たが、この街並は全く知らなかった。幽閉されて居たから、住み慣れた愛着など微塵も無い。むしろ、自分をこぞって『穢れ』と貶めた存在が壊れて行くのを、子供は爽快だとすら感じていた。

そのうちに集会処まで来ると、犬達がぐるりと建物を囲み、一斉に身を低く構える。敷地の四隅には注連縄が施され、張られた細い縄には、一枚の綺麗な札がぶら下げられていた。

「おい、糞餓鬼」

先に着いていた黒牙乾が、顎で子供に指し示す。それをもぎ取ればどうなるか知っていたが、子供は躊躇無く札に手を掛け、真中から千切り捨てた。

それから黒牙乾が左手で屋根を指し示すと、犬達は鮮やかに跳躍し、着地した傍から黒炎が屋根に燃え移る。その気配と屋根から伝わる足音に異変を感じた男衆が、何事かと窓を開けて覗き、顔を青くして叫んだ。

「で、出たあッ！」

慌てて戸口から出て野太刀を構えるが、既に遅い。

男衆は戦き見開かれた眼のまま、駆け寄った黒牙乾の太刀に首を落とされ、犬達に食い付かれ燃えた。

「グアアア！」

「ひいつ、ギアアッ！」

黒炎に吞まれたうつ一人の男に、子供は見覚えがあった。いつも無愛想に穴蔵を見張り、時には悪口雑言と共に、拳や棒で打ち据えて来た男だった。

「……ざまア、みる」

子供がそう呟くと、黒雅がその男に向かい、のそりと一步を踏み出す。そして次の瞬間大きく跳んで、藻掻くその背に飛び乗った。「ウガッ！」

強靱な前足に踏まれ、ぼきりと背の骨が鳴る。黒雅は僅かに子供を振り返ってから、ぐわ、と鋭い牙を剥き出し男の首筋へ噛み付いた。

「ひぐう、ガフツ、ゲツ……」

黒雅が何度も噛む度に、牙が深く打ち込まれる。闇に濁った血が幾度も飛び散り、骨が砕け鈍く響いた。そしてそのまま噛み切れば、男の首は胴を離れて転がり、悶絶の表情を闇空に向けて止まった。

「ふふ……ふふふふ、クククツ」

呆気無い、事切れだ。そう思うと、吐き気がして手足が震え、腹が熱くなる。自分を虐げ、虫けらのように扱った男の、虫けらのような最期。子供はそれを見て、乾いた笑いを上げた。

すっかり屋根が黒炎に包まれた集会処からは、悲鳴と共に女子供が走り出て来る。炎は既に人々の体に燃え移り、ある者は逃げ出た傍から犬達に食い付かれ、またある者は炎にまみれ、生きながら腐れ行く。あつという間に辺りが生臭さに包まれる中、庇うように幼子を抱えた母親が、子供の前に倒れ込んだ。

「助けて、助けてえ！　お願い、この子だけは……！」

母親は背を焼かれながら、泣きじゃくる幼子を強く抱き締めて叫び続ける。子供はじつとその光景を見ていたが、急に黒雅の背から飛び下りると、傍らで刃を奮う黒牙乾に駆け寄った。

「なあ、たす、たすけて！」

「アア？」

「だって、泣いてる、いたいんだ、だから」

「そんな情け、一体何になる？」

「……え？」

黒牙乾は血塗れた太刀を払うと、子供に鋭い視線を向けた。

「庇護を失った餓鬼は、飢え死にするか、獣や魔物の餌になるだけだ。万一生き延びても、成長し自分の生い立ちを知れば、必ず恨みを抱え復讐人となる。なら、ここで母親と一緒に息の根止めてやっただ方が、幸せだ」

「でも……！」

「それに、これは俺の『契約』だ。お前が口を挟む話じゃねえ」

黒牙乾は子供の情けを無情にも切り捨てると、既に虫の息で転がる母親と、その腕の中で泣きじゃくる幼子に、背から太刀を突き立てた。

ひうつ、と甲高い声を最期に、幼子の泣き声が止まる。それを見て、子供は思わず顔を背けた。

ごく幼い頃、共に囚われていた母の記憶が甦る。母はいつも優しく、そしてこの事切れた母親のように、時折村人から受ける暴力から自分を守ってくれた。

だが母はある日、姿を消した。

「う、うう、くうっ……」

忘れ難い記憶に、子供が頭を抱え苛まれるのを見て、黒牙乾は淡々と問い掛けた。

「なあ、餓鬼。お前は憎くねえのか？ お前を穢れと蔑んで来た、この村が」

「……」

「憎いんだろ？ お前を閉じ込めて苦しみ、お前を騙して、見殺しにしようとした村長も——俺が手伝ってやるぜ。恨みを晴らしたいならな」

本心を言え、と緋の瞳が囁く。その暗く輝く色に、子供は心の奥底まで、総てを見透かされている気がした。

憎い、あの男が憎い。

自分の腹の底にどす黒く溜まった感情が、じくじくと疼き蜷局とくるを巻く。それが黒牙乾の言葉に鎌首もたを擡げ、喉元まで這いずり、舌を冒して行く。

「あいつを、ころして、やる」

発した声が入り震えている。しかし露草の瞳は酷く歪み、怒りに染まっていた。

黒牙乾はにたりと笑うと、手にしていた自分の太刀を子供に握らせ、再び指笛を鳴らした。すると、暴れて居た犬たちが一斉に頭を上げ、主の指示に従い村の奥へと走り出した。

「さあ、そうと決まったら行こうぜ。狸野郎の間抜け面を拝みにな！」

まるでちよつと遊びにでも行くような調子で、黒雅乾は声を上げて踵を返した。そしてその背があつと言う間に、三軒も向うに飛び行き小さくなる。

「ああ、まって……うわあッ！」

子供が後を追うべく慌てて走り出すと、すぐ前に黒雅が飛び込んできた。止まれずつんのめり、その背に倒れ込むのを『乗った』と判断したのだらう。そのまま走り出した黒雅は、大きく跳躍して屋根の上を横切り、最短距離で村長の家へ向かった。

後に残るのは、まだ燃え続ける黒い炎。血臭と腐臭漂うその辺りには、既に生者は居なかった。

初ノ六

その頃。

村長である義兵衛は、上機嫌で杯を手に行っていた。

明日には娘が城へ上がり、義理とは言え、いよいよ武家と縁が出来る。あの殿様の縁者ともなれば、この村は近隣から羨望の的となるに違いない。そして城の家老は支度金やら何やらと言う名目で、しばしば纏まった金子きんすを寄越すと約束してくれた。これで我が家も安泰である。

集めた村の顔役達や男衆が、娘を祝い酒を酌み交わすのを、満足気に眺めた後。義兵衛は傍らに座る娘へ、猫撫で声で笑い掛けた。
「それにしても。本当にでかしたぞ、お佐代。よう殿様に見初められたなあ」

「はい……」

お佐代は俯いたまま答えると、綺麗に着付けられた小紋の袖を、ぐいと握り締めた。

本当は、気が進まなかった。何を好きこのんで、まだ十四で父親と変わらぬ年頃の男に、囲われねばならぬのか。

しかし『側室になるか、贅になるか』と問われれば、否応なしに選ばざるを得なかった。贅になれば間違い無く、辱められて喰われる。そんな死に方は耐えられなかった。

その上、父は黒牙乾との『契約』を破り、陰陽師を呼んだ。今頃はきっと退魔の最中だろう。必ず滅すると彼は約束したが、もし失敗したら、黒牙乾は自分を拐いに来るのではないだろうか。そう思うと、とても微笑んでなぞいられない。

村の男衆が酒や御馳走を楽しむ中、お佐代は義兵衛に酌をすると、少し下がって座り直し、お伺いを立てた。

「とうさま、私はそろそろ休みとうございます」

「おお、そうだったな。明日は早い、湯を済ませて早々に休め。せ

つかくの器量良しが、疲れた顔を見せるのは良くないからの」

義兵衛はそう言つと、きちんと挨拶して宴を抜ける娘を見送り、また杯を呷つた。

「ほんに良く出来た娘に育つたもんじゃ。母親譲りの器量良しだものなあ」

「そうそう、義兵衛さんに似て、頭も良いしのう」

「きつと殿様も、長々大切に可愛がつて下さるて」

そう皆が口々に誉めるのを聞きながら、義兵衛はあの女を無理して手に入れた甲斐があつたと、内心ほくそ笑んだ。

お佐代の母は、城下へ旅した際に見初めた町娘だった。衝動を抑えられず手強めにし、無理矢理妾として連れ帰つたのが十五年前。お佐代を産んだ後、産後の日経ちが悪くて死んだが、その死に顔すら美しかった。

幸せでは無かつたかも知れない。だが、女として充分可愛がつてやつたし、子も産ませてやつたと、義兵衛が自分勝手な満足に頷いていると。ばたばたと廊下を走る足音と共に、若い男衆が宴へ掛け込んで来た。

「そ、村長、大変ですだ、黒牙乾が……！」

「何？ 黒牙乾だと？ あれは周防院殿が始末を付けて……」

「でも、でも、村が！」

ぜいぜいと膝を付く男衆の横から、皆が我先にと外を覗く。すると集会処の方角から吹く風は生臭く、堀の向こうからちらちらと闇が蠢いていた。

「何だ、あの黒いのは？」

「——俺の炎だよ、阿呆な人間どもめ」

訝しむ場にそぐわぬ楽し気な響きで、そう低い声が答えた矢先。皆の目の前の庭先に、黒牙乾が降り立った。途端に場に満ちる禍々しい雰囲気、皆の顔が恐怖に染まる。

「う、うわ、うわあああ！」

一人が叫びを上げると、たちまち場は混乱し始めた。逃げようと

する者、手に武器を持つ者、片隅に小さくなり、泡吹きながら必死に念仏を唱える者――その中で村長の義兵衛だけが真っ青になりながらも、黒牙乾を睨み付けていた。

「周防院殿は、どうした？」

「アア？ あの間抜けなお貴族様か。喰っちまったぜ」

「何！？ そんな馬鹿な……」

「馬鹿はお前だ、義兵衛。あんな祈祷料だけの鈍雇^{なまくら}うなんてよ。しかし、村に良くそんな金があったもんだ。だが役にも立たねえと来りや、その大金も溝^{どぶ}に捨てたようなもんだな、あーあ勿体無え、ハハハハ！」

そう黒牙乾が嘲笑うのに、義兵衛がぎりぎり悔しげに齒を鳴らす。そこへ村で一番の狩人が踊り出て、義兵衛を護るように弓を構えた。

「黒牙乾、これを見る！」

「は？」

「これは周防院様からお預かりした、破魔の矢だ。これでお前の、心の臓を射てやる！」

そう叫びを上げると、間髪入れず黒牙乾に向けて矢を放つ。鍛練され良く磨がれた鋭い矢は、あつと言う間に胸の真中を穿った。

思わず黒牙乾が呻き、前のめりに屈み込む。狩人は更に矢を構えると、思い切り叫んだ。

「怯むな、やれ！」

狩人の声到我に還った男衆は脇差を手に取り、札や浄化の御水を引つ掴むと、次々に黒牙乾へ駆け寄った。

宴の席に黒牙乾が現れたあたりで。

湯に浸かっていたお佐代は、何やら騒がしい声に気付き、耳をそばだてていた。

先程までの浮かれた声とは違い、怒号や悲鳴が聞こえて来る。何かあったと慌てて湯から出て、肌襦袢を纏い脱衣場から飛び出た途端何かにつづかり、思わず悲鳴を上げた。

「きやあつ！」

「うわっ！」

脱衣場に引っくり返って尻餅を付き、思わず痛みに呻く。そして肌蹴た襦袢を直すより、目の前に揺れる姿を見て、お佐代は真っ青になった。そこには汚れた白無垢を纏い、鮮やかで忌まわしい色を持った子供が、驚いた顔で立っていたのだ。

「穢れの……子？」

「！」

それを聞いた途端に、見る見るうちに子供の顔が憎悪に歪み、唇がぎりりと結ばれる。慌てて逃げようとお佐代が身を擦るより早く、子供は駆け寄り、その肌蹴た体の上に馬乗りになった。

「おまえが、むすめか？」

「ひいつ、嫌あつ！」

「いえッ！」

上から強い一喝を浴びせられ、お佐代は恐怖に固まった。押し掛かる山吹のざんばら髪や、怒りに燃えた露草の瞳が恐ろしい。纏う白無垢が所々赤く血で染まり、まるで昔話に出てくる人喰い夜叉のように見えた。

「い、やあつ、殺さないで……」

はらはらと命乞いの涙が、お佐代の瞳から溢れる。子供はそれを暫く睨んでいたが、ふと表情を緩めると、ぼつぼつと口を開いた。

「俺は、おまえの、かわり」

「……？」

「たすけてやるから、黒牙乾を、ころせ、と。でも、あいつ、うそついたん、だ」

「え？」

「どうして？ どうして、だます？」

「……」

「けがれ、だから？ けがれだから、虫けらみたい、しねって、か？」

そう呟く子供は酷く悲しげで、そのまま泣き出しそうにも見えた。だがお佐代はただ恐怖に駆られ、子供に問われた答えなど、全く思いつかない。

「……許し、て」

泣きながらうやと絞り出したのは、許しを乞う短い一言だけ。

しかし子供は、却って不快そうに眉を寄せた。

「……こたえろ」

「殺さないで……お願い」

「いえ、はやく」

「もう……助けて、お願い……許し……」

「こたえろオオオ！」

子供がそう叫んで、握り締めた太刀を思い切り振り被った。

――殺される！

咄嗟にお佐代がきつく眼を瞑り、両腕で顔を庇う。だが、直ぐに襲い来る筈の死は、いつまで経っても訪れなかった。

ふと、身の上に被さっていた気配が離れて行く。それまで叩き付けられていた激情が消えたのに、そつと瞼を開けると。子供は傍らに膝付き俯いて、僅かに肩を震わせていた。

「――いけ」

「……？」

「はやく！　ころすぞ！」

「ひいつ！」

お佐代はその怒号に飛び起きると、這うように脱衣所から逃げ出した。

襦袢は脱げ掛け、殆ど肌も露わにしたままで、ただ必死に廊下を走る。どこから外へ出なければと、回らぬ頭で必死に考えながら厠から女中部屋の前を通る廊下を曲がった。その先に勝手口があるのを思い出し、僅かにお佐代が安堵した矢先。眼前に燃えるような緋の双眸を持つ、虎ほどの大きな獣が現れた。

「い、いや……」

黒い炎を纏い低く唸る黒雅は、思わぬ獲物を見つけたと言つように、お佐代へ悠々と近付いて来る。そして慌てて逃げ出した白い背を目掛け、牙を剥き飛び掛かった。

遠くからお佐代の魂消る悲鳴が響くのを、子供は風呂で俯いたまま、身動きもせずに聞いた。

初ノ七

ひたすら刀を振り下ろし、突き刺し、足蹴にする。

暗い庭先に蹲った黒い塊は、先程崩れて縮こまったきり、全く動かなくなった。さすがの黒牙乾も、不意を突かれここまで傷めつけられれば、既に虫の息だろう。何より最初に心の臓を射抜かれたのだから、もしかしたらもう死んだのかも知れない——群がる村人はそう思い、攻撃の手を止めた。

「おおつ、何だこりゃあ？」

しかし良く良く覗き込めば、そこには真つ黒な闇の塊が渦を巻いている。まさか打ち据え斬り付けるうちに、溶けて水様になってしまったのだろうか。それとも幻術か何かかと、皆が怖気に駆られ一歩退いた矢先。闇の中から黒く長い物が伸び、あつと言う間に一番近くにいた男衆の足に絡みついた。

「うわ、うわあああ！」

絶叫を残し、助ける間も無く引き摺り込まれる。そうして更に二人、三人と消えるのを見て、村人は慌てて後ずさった。

「楽しかったかよ、成敗ごっこはよお？」

その声が響き、闇の中から黒牙乾が浮き上がって来る。まるで水面から生えて来たかの様にも見えて、その不気味さに益々悲鳴が上がった。

「何故、破魔の矢が、効かない……？」

畳の上で震えながら狩人が呟く。それに矢を抜きながら、黒牙乾は笑って応えた。

「こういうもんはな、素人じゃ効果が薄いんだよ」

「え？」

「ちゃんと修行積んでる奴が気を籠めて撃たなきゃ、俺みたいなのは効かねえ。残念だったなア、いやあ、本当に残念！」

黒牙乾はそうおどけて見せると、次の瞬間、無造作に矢を投げ返

した。それは弓で打つより早く飛来し、真っ青な顔で立っていた狩人の額に命中した。

「か、は……」

僅かに空気を吐いて、ゆっくりと後ろに倒れ込む。そして村長に寄り掛かり、押し遣られて畳に崩れた。

「ひいひい!!」

「逃げろおお!!」

完全に肝を潰した皆が、本格的に逃げ出す。だが黒牙乾はそれを追わずに、余裕綽々で眺めていた。屋敷の中外には黒炎の犬達が、獲物が現れるのを虎視眈々と狙っている。あちこちで響く、それに襲われた村人達の断末魔を聞きながら、義兵衛は乾いた唇を震わせた。

「皆殺し、する気か」

「ああ。お前の四代前の村長と『契約』した時に、決めた事だ。残念だが、俺は約束は守る性質たちだから、今更命乞いなんかするなよ」
そう笑顔で言い放つ緋の瞳の、何と冷たい事か。義兵衛は恐怖に麻痺しかけた理性を叱咤し、生き残る為にあらゆる策を思い巡らせた。

生半可なものでは、誤魔化し出来る相手ではない。へつらわず、対等に、あくまでも利があると思わせなければならぬ。そうして何とかそれに見合うものを考え付き、義兵衛は不敵に微笑んだ。

「のう、黒牙乾よ」

「アア？」

「かの陰陽師、何処からの口利きで呼んだか、判るか？」

「さあな」

「懇意にして頂いている、さるお殿様だ。そして明日には、お佐代を通じて縁を結ぶ」

義兵衛が薄ら笑いを浮かべながら、その高貴な名を呼ぶ。そして黒牙乾の表情を窺いながら、いよいよ本題に触れた。

「さて。もしお前が僕に手を掛ければ、お前の名が即座に『法院処』

へ届け出られるよう、手配してある。さすれば……どうなるか、判るな？」

「……」

「だが、もしここで手を引くなら、その届けは出さんで置こう。村人を喰い散らかしたのも、咎めん。更に新たに契約を結び、贅は二人に増やそう」

「なに、二人だと？」

ひくり、と凜々しい眉が上がり、黒牙乾が僅かに身を乗り出す。

これは良い感触だと内心ほくそ笑むと、義兵衛は言葉を続けた。

「のう、悪い話ではあるまいに。生娘でなくて良いなら、三人でも構わぬ。とびきりの良い女を揃えよう。煮るなり焼くなり、喰らうなり、好きにすれば良い。こんな良い話は、他所の村には無いぞ、判るな？」

さあ領けと言わんばかりに、義兵衛が猫撫で声で問う。すると黒牙乾は酷く嬉しそうに笑い返して、朗々と答えた。

「判らねえな、この強欲色情狂」

「な、何だと！」

「美味そうな戯言ばかり並べやがって、誰がそんな話に乗るかよ。第一この村にや、もう女子供は居ねえんだよ」

「……まさ、か」

にやり、と悪どく微笑む黒牙乾の表情に、既に殺された事実を読み取り、義兵衛の顔が青くなる。

「まさか……そんなッ」

「あ、それに俺、あの餓鬼と約束しちまったんだ。手伝ってやるって、よ」

「な、に……？」

「黒雅！」

黒牙乾が鋭く呼ぶと獣の咆哮が響き、程無く重い足音が近付いて来る。そうして、ぬう、と覗いた獣の後から、太刀を携えた子供が現れた。

「お前……生きて、いたのか？」

吐息のような、義兵衛の震える呟きに、子供は眉を寄せ怒りの瞳で睨んだ。すると義兵衛は突然吹き出し、してやられたと首を傾げた。

「そう言う事か……やはり、穢れの子だな。魔物と手を組みおったとは。ククク、一体どうやったのだ。泣き落としか、己の魂と引き換えか、それとも、その双成りの体で惑わしたか……」

「うるせえッ！」

腹に据えかねる暴言に、子供がちゃきりと太刀を構え直す。その瞳が強い殺気を放つのに、義兵衛は慌てて黒牙乾に縋った。

「な、なあ、黒牙乾、この餓鬼を殺してくれ！　うちのお佐代をお前にやるから、生娘だ、まだ十四の、頗る器量良しだ。こんな餓鬼より余程楽しめるぞ？　それから、幕府には言わぬ。だから、だから儂を……」

「別に構わねえよ。俺は」

「……は？」

「幕府に届け出たって、別に良いぜ。黒牙乾つてのはお前等が勝手に付けた名だし『台帳』に乗ってんのは、お前等の知らない俺の名だ。だから、そんな脅しは最初っから、意味が無えんだよ」

「何だと？　そんな、馬鹿な……」

苦肉の謀が総て崩れ、いよいよ絶望が義兵衛の面を染め上げる。

黒牙乾はそれを楽し気に眺めると、徐に子供に呼び掛けた。

「さあ、餓鬼。心行くまで、好きにやんな」

その声と共に、子供がゆっくりと義兵衛の前に進み出る。そして、低く掠れた怒りを吐き出した。

初ノ八

「うそ、ついたな」

その言葉に眉を上げると、義兵衛はいきなりけたたましく笑い出した。

「嘘、だと？　それがどうした、穢れの癖に。お前がそんな恨み言を言うとはな。本来なら殺すところを、お情けで生かしてやったのだ。感謝するなら未しも、恨む等とは片腹痛いわ」

「うるせえッ、この、ひとでなしッ！」

「おお、何を言うか、お前こそ真に人で無しよ。その体には、魔物の血が流れているのだからな」

「ちがう、俺は、まものじゃないッ！」

握り締めた太刀の切先を、怒りで細かに震えさせながら、子供は更に義兵衛へ近付く。追い詰められ棄て鉢になったのか、義兵衛は額に血管を浮かせ、癪癪持ちのように叫んだ。

「良いか、穢れの餓鬼よ！　お前の母は、魔物に犯されたのだ。ああ、色の白い大層良い女だった。器量も、体もな」

「いうなッ！」

幼いころから、何度この忌まわしくも辛い話を聞かされ、その度に心の中でこの男を殺した事だろう。子供は眼で射殺さんばかりに、義兵衛を睨みつけた。しかし義兵衛は眼を細め、鼻で笑い飛ばした。

「お前を産んでから、時々穴蔵から連れ出して、こっそり慰めてやった。その度にあの女は喜んで、悶えながら泣いておったぞ」

「うるさい……」

「お前が這い立ちした頃には、あの淫売は気を遣う時に、首を締められるのが好きになってなア。最期がどうだったか、もう一度事細かに話して……」

「だまれ、いうないうな、いうなアアッ！」

「ゲハアッ！」

頭の中で何かがふつりと音を発てて切れ、子供は絶叫と共に、義兵衛の肉々しい腹へ突っ込んだ。

太刀は一気に義兵衛を貫き、血に塗れた切先を長く突き出す。そのまま倒れ込むと、義兵衛から蛙を踏んだような声が洩れた。

「ぐえええっ、がふっ、ううっ」

「お前、こそが……ばけものだッ！」

義兵衛がひいひいと息を吐く度に、太刀から命の震えが伝わる。それが子供の腹に棲む、あの黒い感情を揺さぶった。

こんな奴は殺してしまえ——それが、陰湿に囁く。

子供は飛び起き、刺さった太刀を力一杯引き抜いた。そして頭上に高く振り被ると、義兵衛の脳天を一撃した。

「ギャアッ！」

「はっ、はっ、はーっ、ふーっ……」

初めて感じた頭蓋の碎ける手応えは、思いの外爽快だった。

もう一度同じように刃を見舞うと、血と桃色の塊が勢い良く飛び散る。それがこの薄汚い男の中身にしては、勿体無い程綺麗に見えて、子供は何だか可笑しくなった。

「ククッ、フッフ……ハハハハッ」

転がる義兵衛へ斬り付けるたび、骨肉が爆ぜ生温かい血が頬に跳ねる。それが酷く不快で、己が穢れて行くようで、子供は何度も腕で拭った。

崩れた顔面、痙攣する手足、響く粘付いた赤色と、満ちる腐臭——頭の中で自分の笑い声が混沌と渦を巻き、熱くなる体とは裏腹に、こめかみから冷気が満ちる。笑いは収まらず、刃はひたすら足元に転がる体を刻む。だが、やがて血濡れた切先が震え、太刀を振り被る腕が覚束なくなった。

「止める。もう死んでる」

下ろした腕を黒牙乾に制止され、ようやく笑いを止めた子供は構えを解いた。そして改めて人間だった肉塊を眺め、細く長い息を一つ吐いた。

「……ざまア、みる」

そう呟いた血塗れの頬には、一筋の涙が伝っていた。

裸になり、真っ赤に染まった両手の布を解くと、貫かれた傷は既に塞がり始めていた。

もう温くなった風呂の湯で身を清め、勝手に入った部屋の箆笥から、適当な下着と半着を身に付ける。そして帯を締め、身の丈に余る茶袴を無理に穿くと、子供は台所へ向かった。

あちこちに転がる骸を乗り越え、棄てられていた宴のご馳走の食いさしを、野良犬のように漁る。そうして腹を満たすと、そのまま屋敷の玄関を出て、外に居る筈の黒牙乾を探した。

途中、ふと見上げた空に月は無い。東の空は蒼味を帯び、もうすぐ訪れる夜明けを知らせている。

徐々に去り行く闇が、一夜にして崩壊した村の姿を遺して行く。

生ける者が他に誰一人居ないのに気付き、子供はふりりと身震いすると、声を張り上げた。

「黒牙乾！」

返事はない。廃墟と化した場に、ただ己の声だけが響き渡る。もしや既に去ってしまったかと思うと、膝頭が僅かに笑い出し、冷や汗が出た。

「黒牙乾！」

再びその名を呼ぶが、やはり返事は無かった。子供は慌てて走り出すと、村長の土地を抜け大路へ向かった。

連なる家屋を燃し尽くした黒炎は既に消え、それに冒されたものは、人さえも灰に成り果てている。だが戦く余裕は、子供には無かった。何故かは判らないが、今は黒牙乾を見付けねばならないと、ただそれだけを考えていた。

大路を抜け、もう一度黒牙乾を呼ぶ。そして上がった息にもうこ

れ以上走れぬと、子供が立ち止まった途端。悠長な声が、背後から響いた。

「何を焦ってやがる？」

「黒、牙乾……」

「黙って消えたかと思ったか？ 何だよ、見付けて安心したような声出しやがって」

「……っ！」

凶星を当てられたのを誤魔化すように、現れた黒牙乾を子供が睨み付ける。黒牙乾はその様子を腕組みしたまま見ていたが、ふと微笑むと、子供のざんばら髪に手を伸ばした。

「なに、する？」

「伸び放題で邪魔だろ、結わえてやる」

そう言いながら、黒牙乾は手櫛で器用に山吹の髪を纏め、どこから取り出した緋色の組紐で締めた。

「懐かしいな、昔は良くこうして、アイツの髪を結わえてやったもんだ……そら、出来た」

「あ、ああ……」

そう小さく応え振り向いた子供を見て、一瞬黒牙乾は戸惑った。前にこんな光景を見た記憶がある。あれは確かまだ相棒がいた頃だったと思えば、不思議とこの子供がその面影に重なった。

もしかしたら登り始めた朝陽が、この子供の髪を金に染めたからなのかも知れない。黒牙乾は記憶の奥に揺れる、獅子の鬣たてがみにも似たそれを懐かしみながら、子供を見詰めた。

「黒牙乾？」

「アア？」

「これから、どこ、いく？」

「さあな。お前はとうすんだ？」

子供は少し唇を噛み、ちらりと大路を振り返った。そうして真っ直ぐ黒牙乾に向き直ると、小さく、しかしはつきりと応えた。

「おまえと、いっしょにいく」

「ええ、本気かよ？」

「ほんきだ」

そう発した子供の瞳は、強気な言葉とは裏腹に、拒絶への不安を滲ませている。

置いて行くのは容易い事だった。連れて行けば面倒が増える事も予想出来た。だがもし置いて行つたならば、この子供は確実に生き残れぬだろう。この容姿で普通に暮らす事は叶わぬだろうし、一人で生きるにしろ、身を守るだけの強さも持たないからだ。

黒牙乾は眉を寄せ呆れた顔を作ると、ぼりぼりと頭を掻いた。

「……仕方無え餓鬼だな。じゃあ、名前、何て言つんだよ？」

「ない」

「ハア？ 付けて貰えなかったのか」

「ああ」

これも悲しい思いの一つらしく、子供は口をへの字に曲げ、そつぽを向いている。黒牙乾は少し迷ってから、小さな溜息を吐いた。

「じゃあ、俺の相棒の名を一文字付けてやる。お前はこれから『燕』だ」

「えん？」

「ツバメの意だ。長い冬の終わり、季節が春に移る頃に飛んでくる……おおっと、文句言つなよ、言ったら置いてくからな」

「……ふん、もんくなんか、ない」

燕と名付けられた子供は一層口の端を曲げたが、満更でもないらしい。頬を染め、何度もその名を小さく反芻してから、やおら黒牙乾を見上げた。

「なあ、じゃあ、おまえは？」

「ん？」

「黒牙乾じゃない、ほんとの、名は？」

「……ひゅう 緋雄」

久しく口にしなかった真の名を告げながら、緋雄は不思議な気持ちになった。

何故、こんな人間の子供に、すんなり答えてしまったのだろう。

元々この子供は只の『贅』であって、本当の事を教える義理など無い。そのうち気が変われば喰らってしまうかも知れないのに、すっかり相棒を思い起こすような名まで、付けてしまった。

あの生臭陰陽師を喰らったから、こんな一時の迷いが生まれたのだろうか。そんな馬鹿馬鹿しい戯言を思い付く己に脱力し、思わず耳がくにやりと垂れそうになる。そんな心中を知らない燕は、にやりと笑って呟いた。

「ひゅう、か。つよそうな、なまえだ」

「アア？ その物言い、何か引つ掛かるなア。まるで俺が弱いみたいだろ」

「いや。でも耳、へんなとこに、ついてる」

「ウルセエや、この糞餓鬼！」

そう歯を剥いて見せれば、燕は屈託の無い笑顔で身を翻し、小突こうと伸ばした手から逃げて行く。それが籠から放たれ自由に翔ぶ鳥のように、緋雄には見えた。

朝陽は空を暁に焼き、新たな一日の始まりを告げる。

目に映る世界を染め上げる柔らかな光は、燕の行く新たな道をも照らしているようであった。

暁空 初・了

初ノ八（後書き）

参考音源／暁をのこして（Acidman）

閑話・惜想零 其ノ壺

その女の名は、おゆう、と言った。

長い髪は緩く櫛で結われ、器量良しかつ背のきりりとした、気の強い女であつた。

その強くも儚い生き様を、燕は生涯忘れないだろう。

巷ではある北の村が魔物に襲われたと囁かれ、それを確認した例の殿様が、幕府へ『黒牙乾』の報告を為した頃。緋雄と燕は、北ノ郷村から南に三日ほど歩いた、ある山中に居た。

険しい斜面の上にある緋雄の峙ひくえは、知らねば見つける事の出来ぬよう、巧みに隠されている。夕陽が辺りを橙に染める中、緋雄は後からぜえぜえと着いて来る燕を、横目で軽く睨んだ。

「ああ、ようやと着いた。全く、お前の足が遅えんだよ」

「はあ、はあ……ちがうって、なんで、こんなところに、すむんだよ？」

「アア？ そりゃ、俺が魔物だからだろ」

緋雄はそう眉を顰めると、その体軀に似合わぬ身軽さで、跳ぶように斜面を登った。

かなりの傾斜の上に、崩れやすい質の岩場は、大人よりも身軽な燕にすら非常に登りづらい。四つん這いになり、しがみつくようにしても中々進まず、終いには足を滑らせ転けてしまう。

「畜生、ばかつ、のぼれねえッ！」

思わず燕が吐いた悪態に、先に行く緋雄の耳がひくりと動く。するとその背が振り向き一跳びし、ひらりと燕の傍らへ降りた。

「どれ、仕様が無いな、この餓鬼は」

「う、うわー！」

「暴れんな、上から落とすぞ馬鹿ッ」

まるで荷物でも持ち上げる如く、緋雄は燕の腹に左腕を回すと、軽々と抱え上げた。そしてそのまま大きく跳び、斜面の上まで一気に上がった。

「おろせつ、ばか緋雄ッ」

「手伝つて貰つたくせに、何だその言い草は？ 素直に礼くれえ言つてみるよ」

恥ずかしいのか何なのか判らないが、顔を赤らめた燕がそう噛み付くのを、緋雄は呆れたように受けた。

——ここまでの道中、緋雄に助けられる度に、燕は反抗的な態度を見せた。子供の癖に子供扱いされるのを嫌うのだから、全く困つたものである。なら、着いて来ず勝手にすれば良いと緋雄が言い放てば、嫌だと叫んで必死に追いかけて来る。

本当に、可愛気が無い。こんな調子では先が思いやられると、緋雄は暴れる燕を下ろし、内心で頭を抱えた。

そこから森の中に少し入ると、二人の眼の前に、何処からともなく一人の幼女が現れた。おかっぱと赤い着物は一見人間に見えるが、無表情な顔は嫌に白々として、大きな瞳は総て黒眼で占められている。その異様さに燕が啞然とする前で、幼女は緋雄に畏まり、頭を垂れた。

「おう、小守。変わりは無えか？」

そう緋雄が問うのにこくりと頷くと、小守はこちらに背を向けて、小さく口笛を吹いた。

するとそこにある木立がゆらゆらと歪み、奥から武家が住まうような、立派な屋敷が現れた。これが緋雄の埒らしい。彼は傍らの小守に礼を言い、その頭を一つ撫でてから、燕を伴い門戸を潜った。

「小守つて、なに？」

「ああ、ありやこの辺に昔っから住んでる魔物だ。ここの埒に纏わる事と、おゆうの世話を全部任せてる」

「おゆう？」

知らぬ女の名に、燕が訝しがる処へ。奥から鶯の着物を纏った妙齡の女が現れ、こちらへ急いでやって来た。

「お帰りなさい、旦那！」

「おう、悪いな、ちよつと遅くなつちまつた。思わぬモンを拾つちまつてなア」

そう緋雄は言つと、帰宅を迎えた女に相好を崩した。

女は寂しかったとか、逢いたかったとか言いながら、草履を脱ぐ緋雄の背に絡み付き、その長い髪を愛おしげに指で梳いている。まるでその眼には、傍らに立つ燕の姿なぞ、全く映って居ないようだ。そんな女の様子に、燕がどうしたものかと困っていると、緋雄は燕に草履を脱げと示してから、女の肩を抱き寄せた。

「おゆう、この餓鬼は燕だ。お前の村から拾つて来た。何にも知らないから、色々教えて仕込んでやつてくれ」

「旦那、まさかこの小汚い子供が、『贅』だったのですか？」

「あー、まあ、事情があつてな。そういう事だから、宜しく頼むぜ」
「嫌です」

おゆうはきりりと柳眉を釣り上げると、上からしたまでじろじろと燕を見回してから、硬い声でそう切つて捨てた。

「まずもつて、汚い。先にちゃんと洗つて、その土汚れを落としてからでないと、私はその子と話もしたくありません」

「ああ、そうか。じゃあ燕、取り敢えず風呂に入つて来い」

「旦那もです。随分と血の匂いがします。私が湯に入れて差し上げますから、召し物も変えて下さいね」

「……おう」

「お前もまだまだ上がらないで。家に上がる時は、必ずその桶の水で、足を洗いなさいよ」

「へ？」

「燕、言われた通り洗つとけ」

強い調子で指図するおゆうに気圧されし、おたつく燕はおるか、主である緋雄さえも異を唱えられない。まるでこれでは、ここの主

人はおゆうでは無いか。足を洗った途端に背をせつつかれ、真つ直ぐ湯殿に連行される緋雄を見て、燕は呆れた笑いを洩らした。

「痛つ、痛いつて、さわんな、ばかッ！」

散々嫌だと言つたのに、介添えについた小守に、糠やら灰やら付けた手拭いで、全身をこしこしと擦られる。それが終わると今度は、何回も頭から湯を掛けられた。

穴蔵に居たせいか、燕に入浴の習慣は無い。贅になる時に入つたのが初めてだったから、小守が手拭いで擦る度に、まるでおろし金で擦られる大根宜しく、体からたくさんの垢が出た。その量たるや、流石に小守も顔を顰めたくらいである。

それに、湯に入ると体がふわりとするのも、水や湯に浸かつた事の無い燕には慣れない。総檜の浴槽がやたら大きいのも、何だか流されそうな気がして怖くて、へりに爪を立てて掴まつた。

そうしてすっかり綺麗になつた燕は、脱衣処に用意された着替えを見て、あんぐり口を開けた。

それは白地に桜模様の上等な袷であつたが、その華やかな色合いは、記憶の中でいつも母が纏つていた着物と良く似ている。つまり自分は女として扱われていると曲解した燕は、途端に顔を顰めた。

「おい、小守ッ　なんだこれは！」

そう傍らの小守に苛々と叫ぶと、小守は小首を傾げたままで、すう、と消えて行く。どうやら都合が悪くなると、逃げる性質らしい。「コラッ、にげんなばかッ、まで、ちくしょうっ！」

暫く小守を呼んだが、一向に姿を現さない。脱いだ物も既に片された後である。燕は文句を言いつつも、仕方無く着替えを纏つた。

案内されて来た廊下を一人戻り、うろうつと広い屋敷の中を彷徨う。そのうちに美味そうな、良い匂いが流れるのに気付いて、燕はそちらへと歩みを進めた。

近付くと、幾つも連なる襖の向こうから、楽しげなおゆうの声が

聞こえる。どうやら早々に上がった緋雄と共に、既に寛いでいるらしい。少し気後れしたが美味しい匂いに耐えきれず、燕は襖をがたりと開けた。するとただ広い部屋の真ん中で、二人は何やらじゃれ合いながら、楽しげに笑っていた。

「……あら、似合うじゃないの」

少しの間の後に、僅かな皮肉を滲ませて、おゆうがそう呟いた。二人の前には酒と肴の乗った脚付膳が置かれ、足を崩して座ったおゆうの膝には、緋雄がご機嫌で頭を載せている。

魔物と言えども、大の男がへらへらと女の膝に甘えて、何と情けない姿であろう。燕はそう思うと、二人の前へ無遠慮に進み、膳の前にどつかと座り込んだ。

「おい、ばか犬」

「アア？犬言うなって、言っただろうが」

「うるせえよ、はずかしい。男のくせに」

そう燕が憎々しく言った途端に、おゆうは立ち上がると燕の傍に行き、その山吹の頭をばかり、と叩いた。

「いてっ！」

「何て口の訊きようだ、この礼儀知らず！」

「なっ……」

「全く生意気だね、お前は。拾って貰った癖に、旦那にありがとうの一つも言えないのかい？ そんな口を利くうちは、一緒に飯なんか食べたくもない。出てお行き！」

そう頭ごなしに叱られ、啞然とする燕の腕を、おゆうは乱暴に掴むと無理矢理立たせた。そうしてずんずん引つ張り、廊下まで押し出すと、ぴしゃりと襖を締めてしまった。

「な、なんだよ、ちくしょう！」

この、いきなりの仕打ちは一体何なのか。燕は怒りに襖を蹴り上げると、どすどすと足音高く部屋を後にした。

結局この日、燕は別部屋で飯を食い、そのまま床に入った。

ふわふわと綿の入った布団に寝るのも初めてで、温くて心地良いものの、何だか落ち着かない。燕は眠れず、上掛けを海苔巻きの様に巻き付け、体を丸く横たえた。

もうあの穴蔵に戻る事はないと、頭では判っている。だが眠って目覚めたら、総てが幻で消えているのではないかと思うと、不安が押し寄せて来る。

「緋雄……」

一体今頃、何をしているのだろう。

段々堪らない気持ちになり、燕は起き上がると部屋を出た。

薄暗い廊下は冷え冷えとして、裸足の足裏にひたりと吸い付く。もう真夜中だからなのか、小守の姿も見えない。所々に蝋燭の炎が揺れる中を、燕は暫くあちこち歩き回って居た。しかし角を曲がると、ふとか細い女の声がするのに気付き、ついその方へ足を進めた。突き当たりの角を左に曲がると、薄ら灯りの漏れる部屋がある。

其処まで行く手前で、燕は不意に足を止めた。

襖の向こうから洩れるのは、艶かしく濡れたような、おゆづの高い声。つい固まる燕の耳に、それは何度も昂まりを含んで、一際高く響いた。

「ああ、旦那……黒牙乾、さま……ッ」

その名を呼ぶ声と息遣いが、襖の向こうで行われている行為を知らせて来る。燕は二、三步後退ると、背を向け逃げ出した。

其ノ貳

角を一つ曲がり、二つ曲がり、まるで何かから逃れるかのように、薄暗い廊下が続く限り走る。別に逃げる必要は無いのだが、何だか悪い事をしたようで、それが燕の心の臓を締め付け、足を動かした。そして、ふと気付けば行き止まりである。そこで立ち止まった燕は、ようやくとある事態に気付いた。

「しまった……」

見回せば灯りの無い長い廊下と、同じ柄の描かれた襖が延々続いている。迷ってしまったと気付いた途端に、燕は急に怖くなり、小さな声で小守を呼んだ。

「……小守、なあ、小守！」

何度か呼んでみるが、気配すら現さない。沈^{しん}と静まり帰った中に只一人だと思つと、急に寒さが増したような気がして、体がぶるりと震えた。

廊下をうつろつきながら、襖を細く引いて中を覗き回る。どれも人氣は無く、暗くがらんとした部屋ばかりだ。だが六つ目に覗いた部屋では、窓の障子が開けられ月明かりが差している。燕は其処に入り込むと、窓辺に近寄った。

月光を浴びる棧に置かれた一輪挿しには、可愛らしい白い花が飾られている。六枚の花弁は月の光を含み、自ら光るように輝いていた。

「何て、なまえなんだろ？」

そつと指で触れると、それはふるりと揺れる。その儚げな姿を眺めるうちに、何故だか涙が出て来た。

結局、何処へ行こうと自分は独りなのだと、燕は思った。母を失つて以来孤独だったから、この先もずっとそうなのだとも思った。今まで生き延びて来たのは、あの村長への恨みがあったからこそだ。それを果たした今、この身には一体何が残って居るのだろうか。

「生きるいみ、あんのかな……？」

「あるさ、お前にだって」

「ひっ！」

背後から響いた声に、燕が飛び上がり振り向くと、其処には鮮やかな青の襦袢を纏った緋雄が、軽く腕組みして立っていた。

「緋雄、なんで……」

「おゆうはもう寝入った。つかお前、屋敷の中で、何迷ってたんだよ？ あちこち走り回ってんの、聞こえたぜ」

「あ……」

緋雄はそう言つと、燕の横に腰を下ろした。すると、ふと香る白粉の匂いに気付き、先程まで彼がおゆうを抱いて居たのだと思ひ出す。思わず頬が熱くなるのを、燕はそっぽを向いて誤魔化し、口を尖らせた。

「しらなかった、あんな女、いるの。うそつき緋雄、ずっとひとりだつて、いったのに」

「ああ、相棒は居ねえからな。そういう意味じゃ間違つて無えよ」

「へ？　じゃ、あの女はなに？」

「あれは、十年前に貰った『贄』だ」

「え？」

意外な応えに燕が眼を見張ると、緋雄は笑つて月を仰いだ。

「良い女だろ。俺にベタ惚れで、しかも強くて可愛い奴だ。でも、あと一月持つかどうかってとこだな」

「どうして？」

「俺に、じわじわ喰われてるからさ」

緋雄はそう呟き、目の前の花に眼を落とした。

『贄』を喰らう——その行為は魔物にとって、人間が飯を食う事と同義である。そしてその喰らい方は様々で、食事のように食事もあれば、人間の男女のように肌を触れ合わせ、絡むように啜る事もある。強い魔物などは、指を当てただけでも喰らえるのだと言う。一般に、魔物は人間の魂を喰らわねば死ぬとされているが、それ

は正確ではない。

魔物は何も喰わなくても、命そのものを失う事は無い。ただそうになると徐々に邪気を失い、その体は古木のように干からび小さくなる。そうして弱くなつた魔物は、他の魔物に喰われたり、退魔され結果的に消える。だから魔物は魂を喰らうのだ。そして、それは緋雄も例外では無い。

燕は顔を顰め、緋雄を睨んだ。

「あんなになかよしなのに、どうして？」

「そりやお前、あいつは俺の『贄』だから」

「ハア？ わかんねえ、それ」

「判らねえか」

説明を求めて来る露草色の瞳へ、緋雄は応えるように言葉を繋げた。

「一度『贄』になつた娘が、稀に出戻つた時。その後どんな目に遭うか知ってるか？」

「……知らない」

「お前と同じように、穴蔵行きだ。例え穢されてなくても、魔物と目合つたと見なされる。だからおゆうは、村に帰る事を拒んだ」

聞けば『贄』となつて一年程経つた頃に、一度手放そうとしたらしい。離れた大きな街に送り出す事も考えたが、仕事のつても無く特別な技も持たぬ田舎娘がそこで生きて行くのは、大変な事であった。給金の安いその日暮らしに耐えきれず、大半は水茶屋か女郎か、夜鷹に落ちぶれる。

おゆうはそれを知っていた。そして、それよりも惚れた緋雄の傍で暮らす事を選んだ。だが、それは自分の命を削る結果にもなつた。「人間は魔物と目合つと、その度に邪気が体に溜まるんだよ。そしてある程度を越すと、溜まつた邪気に内側から魂を喰われて行く。おゆうは随分長生きしてる方だが、いよいよ最近、肌に現れて来た。遅かれ早かれ、死ぬだろう」

「しぬって……それで、いいのか？」

「ん？」

「俺、わからねえよ、緋雄。あの女、かわいそう、だ」

「……」

「あの女が、しぬつてのは、お前が、ころすのか？ お前が、まものだから？」

そう非難めいた声を燕が上げると、緋雄は酷い言われようだと困ったように言ちて、目の前の花に触れた。

「これは俺とおゆづの間の話だ。それ以上、お前がとやかく言う筋のものじゃ無えよ。ただな、燕。一つだけ頼みたい事がある」

「……なんだよ？」

「あいつと、少しでも仲良くしてやってくれ」

「ハア！？ あの女と、ど、どうやって？」

「簡単だ。取り敢えず、挨拶しとけ」

「挨拶？」

「おゆづは礼儀に厳しいからな。俺も最初は散々怒られたぜ、頂きます、くらい言えってな」

「いただき、ます……？」

「おう、だから明日は取り敢えず、そこから言ってみる。俺はここに居る時は大概、陽の登つてる間は寝てるからよ」

と言う事は、その間は小守が現れなければ、おゆづと二人きりなのだ——燕はそれに気付いて、思わず頭を抱えた。幾ら命短い運命が不憫に感じるからと言って、あんな攻撃的な態度の女と日々を過ごすなんて、とても我慢できそうにない。

緋雄は立ち上がると笑って、燕の頭を軽く撫でた。

「まあ、宜しく頼んだぜ。望んで着いて来て、俺に養って貰ってるんだ、そんぐれえの頼み、聞いてくれよ」

「でも……」

「お前なら出来る。お前は意外に物覚えが良いからな」
「う……」

言葉に詰まった燕は、至極複雑で困惑した表情を浮かべている。

緋雄はそのまま部屋を出て行こうとしたが、思い出したように振り返り向いた。

「ああ、それから。その女モンの着物、結構似合ってるぜ」

「っ！　ば、ばかにすんな、俺は男だ！」

「はいはい、お燕ちゃん……ックク、ハハハハ！」

「だまれ、ばかッ！」

笑いながら部屋を出て行く緋雄に悪口を吐きながら、燕はまるで親を追う子犬のように、慌ててその背を追った。

其ノ参

翌朝。

燕は小守に起こされ、身支度を終えた後に、台所の斜向かいの部屋へ案内された。

どうやら朝飯はこちらの部屋を使うらしい。燕はあまり気が進まなかったが、小守の無言の催促に、嫌々襖を開けた。

中には既に膳の用意がなされ、上座にはおゆうが背を伸ばし、粹な縞の着物を着て正座している。つい燕が顔を顰めると、おゆうは良く通る声で、一言だけ発した。

「おはようございます」

それきり言うとおゆうは口を閉ざしたまま、仏頂面で燕を見ている。燕はちらりとそれに眼を遣ると、すぐに逸らして膳の前に胡座をかいた。

「おはよう、ございます」

するとおゆうは、今度は少し低い声で同じ言葉を繰り返す。その理由が判らず、燕は怪訝な顔をしたまま茶碗を掴んだ。

「お待ち。朝の挨拶も出来ないのかい、お前は」

「あさ、の？」

思わずそう聞き返すと、おゆうは大きな溜息を吐き、頭に手を添えた。

「昨日旦那に頼まれたから、どの程度かと思つてたけど、お前は本当に……」

「ふん、どうせ、俺は」

「口をとんがらかすんじゃないよ。それから、どうせ俺は何かだ、なんて、ひねた事は言わないように。本当にそんな奴に為り下がっちまうよ」

おゆうはすつと立ちあがると、燕の右側へ座り、再び姿勢を正した。

「良いかい、燕？　まず朝起きて人に会ったら、おはようございますって言うんだよ。それから飯を食べる前には、こうして手を合わせて、頂きます。判ったら、言ってみな」

威圧されたようで嫌だが、逆らえばきつと出て行けと言われるに違いない。それに昨夜、緋雄からは頼まれてしまった。ここは一つ我慢すべきと燕は考え、小さな声で言われた通りになぞった。

「……おはよう、ごさいます……頂きます」

「そう、そうだよ！　ちゃんと出来るじゃないか、偉いねえ」

「……」

「何だよ、何びつくりしてんだい？」

「だ、だって、わらった……どうして？」

「どうして、って、お前が挨拶したからだよ。挨拶ってのはね、突き詰めれば感謝に繋がるんだ。礼儀も然り。だから、大切だよ。お前も早く覚えな」

おゆうはそう言つと、自分も箸を取り、澄ました顔で頂きますと呟いた。

——不思議な気持ちだった。

ただ言われた事を繰り返したのに、おゆうが嬉しいと、笑ってくれたのだ。

良く判らないが、おゆうの笑顔はとても綺麗で、優しく見えた。

そして、それを見た時、燕は何だか胸が温かくなった気がした。

彼女の笑顔と、記憶に残る母の笑顔が重なったのだ。

思えば自分に笑い掛けてくれたのは、母を除いてはおゆうが初めてだ。自分が教えに従い物事を覚えれば、おゆうにあんな顔をして貰える。それはきつと自分にとっても、温かさを与えてくれるような、嬉しい事らしい。そう気付いた燕は、それ以来おゆうの教えを素直に聞くよう心掛けた。

燕から見ると、おゆうは実に様々な事を知っていた。

食事や日常の挨拶、きまりに始まり、米の炊き方や掃除、洗濯に至るまで。まるで先生か母親のように、燕に様々な『人としての』の知識を教えた。

五つ叱られ、一つ褒められ、時々口応えしては小突かれる。そうして謝罪と感謝を覚えた燕が、日増しにおゆうから叱られなくなつて行くのを、緋雄は黙って見守っていた。その姿は寡黙な父親と言ふよりは、面倒臭がりなぐうたら亭主に近いものであったが、おゆうは何も文句を言わずに、黙々と燕を仕込んでいた。

そうして十日余が過ぎた頃。まだ陽が天頂に昇る前、おゆうは燕を連れて、森へ出掛けた。

「良いかい？　これはたんぽぽ。食べられるからね。それからこっちは笹の子。中の柔らかい処を、ゆがいてから煮付けるんだ」

おゆうは野草の名を次々に上げ、燕に一つ一つ摘ませて教える。そしてたわわに実る柿の木まで辿り着くと、燕を木に登らせ実を齧らせた。

「甘ッ、すげえ甘いよ、おゆう！」

そう嬉しそうに叫ぶ燕を、下から目を細めて眺める。だがふとその表情が曇り、静かに根元に腰を下ろすのを見て、燕は柿の木から飛び降りた。

「どうしたんだ、はらが、いたいのか？」

「ああ、何でもない。ちょっと思い出しただけさ」

おゆうはそう呟くと、燕の差し出した柿を受け取り、ありがとうと微笑んだ。

「私ね、弟がいたんだよ」

「弟？」

「二つ違いだね。私が旦那のところに来た時、弟は丁度、お前くらいの年頃だった。秋になると、こうして良く一緒に、柿やら野苺やらを取りに行ったもんさ」

思い出に浸るおゆうは、少し悲し気に微笑んでいる。切れ長の眼は暫く手の内の柿を眺めていたが、幾度か瞬きした後、徐に燕を捉

えた。

「ねえ、村はどうなったんだい？」

「え……」

「はつきり言いな、燕——驚かないから」

力みの無い、真っ直ぐな言葉であった。真実は知らねど、薄々察しては居るのだろう。燕は一つ眼を閉じると、深く息を吸った。

「村は、こわれた」

「そう……村の人達は？」

「良く、わからない」

「……あの狸村長は？」

そう訊かれて言葉に詰まったが、見詰めるおゆうの瞳に、誤魔化しが通用するとは思えない。燕は少し戸惑いながらも、素直に答えた。

「俺が、殺した」

「……そう。あいつ、お前に酷い仕打ちをしてたからね。当然だよ」

「え？」

「あの村で、お前がどんな扱いを受けて居たか、私は知ってる。だからお前がこうして自由にしてるって事は、旦那がお前を拐って来たか、お前を閉じ込める奴等が、居なくなっただって事だ、そうだろう？」

「……」

鋭い洞察に驚くと共に、燕は酷く緊張した。自分が村で『穢れ』とされていたのを、おゆうが知っていたからだ。

けれど、おゆうは自分を生意気だと叱れども、穢らわしいと罵る事は一度たりとも無かった。それはあくまで経験の少ない年少者への躰であって、おゆうは至極真つ当に、むしろ弟の面倒を見る姉のように接していた。

人として扱われる事は、燕にとって本当に有り難い。けれどそう思うと、あの夜に付いては答えにくかった。何故なら村人は全員緋雄の手に掛かり、殺されてしまったのだから。

つい俯き、手を膝の上で固く握り締める。おゆうはそんな燕へ、言葉を繋いだ。

「ねえ、燕」

「……」

「私の、家族や、弟は……どうなったか判るかい？」

そう問い掛けた声が、僅かに震えている。洞察に長けた彼女の眼はきつと、真実を見抜いているのだ。そう知ると尚更言えずに、燕はゆるゆると首を横に振った。

「わからない……」

「集会処から少し離れた、廉売の二軒隣だったんだ。狭い家だったけど、角地だからすぐ判る。三人家族の家だよ、知らないかい？」

「知らない、俺は……ずっとそとに出たことが、なかったから」

ようやと燕がそれだけ答えると、おゆうは唇を噛み、暫し眼を閉じた。そうして心を宥めるように深く息を吸うと、ゆっくりと空を見上げた。

「そう、だね……悪かったね、変な事、訊いちゃった」

「……ごめんなさい」

「お前が謝る事は無いよ。さあ、この話は終いにしよう。もう少し柿をとっておくれよ、熟れたのは今夜食べて、若いのは干柿にしちまうから」

おゆうは場を切り替えるように、勢い良く立ち上がった。そして燕の頭に付いていた枯葉を摘まむと、そつと地に落とした。

「——お前の髪、とても綺麗だね」

「……え？」

「まるで、朝焼けみたいだ」

そう告げた時のおゆうの微笑みを、燕は一生忘れないだろう。『穢れ』と呼ばれ蔑まれていた事を知りながらも、その象徴を綺麗だと微笑んでくれたのだから。

おゆうの手が、さらさらと山吹の髪を梳く。それは何故か懐かしい心地良さを伴い、燕の瞳を潤ませた。

其ノ四

その日の夜半。緋雄はおゆうの寢所にて、一人酒を舐めていた。おゆうが燕と仲良くなつたのは、とても喜ばしい事だと思つていた。

贅となり、魔物に囲まれて十年。すっかり暮らし慣れたとは言え、彼女とて人間だ。同じ魂を持つ者と触れ合いたいと思う事も、口には出さぬがあつただろう。それを示すように、おゆうはまるで弟のように、燕を可愛がつている。死に際間近い彼女に、少しでも心の慰みが出来れば、緋雄も恩の字である。

「しかし、帰つて来ねえなア」

ごろりと寝返りを打てば、先程まで窓から見えた月は、その光を遺して遥か天頂へと上つている。いつもならとつくに艶かしく絡まつて来るのに、今夜は随分戻りが遅い。そう思っている矢先に、廊下を曲がり近付いてくる、おゆうの足音が聞こえた。

「いらしてたんですか、旦那」

「おう、夜は暇だな。何せここに居る時は、何をやる事も無えし」
寢所へ戻つて来たおゆうにそう応えると、彼女は僅かに微笑んで、緋雄の枕元に座り込んだ。

「昼も暇でしょう、寝てばかりですから」

「まあな、違い無え」

「そんなに暇なら、燕に剣術の稽古でも付けてやったら良いでしょうに」

「ああ、そうだな」

「あの子は男の子だもの、きっと喜びますよ。私も、その方が……嬉しい」

僅かに言葉尻が震えるのに気付き緋雄が身を起こすと、おゆうは唇を噛み締め、必死に涙を堪えていた。

「どうした？」

「旦那……」

そう一言呻くと、おゆうは緋雄の胸に頬を付け、はらはらと涙を流した。そうして暫く緋雄に背をさすられていたが、一つ涙を啜って身を離すと、涙を湛えた瞳で真っ直ぐ緋の瞳を見詰めた。

「旦那、教えて下さいな。村は、北ノ郷村は、どうなったのですか？」

「……」

「燕は、私の家族や村人がどうなったか、はっきりと言いませんでした。でも、旦那は知ってる筈です」

「聞いてどうする？」

「どうもしません、ただ、知りたいのです」

おゆうはそう言つと、再び緋雄を真っ直ぐ見詰める。その瞳を見返したまま、緋雄はゆっくりと口を開いた。

「村人は燕以外、全員殺して来た。だから、もう北ノ郷村は無い」

「……」

「義兵衛が、契約を破った。燕を餌に、俺をおびき出して退治しようとした……そういう事情だ」

「そう、でしたか……」

力を失った視線がゆっくりと伏せられ、睫毛の縁から幾つも涙が零れる。それを掬い上げると、緋雄は両手でおゆうの顔を包んだ。

「俺が、憎いか？」

「……いいえ。私は旦那に身も心も捧げました。その旦那がなさった事ですから、何の想いもございません。ただ、お願いがございませ

「何だ？」

「私を哀れんで下さるなら、どうぞ美しい着物と簪を寄越してやって下さいな。そして、命尽きる日まで、抱いて愛でて下されば、おゆうは、もう……」

思い遣す事は無いと洩らした唇は、緋雄のそれに吸われ、紅く濡れて戦慄いた。

角行燈の灯りが照らす中。

火照りうつすらと汗を纏った、肌理の細かい肌が滑らかにうねる。それを愛でなぞる度に、緋雄は上等な絹の手触りを思った。そしてその括れた腰をぐるりと這う、黒炎の様な痣が徐々に伸びて行くのを、痛ましいとも思った。

これが肌に浮かんでしまつては、例えその後目合わなくても、もうおゆうは助からない。体に溜まつた緋雄の邪気は、じわじわと、彼女を生きながら喰らう。

邪気が溜まれば命を落とす事は、おゆうも知っていた。けれども、それでも抱かれないとおゆうは乞うた。そうして初めて抱かれた夜、おゆうは破瓜の痛みと繋がった喜びの中で、一目で惚れてしまったのだと告げて、泣きながらはにかんだ。

「ねえ旦那、そんなに、見ないで……」

四つん這いになり後ろから貫かれたおゆうが、喘ぎながら乞うのを構わず、緋雄の指が確かめるように痣を追う。それは左脇腹から背を廻り、今や右の脇腹まで届いていた。

「私……あと、どのくらい、生きられます？」

「……さあな、お前は遅いからな」

「フッフ、止めて下さいな、誤魔化しは……ああ、っ！」

繋がったまま胡坐の中に抱き起こされ、背から長い腕に包まれておゆうは丸い乳房を包む緋雄の手に、愛おしげに己の手を重ね、細く濡れた声で何度も緋雄を呼んだ。

「黒、牙乾、さま……」

こうして居る時が、一番幸せだとおゆうは笑う。それは本当なのだと、緋雄も知っていた。

おゆうの命尽きるまで、凡そ半月。遣された短い時間の中で、彼女に何をしてやれるだろう。

永遠の時を生きる魔物にとって、人間の十年は儚く短い。だから

人間と暮らして情を持つのは嫌なのだと、緋雄は内心自嘲しながら、おゆうの項に鼻を埋めた。

その翌日。

緋雄は黒雅を番犬代わりに呼び出すと、おゆうを連れ三日ほど旅に出ると、燕に告げた。

屋敷に残される燕はむくれていたが、自分の『色』を人目に晒せば、良からぬ結果を招くのは知っている。結果、二人に土産を頼みながらも、帰って来なくて良いと、子供臭い悪態を吐いた。

「そんな膨れんなよ、まるで餓鬼みてえだな」

へらへらと笑う緋雄は、不思議な事に髪も瞳も真つ黒に変え、耳も上手く隠して、何処かの武士に成りきっている。訊けば結界を巧妙に張りめぐらし、人間の目を誤魔化しているらしい。

「そんなら、俺にもはってくれ」

「アア？ 馬鹿言うな。コレ、結構大変なんだぞ。それに、この旅はおゆうの買物物の為だからな。大人の楽しみなんだ、子供は留守番してろ」

緋雄がそう言うのと、傍らで草履を履いていたおゆうが立ち上がり、燕の膨れた面を覗き込んだ。

「燕、私の居ないうちは、今まで教えた事をもう一度お復習さらいして置くんだよ」

「ちっ」

「舌打ちなんておやめよ、みつともない。さあ、家人を旅に送り出す時の、挨拶は？」

「……いつて、らっしやい」

「そう、良い子だね。褒美に必ず土産を買って来るよ」

おゆうはにこりと笑うと、まるで子供をあやす様に燕の頭を撫でた。そうして武家の奥方のように、堅苦しく出立の挨拶をすると、緋雄と連れ立ち屋敷を後にした。

「……ちくしょう、もうかえってくんば、ばかッ」

勢いの無い悪態を吐くと踵を返し、燕は一番日差しの当たる南部屋へ入った。障子を開け放ち縁側へ座れば、空気は冷たいものの、体に当たる日差しは温かい。旅立つには良い日である。

「黒雅！」

名を呼ぶと、遅れてのそりと部屋に入ってくるが、どうやら日差しは嫌いらしい。黒雅は部屋が一番暗い場所へ行くと、静かに座り込んだ。

寡黙な友人の瞳は、主である緋雄と同じく、鮮やかに燃える緋色に輝いている。燕は暫し黒雅を見詰めていたが、やおら庭へ向き直り背を丸めた。

僅かに感じる疎外感——それは、暮らした日々の長さや立場から考えれば、あつて当たり前の物である。

二人は確かに、自分を受け入れてくれた。けれど、なまじそれを知っているから、燕は堪らない気持ちになる。寂しいと言う感情が込み上げ、胸元に絡まり疼くのだ。

「なあ、黒雅。アイツら、ちゃんとかえって、くるかな……」

一つ涙を啜った燕が、背を向けたままそう呟く。すると黒雅は眼を細め、僅かに喉を鳴らした。

其ノ五

それから、およそ五日の後。二人は何事も無く戻つて来た。

三日と告げられていた燕が、嘘付きと頬を膨らますのをつついて、おゆうはそれを侘びた後、ご機嫌で風呂敷を一つ解いた。

「ほら見て、燕！ 旦那にね、新しい着物を仕立てて貰ったんだよ」
おゆうはそう言つと、生成に椿を染め抜いた、美しいお引きを羽織つて見せた。

他にも薄紫の小紋や、深い藍の正絹帯に、帯留や簪、扇子などの小物が並ぶ。どれも街に住む大名の奥方が身に付けるような、見るからに高価な品々ばかりだ。

「すごいや、だんなつて、金もちなんだ」

燕が細かな彫りを施した銀の簪を、繁々と眺めて呟いた。

おゆうに言い含められ、燕は彼女のの前では、緋雄を旦那と呼んでいる。それがくすぐったいのか、早々に結界を解き本来の姿に戻つた緋雄は、苦笑いして寝そべつた。

「しかし人間ばかりの中は、慣れねえと気を使つぜ。おまけに途中、追い剥ぎにあつちまつたし」

「え？」

「でも、旦那はお強いからね、人間の悪党なんて、刀だけでやつつけちまつたよ」

だから、一緒に居れば何の心配も無いと、おゆうは幸せそうに微笑んだ。それから、羊羹やら色取り取りの飴玉やらを並べ、目を丸くする燕に一つ一つ見せては、手に取らせた。

旅は大変楽しく、着物を仕立てる間にあちこち物見していたのだと言つ。本当に贅沢をさせて貰つたとおゆうは笑つて、そうして一番最後に、細長い箱を手にとつた。

「これは、お前用に。鼈甲だよ。値切つたけど、中々負けてくれなくてねえ。高価いんだから、大事になさいよ」

「くし？　なんで俺に」

「お前の髪、もう少しちゃんとしなさいな。身形みなりを綺麗に。でない
と、旦那に捨てられるよ。この人は面喰いだからね」

「はあ？　い、いたつ、かみ、いたいつて！」

「大人しくしな、燕、正座！」

そうおゆうに一喝されれば、従うしか無い。燕は文句を口中で噛
み殺しながら、あちこち縛れたざんばら髪を櫛で梳かれ、終いに結
われてしまった。

「地味かと思っただけど、お前の山吹に鼈甲だったら、落ち着いて良
いね。明日この、櫛巻きを教えてあげるから、これからそうしなさ
いよ」

「ええ、だってこれ、おゆうみたい……」

「そう、しなさい」

おゆうは燕をきりりと見据え、一切の拒否は無いと表すように、
低い声でぴしやりと言いつ切る。燕はそれを困った顔でちらりと見て、
小さくはい、と答えた。

傍らで寝そべった緋雄が、お前も言いなりだと言わんばかりに、
にたにたと笑っている。それに思い切り舌を出した処を見付かり、
またおゆうに叱られる。

二人の帰宅と共に、また小煩い日常が戻ったのだと、燕は面倒を
感じた反面、嬉しさにそつと微笑んだ。

だがそれは、長くは続かなかった。

この二、三日後から。おゆうは段々飯を食わなくなり、五日後
には朝飯の席に顔を出さなくなった。

そして、そのうちに寢所からほとんど出られなくなり、燕を威勢
良く叱る事も無くなった。

緋雄はおゆうに望まれるまま、ずっと傍らに付いている。だが別
段何の手当てをする事も無く、時々手を握り、寄り添い背を撫でる

ばかりだ。それを見かねた燕は懸命に飯を運び食べさせたが、無理に食べても戻すばかりで、おゆうの体そのものが食物を拒否しているようだった。

そうして全く食べられなくなった、ある日の夕方。激しい咳と共に、おゆうはたくさんの血を吐いた。

「なあ、なんとか、してくれよ、緋雄！」

どんどん衰弱していくおゆうを見て居られず、燕は何も言わない緋雄の胸倉を掴んで、涙ながらに訴えた。しかしおゆうはそれを宥めると、すっかり細くなつた指で、たどたどしく燕の頭を撫でる。その口元に浮かぶのは苦痛では無く、ただただ幸せな笑みばかりで、燕を更に悲しくさせた。

そして、二度目に吐血した日の夜半。おゆうは燕を呼び寄せると、湯の介添を頼んだ。

「俺が？ だって、俺、男なのに……どうして？」

「何言つてんだい。男だろうが女だろうが、年上の者が言う事に、下の者は素直に従うもんだ」

「でも」

「頼むよ、燕。旦那には、汚れた姿は見せたくないんだ……最後の私の我儘だって、付き合っておくれよ」

こんなに衰弱しているのに、身形に拘るおゆうの気持ち、燕には良く判らなかつた。だがそれを理解する前に、今はおゆうの望みを叶えるのが大切なのだと、燕は思った。

示された着物を用意した後、ゆらゆらと覚束ないおゆうを支え、湯殿まで連れて行く。そしておゆうを小さな椅子に座らせると、体が冷えないように袖と裾だけ捲り、手足を先に洗った。

「良いよ、気を遣わなくて」

そう小さく洩らしたおゆうは、燕に背を向けて腰の伊達巻を解くと、自ら襦袢と下帯を開いた。

「あ……」

骨が浮き始めたおゆうの背は、蒼く透けるかと思われるほどに頼りなかった。裸になったにも関わらず、その体は女としての艶かしさよりも、衰弱による痛々しさが目につく。そして腰の辺りには、黒く炎のような痣がぐるりと回っていて、それは緋雄が操っていた黒炎と良く似ていた。

「ああ、もうこっちの腹まで、来ちまったねえ……」

俯いたおゆうはそう独り言ちると、少し振り向いて、燕に体を流してくれと頼んだ。

肌に傷を付けぬよう手拭いで優しく擦り、たっぷりの湯で綺麗に流す。それから燕の手を頼りつつ、おゆうはゆっくりと湯船に浸かった。

「ああ、気持ち良い。ここの風呂は、私が旦那に頼んで造って貰ったんだ」

渡された手拭いで顔を拭くと、おゆうは燕にそう言った。

「私が旦那とあの村を出た後に、新しい塙を構えるから、どんな処に住みたいかって聞かれてねえ。大きな湯船のある家が良いって答えたら、こんな立派な風呂を造って下さったよ」

「へえ、俺は広すぎて、流されそうで、こわい」

そう燕が答えると、おゆうは楽しそうに笑い、緋雄との思い出を取り留めなく語る。そうして暫く笑った後に、一つ小さな溜息をついて目を伏せた。

「私ね、初めて旦那を見た時に、一目惚れしちゃったんだ。可笑しいだろ？ 人間が魔物に惚れるなんて。だって、私は贅。旦那にとっては只の喰い物で、こんなに私を良く扱う義理なんて、無いんだから」

「……」

「でもね、旦那は本当に、優しくしてくれたよ。私の言う事に口出しせず、我儘もたくさん聞いて貰った。不思議でねえ、ある日聞いたんだ。どうしてそんなに優しくするのかって。そうしたら、旦那は言ったんだよ。お前は俺の贅だからって」

「にえ……？」

「ああ。どんなに尽くしても、想っても、やっぱりあの人は魔物なんだねえ。私をとんでも大事にして、愛でてくれたけれど、心を開いて愛してくれることは無かったよ。どうしてって聞いたたら、ずっと昔に、大好きな人を亡くしたから、だって。それじゃあ、私がどれだけ想ったって、どうしようも無いよねえ。死んだ人の思い出とは、恋敵にすら、なれないんだからさ」

そう少し眉を寄せて、おゆうは力無く笑った。

きつと、緋雄があのだ社でちらりと話した『相棒』の事だろう。燕は根拠も無くそう思ったが、この場でわざわざ口に出す事でも無い。それに今はただ、おゆうの話を、声を聞いていたかった。

「——だから、私は、旦那に喰らって貰う事にしたの。旦那は逃げたいなら逃げてても良いって言ったけど、断った。出来る限り傍に居て、そしてあの人の一部になるなら、私のこの気持ちも、救われるってもんさ」

そう言つと、おゆうは静かに燕を眺めた。

何も、答えられなかった。燕はおゆうの気持ち判らなかった。けれど、おゆうが緋雄を心から想っている事だけは、痛い程に伝わって来た。

ゆっくりと立ち上がるおゆうの肩に、大判の手拭いを掛けて、体を支えて脱衣処へ連れて行く。粗方体を拭いた後で、一番お気に入りの上等な襦袢を着せると、燕は座ったおゆうの髪を綺麗に拭き、櫛で梳いた。

おゆうは眼を瞑り、暫く燕に任せていたが、櫛を置き左に髪が纏められた辺りで、やおら口を開いた。

「燕」

「なに？」

「世話になつたね。ありがとう」

感謝の言葉に特別な響きを感じ、はっと燕が顔を上げると、おゆうは笑っていた。最期の時が近付いている——そう思わせるような

菩薩のような優しい笑みだった。

「……ありがとう、なんて、いうな」

「……」

「俺は、まだ、知らないことが、たくさんあるんだ。魚釣りも、さいほつも、ひらがなだって、まだ……」

「燕」

「なのに、なのに、はんばで……逃げんのかよ！」

涙声になりながら叫んだ燕を、おゆうはゆつくりと抱き締めた。

そして、少し歪に纏められた山吹の頭を撫でながら、小さな声で答えた。

「ごめんね、燕。後は旦那に委せるから、良い子で、言うことちゃんんと、聞くんだよ」

「……いやだ」

「燕」

「いやだ、おゆう……おゆうが、いなくなる、なんて」

無力だと思った。自分は何処まで行っても泣きながら取り縋る事しか出来ない、力の無い子供なのだ。それは母を義兵衛に奪われた、あの赤子であった頃から変わっていないのだ。

生まれおちた瞬間からの記憶を持つからこそ、より己の無力さが判る。そう感じる程に、燕は悔しくて悲しかった。

「燕……男の子は、強く優しく。もう、泣くんじゃないよ」

おゆうがゆるゆると、あやすように燕の頭を撫でる。泣きながら顔を埋めた彼女の胸は温かく、柔らかく、そして微かに死臭がした。

計らずもこうして因果を含められた燕は、おゆうを寢所まで連れて行くと、彼女が白粉をはたき、紅を引くのを黙って眺めた。それから椿のお引きの着付けを手伝うと、ようやと口を開いた。

「じゃあ……だんな、よんで来る」

「ああ、頼んだよ」

おゆうは直した布団の横に座り、薄く微笑んでいる。燕は、その姿を瞼に焼き付けんと見詰めた後。

「おゆう、すごく、きれいだ」

そう言い残して、寢所を後にした。

其ノ六

緋雄の寢所へ行く途中。廊下に立つ燕が、そつと窓の障子を開ければ、外は深い闇であつた。

月明かりの無い、新月の夜。別れを交わすには、もの寂しい夜でもある。

「お待ち、してりました」

おゆうはきちんと正座し三つ指を着いて、烏黒の着流しに身を包んだ緋雄を迎え入れた。

「旦那はやはり、その烏黒が一等お似合いですね」

「そうか？」

「ええ、初めてお目に掛かった時も、その色でした」

見上げた切れ長の目に感慨を浮かべて、おゆうは静かに姿勢を直した。

——何やらおゆうの様子が、普段にも増して畏まっている。緋雄は内心ある予感を感じながら、彼女の傍に胡座を搔くと、上から下まで繁々と見詰めた。

「今夜は随分別嬪だな。その着物、良く似合うじゃねえか」

「ええ、だって、旦那が選んで下さいましたから」

おゆうは少し照れたように微笑むと、広めに合わせた襟元を指先でなぞり、そつと目を伏せた。

「ねえ、旦那」

「アア？」

「私はもうすぐ、命尽きます。その前に、まだ気を繋いでるうちに、どうぞ私を喰らって下さいませ」

「……偉く畏まってんのは、そういう事か」

「はい」

そう言つて緋雄に向けた顔は、頬の膨らみが落ち、目が窪み、一層顔色が悪い。しかしその表情は幸せに満ち、施された薄化粧にも増した、薰るような色気を放っている。

緋雄はにじり寄ると、おゆうの肩に手を触れ、やんわりと抱いた。

「……楽しかったなア、お前との旅はよ」

「芝居も見ましたね、それから、大きなお寺も」

「屋形船にも乗ったな」

「頂いた天婦羅も、美味しゅうございました」

「……」

「峠茶屋での一服も、道中の買い物も……いえ、旅だけでなく、旦那と暮らした日々総てが、私は楽しゅうございました」

「……そうか」

「燕には先程、言い含めて置きました。もう、思い遣す事はございません。私の最期の我儘、聞いて下さいますね」

身を僅かに離れたおゆうが、緋雄へ微笑んだまま問う。人として死すよりも、贅として死す——そのおゆうの想いは、彼女の心情を知る緋雄には拒めなかった。

大きな手がゆつくりと濃藍の帯を解き、着物を緩める。この椿のお引きを、おゆうは最初から死装束と決めていたのだろう。そう思うと緋雄の胸裡に、この十年の出来事が去来した。

「おゆう、お前は本当に、良い女だった」

そう小さく呟くと、おゆうは僅かに涙を滲ませ、嬉しそうに笑った。

角行灯の光が揺れる褥に響くのは、衣擦れにも似た、甲高い嬌声。そして今にも止まってしまうのではないかと思わせるような、荒い息遣い。まるで蠟燭の灯が燃え尽きる寸前に、一瞬大きな輝きを見せるように。おゆうは全身で、緋雄を受け止めていた。

細くやつれた体は、黒炎の文言を^{いれすみ}あちこちに刻んだ、逞しい体に組敷かれている。まるで獣が貪るような、いつにも増して激しい律

動に、おゆうは涙を散らしながら声を上げた。

「ああ、旦那……あつ！」

緋雄の背に回されたおゆうの指が、愉悦を堪え切れず爪を立てる。気を遣りわなわなと震える唇を何度も食んでから、緋雄は乱れ濡れたおゆうの髪を掻き上げた。

「本当に、良いんだな？」

そう問われたおゆうは迷い無く頷き、少女のように無邪気な微笑を浮かべた。

「旦那、本当に、ありがとうございました……おゆうは、とても、幸せです」

その言葉を聞くと共に、緋雄の瞳が煌々と輝き、背から黒く重い邪気が沸き上がる。すると、おゆうの腹の痣が赤い光を発しつつ、ざわざわと燃え盛るように蠢き出した。

たちまちその全身を、今までも増した快感と、強烈な倦怠感が襲う。体の端々が強張り、焼かれるような熱の中で、おゆうは目の愛しい魔物を見詰めた。

初めてこの瞳を見た時に感じた想いが、おゆうの胸に甦り、続いて過ごした十年の日々が、鮮やかに脳裡を巡る。女として悔い無き生涯を送ったと思えば、体を焼く熱すら愛しかった。

「心、より……お慕い、もう、し……旦那、な……」

苦しい息で紡がれる言葉は力を失い、そのまま届かず口端で消える。それでもおゆうは繰り返す、唇だけで緋の瞳に語り掛けた。やがて視界が徐々に明度を失い、緋雄の顔がぼんやりと霞んで行く中で、唯一輝いて見えた緋も、刻一刻と色褪せ遠くなった。

「おゆう——」

そう名を呼ばれ、最後に合わされた唇から、己れの総てが吸われ行くのを感じながら。

おゆうは腹の底から襲い来る虚無と暗闇に沈むように、ゆっくりと瞼を閉じた。

まんじりともせず、迎えた朝方。燕は緋雄と共に、骸となったおゆうを、庭先で荼毘に付した。

おゆうの骸は椿のお引きにくるまれていたが、亡き顔を見ることは憚られた。

魂を喰われ、生気を総て抜かれれば、人の肉体は年老いて枯れたように変わる。それを見られるのは、きつと身形に煩いおゆうにとつて本意ではないだろう。燕はそう気遣い、そつと骸の胸元へ銀の簪を添えた。

「良い、女だったなア」

積み上げた小枝の上にある骸が、己れの放った黒炎に包まれるのを見送りながら、緋雄はそう呟いた。

傍らに立つ燕は唇を噛み締め、暫く燃え盛る炎をじつと見詰めている。やがてそれが勢いを失った頃、俯いてぽつりと溢した。

「まものなんか……大きらいだ」

「……」

「緋雄なんか、大きらいだ。わかってて、おゆうのきもち、知って、それでも、喰らうちまうなんて」

「……」

「おゆうが、可愛いそうだ。どうして、どうして……！」

愛してやらなかったのだ、と言う言葉を、燕は呑み込んだ。呑み込んだ代わりに緋雄へ駆け寄り、自分より遥かに逞しい胸板を、力の限り拳で打った。

「ちくしょう、ちく、しょう……！」

「燕」

「いつか俺は、つよくなる。そして、おまえを泣かせてやる！だから、悪かったって、あやまれッ！」

遣り場の無い感情をすべてぶつけるように、燕はそう叫ぶと、また緋雄の胸を叩いた。そうして拳が痛み、泣き声が掠れる頃には、緋雄の締まった腹にきつくしがみついていた。

この中に、おゆうの魂がある——そう思うと、耳を当てればその声が聞こえるような気がする。瞼を閉じ親しんだ名を呼べば、己が先程発した暴言を叱りつける、威勢の良い姿が見えた。

そして、その夕方。

緋雄と燕は出立の支度を終えると、黒雅を伴い屋敷の門を潜った。出掛けに現れた小守の頭を、緋雄が世話になったと優しく撫でると、小守は眼を瞑り深々と頭を垂れた。

まるで死者を敬うようだと、燕が思う傍らで。小守はゆっくり頭を上げると、小首を傾げて口笛を吹いた。すると同じような姿の小守が幾人も現れ、屋敷を取り囲んだ。

「ええっ……こんなにいたのか!」

「気付かなかったのか? お前、結構鈍いなア」

驚き声を上げた燕に、茶化した緋雄の声が答える。憎たらしい魔物だと、露草の瞳がきつく睨み付けるのを、緋雄は涼しい顔をしながら受け流した。

やがて小守達が屋敷に向かい、やおら両手を掲げる。すると屋敷はふるりと身を揺らし、霞を伴い姿を消した。

「家が、きえちまった……どうして、また隠したのか?」

燕がそう目を丸くすると、緋雄は薄く笑った。

「隠したんじゃねえよ、無くしたのさ。ここはおゆうの思念を小守達が現した、あいつだけの家だ。主が居なくなったら、いずれ家も消える」

「へえ……」

良く判らないが、取り敢えず頷いたという風情の燕を見て、緋雄は小さく溜息を付くと踵を返した。

「行くぞ、もうすぐ日暮れだ。お前は足が遅いんだから、黒雅に乗って来い」

「もう、か?」

「ああ、直に雨が来るから、急がないとな。それにここには……あ

いつとの思い出が、ありすぎやがる」

そう低い声で答えた緋雄の背が、少しだけ震えたように、燕には見えた。

——夕陽は分厚い雲に遮られ、空は鉛色へ染まり行く。二人が姿を消した頃に辺りは暗くなり、湿り気を帯びた風と共に、ぽつりぽつりと雨が落ち始めた。

この直後、幕府・法院処より遣わされた魔物狩の一団が、とある魔物を追ってこの地へ現れた。

北ノ郷村を襲ったのは、当時村と契約を結んでいた「黒牙乾」と呼ばれる魔物である事は明白だった。しかし村人が抹殺されてしまった今となつては、その魔物の詳細は不明である。

近隣の町村から仕入れた情報や、村の跡地から推測するに、黒牙乾はかなり力を持った魔物であるらしい。珍しい技を使うと言うので、ひよつとして過去の「台帳」にそれらしきものが無いかと調べてみれば、およそ四百年遡ったあたりに、特徴の当てはまる魔物が記されていた。

しかしその魔物は、当時行われた「総魔物狩」にて相当の深手を負ったとあり、行動を共にしていた片割れはその際に滅されたようだ。それから現在まで全く記録が無いところを見ると、恐らくは弱り果て同胞に喰われたか、自然に枯れたであろう確率が高い。従って、黒牙乾はその魔物の世系若しくは亜種ではないかと言うのが、法院処を司る「四色」の師の見解であつた。

その魔物の名は、緋雄。黒炎を操りすべてを廃する、恐ろしき四つ足の獣であつたと言う。

閑話【惜想零】・了

妖星ノ巻 其ノ一

まだ陽の昇らぬ朝方。

人氣無き山中には靄が立ち込め、初夏とは思えぬ冷え冷えとした空気が辺りに満ちている。その中を細く貫く、普段からあまり人の通らぬ山道を、幾つもの足音が進んでいた。

良く見れば人相の悪い、山賊と称するに相応しい一団である。腰には刀、背には千両箱、そして厳つい肩や胸には、点々と返り血の跡。つい先程、一里向こうの村を襲った帰りであった。

「くく、くくく……意外に貯め込んでやがったじゃねえか」

「ああ、本当だぜ。それにしても楽しかったなア」

千両箱を背負った男が呟くと、隣で重そうな袋を手にした男が答えた。

つい一時ほど前まで行われていた略奪と殺戮を思い出し、思わず口の端が愉悦に歪む。逃げ惑う弱者を狩る時の高揚感、そして斬り捨てた後の爽快感は、いつも堪らなく心地良い。低く喉を揺らす二人の嗤い声は山間に響き、それはやがて周囲を歩く仲間にも伝染した。

列のしんがりを務める酔っ払いが、腰に下げた酒を口にしようと立ち止まる。仲間と離れるのを構わず、良い気分で酒瓶の紐を解こうと、少し前のめりになった瞬間。

「……ア？」

ざしゅり、と断たれ首が飛んだ。

胴体がだらだらと血を曳きながら、迷うようにゆらゆらと揺れる。やがて重く湿った音を発て、地べたへ倒れ込んだ。

「ん？」

ごろりと頭が転がる音に、ふと仲間の斬切頭が振り返ると。今度は近付いた白い風が、その胴を薙いだ。

「か、はっ……」

足はしつかと地に立っている筈なのに、何故視界が傾ぐのか。急激に力と熱が奪われる感覚に惑いつつ、斬切頭が己の体を見下ろす。すると胴は真つ二つに裂けており、鮮赤にまみれた内臓が、ぬめぬめとはみ出ていた。

「ぐ、あ……」

押さえる事も叶わず、斬切頭はそう小さな驚愕を発すると、ゆっくりと仰向けに倒れた。

「お、おい？」

「う、ウワアアア！」

事に気付いた他の男達が一斉に浮き足立ち、腰の得物を慌てて構える。口々に吠えながら背を付け合い、敵を探すその視線の先に、霞の中から白い人影がゆらりと現れた。

「——よお。お前等が盗つたもん、全部置いて行けよ」

「？」

「そうしたら、命は助けてやるから」

まるで挨拶でもするように、さらりと脅しに掛かった声には殺気が無い。そのせいか男達の戦きが少し収まり、やがて眼の色が変わり始めた。

見れば眼前の白影は線が細く、まだ少年か若い女のように見える。血を纏った刀を携えていても、まるで強そうには見えない。更に男にしては高い声が、そんな白影の印象を一層軟弱に見せた。

深くかぶった頭巾から垣間見える、白い頬と赤い唇が、下劣な嗜虐心を誘って来る。男達から俄に下卑た笑いが沸き、頭目と覚しき槍を構えた男が、馬鹿にするような調子で唸った。

「ハア？ 何でえ、姐ちゃんじゃねえかよ」

「死にてえか、それとも食われてえか？」

「待てよ、本当に女かも知れねえぞ？ なら殺る前に一発、お楽しみと行こうじゃねえか」

「おう、そりゃあ良い」

にたにたと野次を飛ばす男達は、全部で四人。しかも揃いも揃って、白影より一回りも二回りも遅しい。

若い頃から悪事に浸かり生きてきた男達は、既に他人を凌辱し、殺める事すら躊躇は無い。相手は一人、しかもあの形なら、どう考えても力量は此方が上——そう斬り合いの勝利を見た四人は、白影を囲う様にじりじりと近付いた。

「……どうやら耳が聴こえねえらしいな。命だけは助けてやろうかと思ったのによ」

白影はそう溜息を吐き、ちゃきりと刀を握り直した。それを合図に、一番右の男が斬り合いの一步を踏み出した。

あつと言つ間だった。

白影は見えぬ刃を操る燕の様に、残像すら残さず宙を舞う。それを捕えようと、斬り付ける男達の身体を鮮やかに薙ぎ、一気に三人を地へ沈ませた。

「この糞餓鬼が！」

激昂した頭目が突き出す槍を、走り寄る白影が紙一重で交わす。

そのまま死角である懷に飛び込んで来るのを狙い、頭目は左手を腰の女刀に掛け、即座に抜いた。

「死ねえ！」

目論見を見切った白影が、体を幾分捻りながら半歩短く踏み込む。しかし頭目は構わず、その細い腹目掛け女刀で突いた。

「ぐああつ！」

——鋭い叫びを発したのは、意外にも頭目だった。女刀を握ったままの左手を横から弾かれ、瞬く間に斬り落とされたのだ。

骨肉を断たれた感触に、一気に頭から血が引く。痛みを感じるより先に、震えと吐き気がこみあげた。更に槍が白影によつてへし折られ、碎けた柄が頭目の額に当たり、その浅黒い肌へ朱線を刻んだ。

「ひ、ヒイッ！」

「舐めんなよ、悪党が」

一旦間合いを取り、そう頭巾の奥から凄んだ白影の双眸は、寒々しい程青く光っている。思わず怯んだ頭目は、地面に幅広く塗られた血糊に足を取られ、尻餅を付いた。

「う、うっ」

こんな筈ではなかった。

人斬りの剣術に長けた筈の自分が、こんな不覚を取るとは。それに、あの並外れた速さに青く光る双眸は、人間にしては異質である。「ま、まさか……まも、の？」

腕の激痛に加え、良からぬ考えを思い付いたせいで、頭目は真っ青になりながら後退さった。

ゆつくりと追い詰めて来る、その露草を思わせる瞳はどこまでも冷たい。このままでは容赦無く斬られると知り、頭目はあわあわと唇を戦慄かせた。

「た、助けてくれ、全部やるから命だけは……」

思わず眼前に、既に無くした左手を翳す。まだ血がたらたらと流れているのを睨めつけてから、白影は無言で頭目を袈裟に薙いだ。

「ギヤアアア！」

断末魔の叫びと共に太い血の帯を引いて、頭目は地に倒れた。

白影は黙ったまま、倒れた骸の纏う着物で刀身を拭き、血脂を落とし鞘に納める。そして、やおら足で骸を転がすと、屈み込んで懐を探り始めた。

「——終わったかア？」

頭上からくつくつと、笑い声が響く。それを聞きながら白影は、探り当てた分厚い財布を自分の懐へ突っ込んだ。

返事もせず屈む背後に小さな音を立て、黒い大きな影が頭上の木から舞い降りる。それに振り向きもしない白影に、黒い影はふざけた調子で嗤った。

「オイオイ。こりやまた不味そうな野郎ばっかだなア、燕」

「仕方無えだろ。コイツ等しか通り掛からないんだから」

「つつか、お前が襲う相手って、こういう連中ばっかじゃねえかよ」

「煩え。喰らうなら早くやれよ、魂が抜けちまうぞ、ほら！」

「へえへえ、不味くつても有り難く頂きますよ。あーあ、たまには普通の女とか、若い男とか、喰らいてえなア」

「いい加減黙りやがれ、緋雄の馬鹿ッ！」

齒を剥いた燕が、素早く左拳を放つ。それをひらりと交わすと、緋雄は倒れた男の一人に近寄り、その血塗れた体を片手で持ち上げた。

二人があのだで出逢ってから、凡そ三年。

まだ子供だった燕は成長し、緋雄の手解きにより剣術を身に付け始めた。

燕がこうして人を襲うようになったのは、ここ半年の話だ。生きるために、そして自分の腕を磨く為に、その鬼畜の所業は繰り返されている。

燕は決して、人殺しを好んでいる訳では無い。けれども自分の容貌を考えれば、生きている限り、人の世界から離れて暮さねばならないと思っていた。だがそれは様々な危険を伴う。自分の身を守る力や手段が必要不可欠だった。

また、何度も人間に追われ魔物と対峙する度に、緋雄に守られるばかりの自分が齒痒かった。いつまでも子供扱いされ庇護を受けるのは悔しかったし、緋雄と一緒に暮らすなら、対等とは行かずともせめて彼に認められる強さが欲しかった。だから体を鍛え、剣を握った。

勿論、通常の剣技なぞ魔物には通用しない。それでも刃を持てば、人間から身を守る事は出来る——そう、燕は考えた。

緋雄はその考えを『是』とも『否』とも言わない。彼が人間でなく魔物で有る事も理由の一つだが、燕にただ一言『お前の好きにする』と言って、為す事全てを受け入れた。

一頻り魂を食らった緋雄は伸びを一つすると、骸の体から千両箱を引き剥がした。

ずしりと背に乗る重さは、恐らく中に詰まった小判のせいだろう。緋雄には要らぬがらくたに過ぎないが、人間である燕には何かと入用な時もあるから、持ち帰って損は無い。ふと目をやれば、燕も盗った財布や食物で懷を膨らませている。そろそろ朝陽も顔を出すし、塀へ帰る頃合いだと、緋雄は耳を揺らした。

「おい、そろそろ行くぞ」

「ああ」

緋雄の催促にちらりと眼を上げた燕は、表情を曇らせている。慣れた所業とは言え、人殺しの後は多少なりとも気が滅入るようだ。

歩き出すと隣に並んで来る、己の肩辺りにある顔を見ながら。緋雄はふざけた様子で、白い頭巾の天辺を引っ張り下ろした。

「コラ、何すんだよ？」

「何だよ、つまんねえ顔しやがって。結構収穫あったのによオ」

そうおどけて白い頬を突いて見るが、燕は眉を顰めただけで、いつものように遣り返して来ない。少しつまらなそうな緋雄に、燕は眼を伏せたまま小さく問い掛けた。

「なあ、緋雄」

「アア？」

「こんな事に、意味なんてあんのかな」

「意味？　もしかしてお前、あいつ等斬った事、悔いてんのか？」

「……別に」

「そんな面すんなよ、お燕ちゃん。せつかくの美人が台無しだろうが」

「お燕ちゃん言うな、この野郎！　俺は男だつつうの！」

そう齒を剥いて叫ぶと、燕は益々機嫌の悪い顔をした。

顰め面などせず、いつも微笑んでいれば、燕は中々の器量良しである。細眉に通った鼻梁は意志が強そうで、中々髭の生えない顎は細く形が良い。少し憂いを含む露草の瞳は笑えば垂れて、その下に

散った僅かなそばかすと共に、愛嬌に溢れる。

拾った当時は汚い餓鬼だったが、正直こんなに変わるとは予想もしなかった。女なら間違い無く、当に手を掛けて居ただろう。男らしくある事を望む本人には言えないが、緋雄は内心そう思っていた。

妖星ノ巻 其ノ二

山賊を襲った麓の山道から上り、西へ延びる獣道を歩く事、およそ半里。とうに建てられた事すら忘却された古い社が、今の二人の塹である。

あの、おゆうと暮らした屋敷から思えば、頗る貧相な佇まいだ。だが魔物である緋雄も、穴蔵で育った燕も、綺麗で立派な屋敷にはあまり興味が無い。ようは雨露が凌げ眠れる場所であれば、二人にとってあまり不便は無かった。

もう三年暮らしているが、未だに小競り合いは日常茶飯事である。生き物としての種が違ふのだから、どうしても相容れない部分もある。それでもこうして緋雄と居られる事は、独り穴蔵で育った燕にとって、とても幸せな事だった。

朝陽が上りきった頃。社の中で奪った品々を広げ、その中にあった干肉を齧りながら、燕は眉を寄せた。

「何だよ、金ばっかで、食い物無えや」

「当たり前だ。百姓や商人ならともかく、山賊だぞ？ 悪党が金より食い物盗って来る訳無えだろうが」

傍らにだらしなく寝そべった緋雄が、そう口の端を上げた。

若い燕は、食欲が旺盛だ。それに遣い途の無い金よりも、自分の命を繋ぐ糧の方が、遥かに大事だと思うのだろう。それなら、斬る標的が山賊と言うのは少しずれている。そう緋雄が鼻で笑うと、燕は口を尖らせた。

「けどよ、何もしてねえ奴等を斬る訳にはいかねえよ。第一それじゃ、俺が人を斬る意味が違っちまう」

「人を斬る意味って何だよ。悪人なら斬っても良いってか？」

「それも違う。俺は、ただ強くなりただけだ。だから強そうで、刀持つてる奴を選ぶと、自然と悪党ばかりになっちゃう。それに――」

「それに？」

「……何でも無えよ」

燕は小金や小判をつまらなそうに指で弾くと、それらを無造作に千両箱へ突っ込み、半分蓋を開けたまま隅へ押し遣った。

言い掛けた台詞の続きを訊こうかと思ったが、緋雄はそれをしなかった。恐らく燕は、戦う力の無い者には刃を向けたくないと言いたかったのだろう。

こうして突っ張っていても、本当は性根の優しい子である。それは三年暮らした中で、幾度も垣間見た。

例えば飢えかけた兎に餌を与えたり、子を連れた鹿を狩らずに見逃してやつたり――それらは本来なら、燕の食料になり得る動物であるにも拘らずだ。そんな燕の優しさは好ましいが、いつかどこかで命取りになる可能性もある。緋雄は口には出さぬが、そう感じていた。

それにしても、陽が昇るにつれ眠気が押し寄せる。大きな欠伸をした緋雄が立ち上がるのを見て、燕は思い付いたように声を掛けた。
「なあ緋雄、少し付き合ってくれよ」

「アア？面倒臭え、それに、今真っ昼間だろ」

「ちよつとだったら良いだろ？ 飯の後の腹ごなしだと思ってよ」
了承も貰わずに立ち上がった燕が、閉め切った社の戸を開け放つ。途端に差しこむ眩しさに、緋雄が顔を顰めた。

視界が白と黒の世界に転じた中で、逆光に照らされた燕の髪が、鮮やかな金に輝いている。それを見た緋雄の口から小さな呟きが洩れた。

「……獅燕」

「は？」

聞き覚えの無い、名前らしき一言に気付いた燕が、振り返り怪訝

に首を傾げる。緋雄は何でも無いと濁しながら、傍らに転がした黒い愛刀へ手を伸ばした。

二人の、否、主に燕の暇潰しは、剣の修練である。

緋雄が師であるから、そこいらの武家の子息が習うような某流等なにがしはなく、専ら実戦を主とした捕手とてと剣技が中心だ。

「ほら、どこからでも良いぜ。かかって来いよ」

荒れ果てた境内にて。少し離れて立つ緋雄が愛刀を鞘に収めたまま、無防備に右肩へ担いで笑う。燕はそれを睨み、腰の太刀を抜いた。

「ハッ！」

抜き去ると同時に鋭く短い気合いを発し、燕が地を蹴る。一気に間合いを詰め、緋雄目掛けて刃を振り下ろした。それを風に巻かれる柳枝の如く、緋雄が僅かに身を捻り避ける。続けて二撃、三撃と揺れるように交わした直後、緋雄は掌底しょうていで、突っ込んで来た燕の左肩を弾いた。

「っ！」

燕は一瞬たたらを踏んだが、そのまま勢いを殺さず前へのめった。そして地に片手を着くと、身を捻り蹴りを放った。

「おっと！」

不意の攻撃に、緋雄が腕で防御する。そして反撃とばかりに、逆さになった細い胴へ鞘を見舞った。だがその先を僅かに掠っただけで、燕は逆さのままひらりと飛び退ると、猫のようにくるりと着地を決めた。

まったく、恐ろしく身が軽い。普通の人間ならば、不様に地べたへ転がってしまうだろう。緋雄はそう思いながら、燕に走り寄った。咄嗟に向けられた鋭い刃を、鞘に入れたままの刀で弾き、細い手首を掴む。そのまま力で押し倒そうとすると、燕が素早く腰を落とした。

「ヤアッ！」

覆い被さる腹へ燕の足が掛けられ、蹴り上げる勢いで宙に放られる。所謂巴投げのような形で投げられた緋雄は、身を捻ると足から鮮やかに着地した。

「やるな、良い投げだなア！」

「ふん、お前じゃなかったら、ここで終わるのに。次は転がしてやるぜ！」

緋雄が軽い調子で誉めるのに、燕は憎々しげに口元を歪め、再び走り寄った。

——傍目には互角に近い戦いだ、燕が攻めに入れば入るほど、緋雄はにたつきながら身をかわし、僅かの隙につけこんで燕を翻弄する。そうして暫く攻防が繰り返されるうち、徐々に燕の息が上がり始めた。

「何だア、燕。もうバテて来たかよ？」

「煩えッ！」

茶かすような緋雄の言葉に、燕はそう叫ぶと額の汗を左手で拭いた。

変わらず威勢は良いものの、太刀の重さに燕の腕が耐え切れず、構えた切先が僅かに震えている。それに気付いた緋雄は身を低く構え、燕の懐目掛け飛び込んだ。

「くっ！」

下段から襲う緋雄の鞘を、燕が刀で受け止めた。硬い衝撃音と共に、重い痺れが両肘の上まで奔る。僅かに呻く燕の眼前で、緋の瞳がにたりと笑った瞬間、頭突きが燕の額を襲った。

「うあっ！」

衝撃と痛みに一瞬目を瞑った燕から、力が抜ける。その隙を見逃さず、緋雄は燕の刀を抑え込んだまま右手で衿を掴むと、同時に片足を払った。

「ぐあっ！うっ、く……」

均衡を失った燕が、そのまま後ろに勢い良く引き倒される。太刀

を手放し咄嗟に頭は庇ったものの、背を強かに打ち息が詰まり、すぐに起き上がる事が出来ない。

強い咳をしながら苦しむ燕の腹に跨ると、緋雄は楽しそうに笑った。

「馬ア鹿、頭突きに気を取られて、受け身取り損なったか？」

「くっ、はっ、畜生……！」

「死にたくなかったら、太刀を落とすな。ま、お前は身が軽いから、捕まりさえしなきゃ、それなりに戦^やれるだろ」

緋雄はそう言つと、燕の体の上から身を引いた。

やはり、敵わない——燕は内心呟いた。

真剣を握り、本気で斬るつもりで挑んでも、緋雄はいつも刀すら抜かない。傷付ける事はおろか、捕まえる事すら出来ないのだ。

力量の差を見せ付けられ、悔しさに歯軋りする燕を見て、緋雄は軽く溜息を洩らした。

「何、焦ってる？ 刀持つてまだ三年だ。こんだけ使いりや大したもんだろ」

「……」

「あ、もしかして、そんなに俺を負かしたいとか？」

燕が思わずひくりと眉を上げたのに、その本意を見た緋雄は思わず笑った。

「あー、無理無理。お前が俺を負かすなんざ、千年早えよ。ま、陰陽師か坊主か、それこそ魔物にでもなりや話は別だがなア」

「誰が魔物になんかなるかッ！」

そう叫び繰り出した燕の拳を軽々と受け止めると、緋雄はいなすようにそれを払い、さっさと社へ足を向けた。

——魔物と暮らしている癖に、燕は魔物を嫌っている。緋雄がおゆうを喰らってしまった事が原因なのか、若しくは『穢れ』と呼ばれ蔑まれた事への反発なのかもしれない。

事あるごとに緋雄が発するこの手の戯言に対して、燕はいつも本気で怒るのだった。

修練の後、草臥^{くたび}れたと寝入った緋雄を残し、燕は小刀を携え川へ向かった。

陽は既に天頂からじりじり照り付け、気温も高い。汗まみれの体を清めるついでに、魚も獲るつもりである。

川原へ着くと、先ずは何本かの小枝で簡単に銚をこしらえ、着物を脱ぎ下帯だけで川へ入った。この川はそれほど幅は無いが、中程から急に深さを増し、その先は足が着かない。およそ腹が隠れる深さの処まで進むと、燕は大きく息を吸い、一気に潜った。

三年前は湯船で体が浮いても怖かったが、今では流れにもすっかり慣れたものである。川底近くで魚を探り、たちまち銚で三匹仕留め、水面に鮮やかな頭を出した。

「まあまあだな」

戦利品を川原に放り、また川中へ戻る。そして浅瀬に座ると、櫛で結っていた山吹の髪を下ろし、両手で水を切るようにかき上げた。「しっかし……太くならねえな」

燕は自分の二の腕を撫でて、そう溜息を吐いた。

よく動き、肉や魚を食べば育つと緋雄に言われ、頻繁に摂るようにはしている。それでも男らしい、逞しい体にならないのが気に入らなかった。

おまけに最近、僅かに乳がふくらして来たような気がする。

女のそれには程遠いし、良く見なければ判らない位だが、双成りの体を持つ燕にとっては心中穏やかではない。晒でも巻いて押さえねば、このまま女になってしまいそうな気がして、益々不安である。

「俺は……男、なのに」

一体何の因果で、こんな変わった体に生まれついたのか。色が違うだけでも人と見て貰えないのに、その上性別すら惑うような形である。

燕は己れの髪と体を眺めると、俯いて深く息を吐いた。

ちょうどその頃、社にて。

寢床でぼんやりと眼を開いた緋雄は、今しがた見ていた夢を思い返していた。

「獅燕……」

夢の中では、四百年前に失った相棒が戦っていた。

眩しい程の金髪に真っ白な狩衣も、舞うように双剣で薙ぐ姿も、最期に見た記憶のままに鮮やかだった。

「古い夢、見ちまったもんだな」

北ノ郷村へ居着いてからは全く見なかった光景を、今更思いだすとは。何かの知らせか、それとも警告か——そう考えて、緋雄は思わず苦笑した。

あれこれ思案したところで、夢を見た理由が明かされる訳ではない。夢は夢であって、それ以外では無いのだから。そう強引に己を納得させ、ごろりと寝返りを打つ。すると川の方角から、燕がこちらへ戻って来る気配が感じられた。

起きていると知れば、また何かにと引っ張り出され、付き合い合われるに違いない。陽光の下でも動く事は出来るが、そこはやはり魔物であるから、正直体力も消耗する。

こんな時は狸寝入りが一番だ。寝込んでいとなれば、燕も無理に起こしはしない。緋雄はもぞもぞと戸口に背を向けると、改めて瞼をしつかと閉じた。

妖星ノ巻 其ノ三

それから三日程の、薄ぼんやりとした曇り空の日。

社の境内にて、いつものように翻弄され悔しがる燕に向かい、緋雄が呟いた。

「お前、別なもん使ってみろよ」

「……へ？」

「本太刀、重くて長く持てねえだろ。お前はすばしっこい。だが、刀を支える力が足りねえ」

「……」

「勢いはあるんだ。だがすぐ疲れちまうし、動きが良い割に太刀の振りが重い。だから隙が出来る」

さくりと弱点を指された燕は、尚一層悔しげな顔をしている。緋雄は涼しい顔で小太刀を腰から外し、燕に放って寄越した。

見れば長さはおよそ一尺四寸、確かに軽くて手に馴染むが、二尺以上ある本太刀と比べれば、正直武具としては見劣りする。燕は訝しげに口を尖らせた。

「こんなもんで、大丈夫なのかよ？ 短すぎて、こっちが斬る前に斬られちまう」

「いや、そりゃ知らねえからそう思うんだ。良いか、まず抜いてみる」

そう言われるまま緋色の鞘から抜くと、黒く鋭い刀身が現れた。良く見ると刀身の鏝近くから中程まで、赤い蛇のような飾彫りが為されている。珍しげに眺める燕の背後に回ると、緋雄は細い背を包むように身を寄せ、手を添え構えさせた。

「な、何だよッ？」

「右手に刀、順手だ。鞘は小太刀のつもりで、左に持ってる」

「くっ付き過ぎだつての、離れる馬鹿ッ」

「アア？ こうした方が、動きが判りやすいだろ……ん？ 何だ、もしかして恥ずかしいのか？」

「は、恥ずかしくなんか無えっ！」

そう吠えた燕の頬は、言葉に反しうつすらと赤みを帯びていた。幼い頃から穴蔵で隔絶され育った燕は、自分の特殊な体を気にしているのもあって、他人に触れられるのが苦手だ。背に緋雄の逞しい胸が当たるのを感じ、耳元で響く低い声に、緊張と羞恥がどんどん募る。心臓まで賑やかに跳ね出し、収めようと息を止めても苦しくなるばかり。しまいには何とか離れようと、眼を瞑って猫のように背を丸めた。

「しゃんとしろ！ 全く、俺がこんなにやる気になってんの、珍しいんだからよッ」

「痛てッ！」

へっぴり腰の燕の尻を、ごつい膝で一つ怒突く。思わず背が伸びた体をぐいと引き寄せると、緋雄は両の刀を上段から左右に開き、半身の構えを取らせた。

「構えで引く足はどっちでも良いが、どっちも使えるようにしろ。さて、先ずは一薙ぎ、防いで二振り、振り抜いて……止まるな。止まると隙が出来るぞ」

緋雄はそう言いながら、燕と共に体を翻した。

短く小回りの利く特性を生かした、突きと斬り、回転を組み合わせた基本的な動作。本太刀の扱いとは少し違うそれに、燕も興味を持ったのだろう。二度、三度と繰り返すうちに緊張が解け、真剣な表情で覚え始めた。

一度その気になってしまえば、燕の集中は頗る高い。全体の動きが徐々に滑らかに繋がり、太刀筋に切れが現れる。見計らいつつ緋雄が型を合わせて鞘を当て、鎧を滑らせ絡める要領を覚えさせる。

そうして更に、燕一人で何度もなぞらせた後。緋雄は燕から少し離れて対峙し、鞘に収めたままの本太刀を軽く構えた。

「良し、じゃあやってみろ。俺を斬るつもりで、かかって来いよ」

「おう。お前こそ、間違つて刃に当たんなよ」

そう燕は唸ると半身で立ち、教わったように腰を落として小太刀を構えた。

ゆっくりと歩きながら、互いに睨み合う。三步目に己の草鞋の下で、ぽきり、と小枝が鳴つたのを合図に、燕が動いた。

「ハッ！」

素早く踏み込み、緋雄を刃で薙ぐ。それを右に避けた緋雄が、鞘を横から叩き込んで来た。

「くっ！」

左手の鞘で衝撃を受け、空いた緋雄の胴を狙う。すると緋雄は軽々と跳び上がり、燕の切先から逃げた。それを許さんと燕が反転して間合いを詰め、鞘を叩き込み、勢いのまま横に薙ぐ。本太刀に比べ攻撃範囲は狭いものの、一度相手の懐に入れば、攻撃密度は本太刀よりも濃い。

「ヤアッ！」

暫しの攻防の後、鋭い気合いと共に、緋雄の胸目掛け切先が突き出される。身を翻す余裕が無いと踏んだ緋雄は、咄嗟に鞘から少し抜き、刀身で切先を受け止めた。

耳に障る甲高い金属音が、睨み合った二人の間から発せられる。渾身の突きを防いだ本太刀の刀身にも、小太刀と同じ飾彫りが為されているのに気付いて、燕はにたりと笑った。

「そっちの蛇が親か？ それとも、雄？」

してやったり、と言わんばかりに吐かれた戯言へ、緋雄は少し困ったように笑うと、ゆっくり刀身を戻した。

「……言うようになったなア、燕」

「やっと少し、抜かせたぜ」

そう満足そうに口の端を上げた燕は、ゆっくりと身を引き切先を下げると、叫びながら社へ走り出した。

「じゃ、左も小太刀に替えて、もう一回最初からな！」

「へ？ もう終わり、じゃねえの？」

「何言つてやがるよ、ここで何度もやらなきゃあ、身に付かねえつて教えたのはお前だろうが！」

「えー、俺、もう疲れた。一人でやってくれよ」

「チツ、魔物の癖に根性ねえな。やっぱヘタレ犬かよ」

「ンだとコラ、そんなに言うなら、俺を負かしてみやがれ、この糞餓鬼が！」

良く良く犬と言われるのが嫌いらしい。まんまと糞餓鬼の挑発に乗せられたへたれ犬は、戻って来たにんまり顔を睨み付けると、再び鞘付きの愛刀を正眼に構えた。

こうして、ようやと己に一番合う戦い方を見付けた燕は、この後何度も手合わせを繰り返した。そしてそれは十を軽く越え、いよいよ疲れた緋雄が森の奥に遁走するまで続いたと言う。

やがて夜の帳とばつが降り、少し経った頃。久々に狩った獲物の肉で腹を膨らませた燕は、いつもより早く睡魔に襲われた。

思えば今日は新しい事を習い、思う存分手合わせした。その後緋雄を追い山中を走り、ついでに狩りまでしたから疲れが出たらしい。欠伸を連発し怠そうに眼を擦るのを見て、緋雄は軽く揶揄した。

「何だよ、もう眠いのかよ？ まだ宵の口だろうが」

やはり夜に生きる種らしく、元気になった緋雄は薄暗い社の中で、爛々と眼を輝かせている。

燕はその様子を半眼で見遣ると、這うように寢床へ向かい、緩慢に身を横たえた。すぐ横に小太刀が転がっているのを横目で確認し、こなれた薄い上掛けを引き寄せ臉を閉じる。そうして緋雄に就寝の旨を告げると、彼は益々悪戯な声を上げた。

「やれやれ、やっぱお前、まだお子様だなア。あーあ、つまらねえの。じゃあ、俺はちよつと出掛けて来るか」

「え？」

寝しなに独りで置かれる事が、未だに苦手なようである。燕はやおら瞼を開くと、上掛けを押し遣った。

「ちよつと出掛けてつて、どこ行くんだよ？」

「アア？ 何だよ、寂しいのか？」

「誰が！ 別に寂しくなんか無えつて」

「じゃあ、留守番してろよ。結界だけは張ってつてやるから」

「だから……何処、行くんだよ？」

「お前は知らなくて良いさ」

緋雄はそう言つて立ち上がると、刀を携え社を出ようとした。そして戸に手を掛けたところで、ちらりと振り向く。すると案の定、口をへの字に曲げた燕は起き上がり、着いて来ようと脇差に手を掛けていた。

「おいおい、燕よオ。こんな俺にもよ、お前の知らない付き合いとか、色々あるんだよ。だから良い子で待ってる」

「……」

「お土産、持つて来てやるから」

「馬鹿にすんな、そんなもん欲しがる程、もう子供じゃねえぞ」

口ではそう言いつつも、睨み付ける瞳は揺れている。強がっていても寂しい様子を見せる燕に、緋雄は一つ提案をした。

「じゃあ、黒雅を置いて行く。それでどうだ？」

「……また、アレやらなきやなんねえのかよ？」

「嫌か。なら、独りで留守番してろ」

そう突き離し立ち去ろうとすると、燕が慌てて右手を伸ばす。それを了承と受け取った緋雄は、にたりと笑つと燕の傍らへ寄った。

「何、緊張してる？ 散々やってるんだから、いい加減慣れる」

「っ！」

無造作に伸びて来た緋雄の手に、肩を軽く掴まれただけで、燕は体を固くした。

手はそのまま燕の背を抱き寄せ、緩く結われた山吹の髪を撫で上

げる。そうして露わにされた白い衿足へ、緋雄の唇が押し付けられた。

「う……」

いつもながら、背から体中に奔る快感が堪らずに、燕は唇を噛んで息を詰めた。

黒雅に触れるならば、先に緋雄の邪気を纏わねば、黒い炎に焼かれて死ぬ。だから時々こうして貰うのだが、燕はこの感覚に未だ慣れない。

何故、邪気を纏うと快楽が生まれるのかと、少し前に緋雄に訊いた事がある。すると緋雄は笑って『獲物を逃がさないため』だと答えた。恐怖を快楽で麻痺させ、逃げられなくしてから、ゆっくり喰らう——その遣り方はまるで、毒蛇の捕食に似ていると燕は思う。

ただ一時的に纏うだけだから、体内に邪気を注ぎ込んだ場合と違い、時間が経てば消える。従って燕はたびたびこの感覚に、耐えねばならなかった。

「うう、ま……って」

それにしても、今回はいつまで経っても終わらない。大きな快楽の波はだいぶ引いたものの、触れられたままの唇とかかる吐息が、緩い波を生む。もう離れてくれと燕が身を振ると、緋雄が小さく笑った。

「あー、お前って、本当に不思議な匂いがすんだよなア」

「おまつ、あつ、何して……」

「一遍ちゃんと吸ってみたいもんだ、お前の生氣」

「へっ？」

「なあ、抱かれてみるか、俺に？」

「なっ……何言って、やがるよ？ 俺は、男だ……」

「男だろ？ 女だろ？ が、俺には関係無えよ。大丈夫、たっくさん優しくしてやるから」

「ひあっ！」

戸惑う燕がそっぽを向いた途端、長い二股の舌に頂をぺろり、と

舐め上げられる。本気と見紛う行為に慌てて暴れ出すと、緋雄はよ
うやと身を離して笑い出した。

「いやあ、愉快愉快！　ここまでびくびくされるとはな。本ツ当に
からかい甲斐あるぜ、ハハハハ！」

「へ……？」

「何だよ、俺が本当にソノ気だと思ったか？　全くお前はまだまだ
餓鬼だなア」

「こ、の……馬鹿野郎ッ！」

性質の悪い戯言に怒った燕が、手当たり次第に物を投げ付ける。
緋雄はそれを交わしながら、あつと言つ間に社を飛び出た。

「畜生、もう帰って来んなッ！」

慌てて後を追ひ、燕が社を飛び出す。すると笑い声が遠ざかる闇
の中から、黒雅がのそりと現れた。

せつかく現れた寡黙な友人には何の罪も無いが、燕はついつい齒
を剥き指差した。

「おい黒雅！　お前の主つてえのは、何であんなど助平なんだよッ。
ああ、もう、くっそ腹立つッ！」

呼ばれてわざわざ出て来たのに、いきなり答えよつ無き質問を
投げ掛けられて。黒雅は緋に輝く眼をまん丸くしたまま、闇に向か
つて主への悪口を吐き散らす燕を眺めていた。

妖星ノ巻 其ノ四

夜風にざわめく森の中。高い木立の枝間を、緋雄は飛ぶように疾つていた。

目指すは近隣の、とある村である。そこに棲む『狛』へ用があつた。

やがて森を抜け拓けた野に入ると、緋雄は立ち止り、辺りの匂いと気配を丹念に探る。それから、村の方へゆつくりと歩き出した。

「狛！」

旧友の名を呼ぶ声が、風に流れて行く。すると遠くに影が揺れ、緋雄へ近付いて来た。

のしりのしりと歩く体は黒甲冑を纏い、背に大きな鉈を背負っている。灰色の毛に覆われた顔は熊のようだが、大きく尖った耳と長く飛びだした鼻面は、狼にも似ている。

狛は緋雄の前まで来ると、にんまりと笑い口を開いた。

「久しぶりだな、緋雄。また峠を変えたと聞いたが、この近くに来たとは」

「ああ、こここそ山奥に隠れて暮らしてるぜ」

「お主らしからぬ様子だな。まあ、元々変わっておったから、今に始まつた事ではないが」

「何だよそりゃ」

「気にするな。まずは茶でも飲もうか」

狛はそう言うのと緋雄を促し、自身の峠へと足を向けた。

狛の峠は、村の端にそびえる断崖にある。案内されるまま中へ入ると、壁一面に作られた棚には、たくさんの酒瓶が並べられていた。狛はその中から一升瓶を選び出すと、胡座をかいた緋雄の向かいへ座った。

「茶じゃなかったのかよ？」

「我が家ではこれを茶と言う。主も知っているだろう。まあ、遠慮せずに飲め」

狛はそう涼しい顔で答えると、緋雄に持たせた湯呑へ、溢れんほどの勢いで注いだ。

まったく、この狛という魔物はよほど酒が好きらしい。

緋雄にとつて酒は寢所で女と嗜むものであつて、こんな強面な魔物と差して飲むのは、正直好みではない。だが狛は早く飲めと、金茶の瞳で圧を掛けてくる。仕方無しに口を付けた緋雄は、少し含んだ途端に思い切り顔を顰めた。

「何だこれ？ 随分きつついなア」

「我の特製だからな、どうだ、美味いだろう？」

美味しい、以外の返事是要らないという風情で笑うと、狛は自分の湯呑に注いだ酒を、一気に飲み干した。

そうして酒を酌み交わしながら、暫し互いの近況を語り合う。や

がて狛が二本目の酒に手を掛けながら、緋雄に訊いた。

「して、今夜は何用だ？」

「ああ、お前の村から、少し雑貨を分けて貰いたくてな」

「ほう。もしかして例の、人間の子供の為か？」

「何で知ってんだよ？」

僅かに驚く緋雄を見て、狛は呆れたように小さな溜息を吐いた。

「北ノ郷の小守から聞いたと、この辺の小守が噂していたぞ。贅の女を喰らわずに生かして置いたと思えば、今度は人間の子供を拾つて、育てておると。遊びにしては随分と面倒な事だな」

「……そうか。忘れてたぜ、アイツ等は結構お喋りなんだって」

緋雄は参ったと軽く額を押え、小さな苦笑を洩らした。

小守は北ノ郷だけでなく、この国のあちこちの森に固まって住んでいる。彼等はほとんど喋らないが、同族の間では常時、何かしらの意思伝達若しくは、情報の共有が為されているらしい。よつて、例えば最南の地で起こった出来事も、一晩あれば最北の地で知る事が出来た。そこは大変有り難いから、仲良くしておくに越したこと

はないのだが、その情報に自分の話が含まれて居るとなれば、困ったものだ。

小守の噂が真実だと知り、狛は半ば呆れたように尋ねた。

「緋雄よ、そんな真似をして、お主にとって、一体何の得があるのだ？ それともその子供は、喰らうために育てているのか？」

「さあな、俺にも判らねえよ」

緋雄のはぐらかすような返事に、金茶の瞳が怪訝に細められる。

狛は中々減らない緋雄の湯呑みに酒を足しながら、更に話を続けた。

「穢れの子、だそうだな」

「ああ」

「どうする気だ？」

「何が？」

「人間のままで喰らうのか、それとも魔物にするのか」

「判らねえ。そもそも、本当に穢れなのかも知らねえし」

そう緋雄が軽く答えると、狛は益々怪訝な顔をした。

「確かめておらんのか？」

「ああ」

「ほう、口付ければその『味』ですぐ判るだろうに。色事好きなお主らしく無いのう」

「余計なお世話だ！」

そう齒を向いた緋雄を見て、狛はにやにやと笑った。その表情がまだ何か言いたげにも見えて、緋雄はこれ以上その話を振るなど、そっぽを向いた。

狛との付き合いは、緋雄が北ノ郷に来て以来のものだ。だから緋雄が好む『贅の喰らい方』も知っていて、色事と言う表現はそれを差しているのだろう。

緋雄にしてみれば、貰ってすぐの贅を体ごと喰らってしまう狛の喰らい方は、とてもつまらないと思う。だが喰らい方はその魔物の性分や好みがあり、どちらが良いとか美味いとか言っても、埒が開かぬ話でもある。

狛は手にした湯呑みが空なのに気付くと、手酌でまた溢れんばかりに酒を満たした。

「何れにしろ、早々に決断した方が良いだろう。噂によれば、そろそろあの『星』が現れると言っからな」

「もうそんな時期か。何時だ？」

「具体的な日時は判らぬ。ただ、巖岳に棲む、かの陰陽師崩れからの話だから、間違いはないだろう」

「へえ……そりゃあ、大変だ」

そう一言返事をした緋雄は、静かに目を伏せると、ゆっくりと湯呑に口を付けた。

「あの星が来たら、主とは会わぬように気をつけねばな」

「ああ……全くだ。俺も、そう思うぜ」

緋雄は薄く笑うと、狛の言葉に頷いた。

緋雄が自身の埒に戻ったのは、明け方であった。

社の戸をそつと開けると、隙間から差す薄明かりの中で、黒雅の瞳が光る。近寄ると、黒雅の寝そべった腹に収まるように、燕が背を丸めて眠っていた。

「ご苦労さんだったな、黒雅」

屈んでその大きな頭を撫でると、黒雅は眼を細め、小さな唸りで答えた。そして燕からそつと身を離すと、闇に溶けるように消えて行った。

独り寝床に丸まった燕は、深い眠りに入っているらしく、静かな寝息を立てている。隣に胡坐をかき、その無防備な顔を眺めるうち

に、緋雄の脳裡に豹の言葉が過った。

口付ければ、すぐに判る——つまり生気を吸えばその味で、燕が人間か否かすぐに判ると言う事だ。

今まで緋雄は、どちらでも良いと思っていた。共に暮らして来た日々は面倒が多いものの、独りで居るよりも楽しい。それに燕は（これは不確定な情報からの推測だが）ようやく元服出来る年頃に達したばかりである。しかも本人は人間だと、頑なに信じている。ならば、それをわざわざ確かめる必要は無いと思っていた。

無論この先もずっと、このまま暮らせるとは思わない。人間は脆弱で寿命も短い。その上、いつ燕の気が変わり、緋雄の手から離れて行くかも判らない。そして、それは緋雄も同じだ。もしかしたら何処かで気が変わって、燕を喰らってしまうかも知れない。

「ん……」

燕がもそもそと上掛けを抱きながら、仰向けに寝返りを打つ。その脛は未だしつかりと睨られ、時折長い睫毛が揺れる。ふと緋雄は、燕に触れてみたくなった。

——こういうのを『魔がさす』と言うのだろう。

何の考えも無しに緋雄は右手を伸ばし、燕の顎を軽く押さえた。そうしてゆつくりと、燕の顔の上に屈み込み、その薄い唇に己のそれを寄せる。一寸足らずまで近付いても、燕は目覚める気配すら無い。間近で見たその肌は白く、艶やかで肌理が細かった。

「女だったら、良かったのになア……いや、女じゃ無くても、良いか」

緋雄がそう言ちながら、親指の腹で薄い下唇をなぞると、不意に燕の脛が開いた。

「っあああッ、な、何だデメエッ！」

「ぐわっ！」

驚き叫んだ燕が動転したせいか、思い切り起き上ろうとする。その途端、こん、と鈍い音が響き、同時に燕と緋雄の額に激痛が奔った。

「痛つてえ……酷え、この糞餓鬼が」

「うつ、うつ……何言つてやがる、つつか、お前何し……まさか！」

「アア？」

「俺に、俺にせ、せつ……」

「安心しろ、まだしてねえ」

「うわあああ！」

いきなり叫ぶと、燕はばね仕掛けの玩具のように飛び起き、社の壁に張り付いた。そしてその驚愕の表情が、見る間に真っ赤に染まっっていく。

まさかこれ程の反応をされると思わず、緋雄が啞然とする前で。

燕は少し緩んだ着物の衿を掻き合わせると、思い切り怒鳴った。

「こつ、この犬野郎、盛りでも付きやがったかよッ！」

「盛り？」

「俺に近付くな、助平、変態！」

あんまりな言われ様である。流石に緋雄もひくひくと眉を震わせ、低く唸った。

「オイ、そこまで言うかよ」

「アア？ もつと言つてやろうか、この戯け犬が」

「んだと、この餓鬼。言いたい放題言いやがって」

立ち上がった緋雄は額に血管を浮かせ、怒りの笑みを浮かべて燕を睨み付ける。それに怯まぬ燕は足を踏ん張り、歯を剥いて拳を構えた。

夜明け前の静かな一時に、社から喧嘩の騒がしい音が響く。それは朝陽が顔を出す頃まで、辺りに響いていた。

妖星ノ巻 其ノ五

その喧嘩の後から、燕は緋雄と微妙な距離を置くようになった。喰われそうになったとは、思っていない。ただあの時見た緋の瞳を思い出す度、燕は原因不明の症状に見舞われた。

生気を吸おうとしたのか、それとも口付けようとしたのか——それを考え出すと、同時に頬が熱くなり心の臓が高鳴る。

こんな事は初めてで、もしかしたら悪い病なのかも知れないが、誰に問う事も出来ない。だが平時は元気で食欲も多分にあるから、時が経てば必ず治まる——燕はするように己を納得させ、緋雄の前では至って変わりない振りで取り繕った。

そんなある夜の事。緋雄は粗末な夕餉ゆづけを食う燕に、ふと声を掛けた。

「なあ燕。お前、人間の街に興味はあるか？」

「へ？」

「お前、前に連れて行って、膨れただろ。行ってみてえか？」

灯された暗い油行燈の元で、こちらを見る緋の瞳が悪戯気に笑っている。燕は徐に緋雄へ向き直ると、期待と不安で顔を少し強張らせた。

「本当に？ でも、俺は、こんな髪だし……」

「アア？ 見てくれなら、俺が何とかしてやる。今時期は花火も上がるからなア、ありゃあ一生に一遍は、観る価値あるぜ」

「はなび？」

「ああ、でかい川の向こう岸から、夜空に大きな華が咲くんた。綺麗だぞ」

そう言う緋雄の顔は、本当に楽しげに見える。燕は少し迷ってから、はつきりと答えた。

「行きたい……街に、行ってみたい」

「そうか。じゃあ早速だが、明日発つぞ。善は急げつてな」
「おう！」

燕はそう元気に頷くと、残りの飯を急いでかき込み始める。その張り切った様子に緋雄は苦笑しつつも、見慣れぬ風呂敷包みを渡した。その中身は狼の処で手に入れて来た、旅装束と編笠であつた。

「これ、俺のか？」

「ああ、そりや笠だ。頭に被るんだよ」

「へえ……こうして、こうか？ でもこれじゃあ、俺の髪、隠し切れねえぞ」

頭に編笠を載せた燕が眉を寄せると、緋雄はあつけらかんと笑つた。

「大丈夫だ。俺が人間の目をちゃあんと欺いてやるから」

「え？」

「結界張つてやるよ」

「結界つて……大丈夫かよ。俺にまで張るの大変なんだろう？」

「全然。朝飯前だ」

そう頭をぼりりと搔いて、緋雄が軽く答える。すると途端に燕は緋雄を睨み付け、口を尖らせた。

「何だよ、前におゆうと行った時には、大変なんだつて言つた癖に。ありや嘘かよ？」

「あー、そんな事言つたか、俺」

「言つた！ 畜生、騙しやがつて」

「まあまあ、怒るな。アレは事情があつたからよオ」

あれがおゆうの最後の旅になつた事は、燕も判っている。それを言われては仕方無いと言うように、燕は小さく溜息を吐いて、引き続き風呂敷の中を掻き回した。

そうして迎えた翌朝。旅装束に身を包んだ二人は、峠を出て巖岳

を回り西へ向かった。

生憎の曇天ではあったが、真夏の日差しがかんかと照り付ける中を歩くよりは良い。況してや緋雄は魔物であるから、日光に当たればその分疲れも出る。故に真昼の時間帯は、少し休憩をとる事に決めた。

冗談を言い合い、寄り道をし、ついでに小競り合いもしながら歩いた、二日後の夕方。ようやく二人は目当ての城下町に入った。

「うわ……」

夕陽が長く影を伸ばした街道から、真っ直ぐ繋がる大路の、大きな橋の上で。燕は人波を避け手擦りに寄ると、緋雄の背に半分隠れた。

「何やってんだよ？」

「だって、人がたくさん居て……」

そう答えた消え入りそうな声は、かなり硬い。見れば燕は僅かに震え、いつの間にか緋雄の左の袂をしつかと握っている。緋雄は綱笠で隠れた燕の顔を覗き込むと、にやりと口の端を上げた。

「何だア、何おたついてやがる。もしかして、怖いのか？」

「こつ、怖くなんてねえって。ただ、ちよつとびっくりしただけだつて」

「へえ、こんなに俺の袂引いてるくせにかよ」

「そりゃ、迷子にならねえ為だから、別に怖いからじゃねえからなッ」

そう小さく啖呵を切るが、いつもの威勢は何処かへ消え去っている。緋雄は小さな溜息を吐くと、袂ごと燕の手を握り、ゆっくりと橋を渡った。

並び立つ商店や飯屋、茶屋の前を通り、大路を東へと進む。すれ違う町人や武士を怖れながらも珍しそうに、燕はちらちらと笠の陰から盗み見て歩いた。対して前を緋雄は背を伸ばし、ごく普通に歩いている。そのうちに燕は、すれ違う女や娘らが時折、緋雄に意味深な視線を投げるのに気付いた。

確かに、長身の緋雄は良く目立つ。しかも中々の偉丈夫と来れば、目でも合わせて微笑めば、きつと女達は脈ありと見て声を掛けてくるに違いない。そう思うと、燕の内に何故だか苛々とした感情が沸いてきた。

「オイ、燕。もうちつと堂々としろよ。今のお前はごく普通の旅人なんだから、びくびくしてると却って怪しいぜ」

燕の心情を知らぬ緋雄が、のほほんとそう声を掛ける。それへ更に苛つきながら、燕は繋いだ手を尚更握り締めた。途中でまた大きな橋を渡れば、川の上には煌びやかな、平たい船が幾つも浮いている。緋雄はそれを指さして、あれが屋形船だと燕に教えた。

「やかたぶね？」

「ああ、おゆうと来た時に乗ったんだ。懐かしいなア」

「あの船にか？」

「おう」

風いだ川面に光の帯を広げ、一つの船がゆつくりと動き出す。その屋形の中を照らす明るい光の下には、きつと自分の知らない楽しみが詰っているに違いない——燕はそんな羨望を向けて、川下へ過ぎゆく船を見送った。

それから緋雄に連れられ、うらぶれた小さな飯屋へ入る。そこで燕は出て来た麦飯を一口頬張り、思わず声を上げた。

「美味しい！」

「そうだろう、私の飯は特別さ。さあ、たと食べてお行き。また明日も歩くんだろう？」

人の良さそうな白髪の老婆が、木綿の前掛けで手を拭いながらこちらへ声を掛ける。その笑顔に戸惑う燕に代わって、傍らで茶を飲んでいた緋雄が適当に返事した。すると老婆は気を良くして、益々話し掛けて来た。

「あんたたち、何処から来なすったんだい？」

「隣の町だ」

「へえ、それで、何しに？」

「上方の親戚のうちへ、祝い事にな」

「祝い事、ああ、めでたいねえ。祝言かい？」

「ああ」

「へえ、何でも上方は盛大に祝うって聞いたけど、そうなのかい？」

「おう、お陰で御祝儀貧乏になっちまったぜ」

「あらあら、それはしょうが無いねえ。だって祝いだもの、フッフ」

老婆は何度も目出たいと言いながら、新しく入って来た客に注文を貰い、厨房へと入って行く。それを横目で見ていた燕は、小さな声で緋雄を咎めた。

「嘘ばつかじゃねえか」

「本当の事、言えってか？」

「そうじゃねえけど、色々言い過ぎだろ」

「フッフ、判りやしねえよ」

緋雄はそう笑うと、茶をゆっくり飲み干した。そして燕がすべて平らげるのを見計らい、角卓の隅にお代を置くと席を立った。

飯屋から出て、人通りの少なくなった川縁を少し歩く。緩い夜風が吹き始め、それが笠を外した燕の頬を撫でるのが、何とも言えず心地好い。すれ違う人々は時折こちらをちらりと見るが、特にそれ以上の反応は無い。燕はようやく警戒を解き、明るい声で緋雄へ問い掛けた。

「なあ、今夜の埒は？」

「ああ、そうだな……うん、彼処に泊まるか」

そう言いながら緋雄が顎で指し示した先には、大きくて立派な旅籠があった。

その門構えはまるで武家のお屋敷のようで、見るからに一見の旅人いちげんなぞ泊まれそうもない。おまけに玄関口には丁稚が二人も控え、軒の右側には『幕府御用達』を意味する立派な看板まで上がっている。流石に世情を知らぬ燕も、その雰囲気いづかに眉を顰めた。

「何だかすげえ立派だぜ？」

「おう」

「この埃だらけの汚い形で、あんな処入ったら、いきなり怒られそうだぜ」

「まあ見てろ。おっと、お前は喋らねえでにこにこしとけよ。判ったな」

緋雄はそう軽く言うと、何の臆面も無く丁稚に近付き、宿泊の旨を告げた。

——それから燕は緋雄の嘘八百に、ただただ黙って引きつり笑いを浮かべていた。

玄関先へ応対に出た旅籠の女将は、確かに最初は訝しげな眼で、二人を見ていた。しかし緋雄がとびきりの笑顔で、何某の禄を食む仕官の『安斉』だと名乗った途端、女将の顔は見る見るうちに弛んだ。

更に密事を打ち明けるように、女将にぐつと顔を寄せ『若に着いてお忍びで旅している』と燕を示すと、女将は慌てて番頭へ空部屋の確認をさせた。だが今夜は生憎、一番宿賃の張る離れしか空気が無いらしい。女将がしおらしく小首を傾げて伺うのに、緋雄は一つ頷き、懷から分厚い財布を取り出した。

「そこで構わぬ。内々の旅ゆえ、却ってこちらには好都合。ところで離れに風呂はあるか？」

「ええ、ええ、勿論ございますとも！」

「ではそこへ世話になろう。これは前金だ。それから、何かにと用事を頼む事になるかも知れぬ。残りはそちが取っておけ」

そう言いながら、緋雄は小判を一枚女将に握らせ、ついでにその綺麗な手をきゅ、と握った。

「まあ……」

「遠慮は、要らぬぞ」

女将は顔を赤らめると、緋雄に握られた手に、もう一方の手をそっと添えた。

まったく、何故この魔物はこいつも世慣れているのか。恐らく緋雄

なら人間と偽って、誰にも気付かれずにここで暮らして行けるだろう。

それにしても、金を渡すついでに女将の手までも握るとは、何とも下心丸出しの助平である。だが良く見れば、女将も緋雄の手にしかと指を絡め、握り返したりさすったりしている。その様子にいいよ苛々し始めた燕は、大きな咳払いを二度、三度と繰り返した。「あ、あら、嫌だわ私ったら！　ありがとうございます、安斉様。では、暫しお待ちを。すぐ番頭に案内させますゆえ」

緋雄に握られた手を、女将が頗る残念そうに離す。それを眺めながら、燕は一層不自然な引きつり笑いを浮かべた。

番頭に案内された離れは広くないものの、茶室に似た質素で品の良い造りである。燈籠が照らし出す短い渡り廊下の先には湯殿があり、番頭は急ぎ湯を張ると言つと、恭しく頭を垂れて去って行った。「うわ、すげえな。この部屋、こんな処に窓があるぜ」

室内を探検する燕が屈みこみ、中庭を望む障子を開けて感心している。きつと設計者の洒落なのだろう、その窓は壁の下方に付いており、燕の頭がようやくと通る程の小さなものであった。

それから押入れを開け、天袋を覗き、床の間の掛け軸の裏までめくる燕を見ながら、緋雄は困った様に笑った。

「おいおい、初めて来たからって、みつとも無えな。それじゃまるで飼いたての猫が、探検してるみてえだろ」

「良いだろ、そんなくれえ。もう二度とこんなところ、泊まらねえだろうし」

そう言いながらも、燕は足音高く厠へ走って行く。そうして戻って来ると、今度は卓の上に茶菓子が置かれているのを見付けて、恐る恐る齧った。

「美味しい、これ、すんげえ美味しい！」

「そうか、良かったな。明日はもっと色々食わせてやるよ」

「本当か？」

「ああ」

やった、と諸手を上げて喜ぶ燕は、子供のように無邪気に笑っている。緋雄は黙ってその表情を見ていたが、徐に旅装束を解くと、奥に敷かれた布団の一つへごろりと横になった。

二つ目の茶菓子を頬張る燕に背を向け、暗がりに向けられた瞳は人間を模して黒い。しかし、そこに僅かな寂寥が浮かんで見えるのは、瞳の色のせいだけでは無いようだった。

妖星ノ巻 其ノ六

翌日。

朝から出掛けた緋雄と燕は、一日のほとんどを物見に費やした。城下を見下ろすように建てられた美しい城が、陽光に白く輝くのを目の当たりにし、燕はただ圧倒された。そして、そこに巡らされた石垣の天辺から広がる街並を眺めれば、数多の人間がせわしなく蠢いている。その様子に、自分がいかに狭い世界で暮らして居たかを実感した。

次に訪れた近くの寺にはたくさんの参拝客が居て、皆一様に賽銭を投げては、眼を閉じ手を合わせている。燕はその群中で立ち尽くし、ぼつりと呟いた。

「こんなもんまで、作っちゃうなんて」

見上げた仏像の顔は遥か頭上で、あんな高い場所にあるものをどうやって造ったのか、燕には想像も付かない。積み重ねられた歴史と人間の信心、努力の結晶を前に、緋雄は呆れたように溜息を洩らした。

「一人ひとり是非力なくせに、良くこんなもん造るよなア。全く、見る度に嫌なっちゃうぜ」

「ん……でも、すげえや」

「アア？」

「俺には、こんなもの造るなんて、想像も付かない。この像の名前も、謂われも知らないけど、きつとたくさんの人が苦労して造ったんだ。そう考えたら、やっぱりすげえ事だ」

燕は眼をきらきらさせ、仏像をまた見上げる。その様子を暫く眺めてから、緋雄は踵を返した。

「行くぞ。ここでいつまでも、こんなもん眺めて居られるか」

「あ、ちょっと待てっつーの！」

後ろから燕が慌てて駆けて来るのを感じながら、緋雄は構わず足

を進めた。

予想はしていたし、己が仕向けた事だったのだが、緋雄にとって燕の反応は面白くなかった。

あんな北の小さな村で、ずっと穢れと蔑まれて来たくせに、何故燕の心は捻じ曲がつていないのか。本当なら、もっと『世の中』や『人間』という存在自体を憎んで居ても良い位である。

だが燕は、飯の美味さや人間の創造物に、簡単に感動を覚える。その様子がまるで、燕が人間に好感を持っているように見えて、緋雄には納得が行かなかった。もつと言えば、その外観の問題すらなければ、燕は人間の中で暮らしたいのではないかとも思える。そこまで考えた緋雄の脳裡に、豹の言葉が蘇った。

——こんな事をして、一体何の得があるのか。

それに対し、緋雄の中に明確な答えは無い。喰らうためで無いのは確かだが、燕と共に居るのは独りで生きるより楽しい、位しか答えられない。けれどそれは、非常に不確定な感情である。

緋雄がそんな思いに捉われているのを知らずに、燕はまた興味を惹く対象を見付けると、勝手にふらふらと足を向ける。今度は香煙が立つ大きな甕かめが気になったらしい。燕は近寄ると覗き込んで、緋雄を呼んだ。

「なあ、こつち来いよ！ 何だか面白えぞ」

「……俺は良い」

人間にとつては有り難い煙でも、魔物にとつて、況してや鼻の良い緋雄にとつては非常に臭い。思い切り顔を顰める緋雄を見て、燕はようやくそれに気付き、早足でこちらへ戻って来た。

「悪い、つい……俺、思い切り浴びて来ちまった」

「ふん、俺が苦手なのは、お前も知ってるだろうが。嫌がらせか、それとも何かの仕返しか？」

「そんな事するか！ 本当にちよつと忘れちまっただけだつて。だって、今のお前は真人間に見……んぐっ」

「それ以上言うな馬鹿」

燕の薄い唇を、指で素早くきゅ、と摘まんで閉じる。更に見下ろすように軽く睨み付けると、燕はごもごもと何事か呟いて、眼を白黒させ藻掻いた。それが面白かったのだろう。緋雄は笑って手を離すと、何か悪戯を思いついたように眼を細めた。

「じゃあ、燕。取り敢えずその臭い旅装束を着換えるよ」

「へ？ でも俺、替えの着物なんて持ってねえぞ」

「知ってる。だから、着替屋へ行くんだろうが」

「何だ、着替屋って？」

「行けば分かる」

その店の名称からして訝しく思ったが、緋雄に嫌な思いをさせてしまった手前、行かぬとも言いつらい。燕は少し困ったように眉を寄せると、足早に鳥居を抜けて行く緋雄を追った。

「……だからって、何で俺がこんな格好を」

大きな姿見の前で、燕は悔しそうに唸った。

——仏像を祭る寺から大路を戻り、逗留する旅籠を過ぎて街の南端に突き当たると、その一帯はぐるりと堀で囲まれており、赤刻門あかどきもんと呼ばれている。現在、緋雄と燕はその敷地内にある『着替屋』の店内に居た。

赤刻門を潜ってからすぐ、燕は違和感を感じた。

門前の本路に立ち並ぶ建物の殆どには赤い格子が嵌まり、奥は小奇麗な座敷になっている。明らかに何かの店なのだが、昼間であるにも関わらずまったく活気が無い。

「何だよ、ここは？」

「大人の遊戯場だ。まあ、細かい処は気にすんなよ」

緋雄は笑って応えようと、ずんずんと街の奥へ歩みを進める。迷子

になつては敵わぬと、燕は少し早足で追い掛けた。

細い小路をくねくねと曲がり、一際大きな旅籠らしき建物の裏に行く。そして突き当たりで緋雄が示したのは、桃色の打掛けが戸口に大きく描かれた店だった。

一声掛け足を踏み入れると、お長に化粧を施し科しなの効いた、怪しい男店主が現れた。そして緋雄は彼にあれこれ言いつけると金を渡し、燕を奥の衣裳部屋に放り込んだ。

その結果が、この姿である。

「ちつくしょう、野郎、完ツ全に遊びやがつて」

そう齒軋りした燕は髪を結われ、薄い化粧を施され、粹な蒼縞の着物と紅椿の柄帯を身に付けている。衿を大きく扱くいて細身に裾を着付け、帯は角出しにして低い位置で締めるのは、今一番の流行りだそうだ。

小股内股で歩き、肩でもしんなりと落とせば大層良い女に見えるのだが、燕にそんな事を要求するのは所詮無理である。案の定、店主がふと眼を離れた隙に、燕は朱の腰巻が露わになるのも構わず、思いつきり股割をかました。

「あらあら、駄目よ、着崩れちゃうでしょッ！ 良い？ おなごは淑やかに、股なんか簡単に開いちや駄目。開くのは寢所で、旦那の前だけにしときなさいな」

そう店主が燕をたしなめるのを、遊び人風の白い着流しに着替えた緋雄は、げらげら笑いながら見ている。燕は真つ赤になり、綺麗に紅を差された唇を思い切り歪めた。

「この糞野郎が、後で覚えてやがれッ！」

「んまあ、何て汚い言葉なこと！」

店主はそう厳つい顔を顰めると、嫌がる燕の裾を慌てて直しかかる。そして紅の帯の間に何度も手をつ込みながら、緋雄に問い掛けた。

「とんでもないお転婆ですねえ、この子は。それともなあに、旦那はとびきりのじゃじゃ馬がお好みなんですか？」

「あー、まあ、な。賤の出来た馬より、懐け甲斐があるってなもので」

「んまあ、旦那ったら、素敵ねえ。アタシも旦那になら、手名付けられたいわ」

くねり、と肩を揺らし店主が流し見るのを、緋雄が眼を逸らしさりと交わす。まともな受け答えはしたくないらしい。

それから燕の着崩れが整った辺りを見計らい、別れを惜しむ店主に幾許かの心付けを押し付けると、二人は足早に店を出た。

気付けば陽は落ち、あちこちの店から淡い光が洩れている。下駄を鳴らしその前を通ると、艶かしく呼ぶ声と共に、白粉に染められた生気の無い顔が幾つも緋雄を見詰めた。

「何だ、ここ……？」

「この店は色茶屋だ。つまりここは色街。まあ、女が自分を売る場所だな」

あちこちから呼ぶ声に愛想良く手を振り、緋雄はそうさりと燕に告げた。

「色、街……売る？」

「おつ、あの女、イイ女じゃねえか。あー、寄りてえなア！」

緋雄がそう声を上げる傍らで、燕は暫く考えていたが、不意に小さな声を上げた。ようやと『色』の意味が、判ったらしい。途端に恥ずかし気に俯くと、繋がれた緋雄の手を強く引いた。

「イタツ、こら、何だよ？」

「ウツセエ、この助平！ 愛想振り撒いてんなツ。一体何の気で……」

そう燕が声を荒げた途端、肩先が僅かに、すれ違った誰かの体に触れた。

「痛えなあ、女」

低い濁声に燕が振り向くと、そこには見るからに悪相の男が、腕を擦りながらにやにやと笑っていた。

「何だ、お前？」

「おお、俺を『お前』呼ばわりとは、随分威勢の良い女だな」

「デメエ、兄貴に何て口訊きやがる、アア？」

兄貴と呼ばれた悪相の横から、派手な赤の着流しを纏った若造が、懷に忍ばせた短刀の柄をちらつかせてこちらへ迫る。負けじと燕は一步踏み出し、その若造を睨み付けた。

「うるせえ、この出っ歯」

「な、何だとこのアマ！」

怒る出っ歯が、燕の胸倉を掴もうと手を伸ばす。それを一瞬早く、緋雄の手が払った。

「オイオイ、止めてくれ。コイツは元来、口が悪いんだ。だから、尚怒らすような真似はしないでくれよ」

「うるせえ、元はと言えば、この女が兄貴にぶつかりやがったんだぜ？　なあ、兄貴」

出っ歯が見え見えの言い掛かりを付け、背後に立つ兄貴が痛い痛い、わざとらしく腕を擦る。緋雄と燕に因縁を付け、金品を巻き上げようという腹らしい。

気付けば周りに人垣が出来、その中から奴等の仲間らしき輩が次々に姿を現す。それが八人に増えたところで、兄貴はにやにやしながら緋雄へ告げた。

「俺の腕、折れちまつたかも知れねえ。骨接ぎに幾ら掛かるかなア？　どうするよ、兄さん」

「ハア？　俺はこれから、コイツと遊びに行くんだ。生憎、お前等に払う金は無え。だから、見逃してくれよ」

「見逃せ、つか？」

とんだ腰抜けだと、二人の周りから嘲笑が沸く。じりじりと距離を狭める悪相達の中から、野次が飛んだ。

「じゃあ、その女置いてけ。それでチャラにしてやるから」

「置いてくのは良いが、お前等の手に、コイツが負えるかなア？」

「アア？　畜生、何だよそれ！　こんな格好させた上に、俺を置いてくたど？」

けんけんとかえる燕を見て、緋雄は面白そうに笑って居る。そのうち燕が犬と罵ると、緋雄の眉がひくりと跳ねた。

「だから犬言うなって！」

「うるせえ、じゃあ馬鹿！」

「俺は馬でも鹿でも無えって、何度言ったら覚えやがる、この糞餓鬼！」

「もう俺は餓鬼じゃねえ！ 一人で寝れるし、厠にだって行けらあ！」

「ハッ、そうかよ、だが一人でお使い出来んのか？」

「そ、そのうち行けるようになるっての。つつかお使いなんて、今関わり無いだろうがッ」

緊張感を欠いた間拔けな罵り合いに、流石に悪相共もげんがりした顔になる。だが、ここで引きさがる訳も無い。出っ歯はやおら腕まくりすると、背を向けていた緋雄に啖呵を切った。

「うるせえうるせえ！ 痴話喧嘩なら、この山城一家にのされてから、あの世でやるんだな！」

その一声を皮切りに、兄貴を除く悪相達が次々に拳を握る。そうして燕の後ろに陣取った頬傷のある男が、まず燕を捕まえようとその肩に手を掛けた。

「触んなッ」

「ぐあ！」

掴んだつもりが躲され、逆に手を引かれ前のめりになる。一瞬がら空きになった頬傷の脇腹に、燕の肘ががつりと食い込んだ。途端に意識を飛ばした頬傷が、地面に沈んでいく。そのまま首に手を掛け、息の根を止めようとした燕に、緋雄が他の悪相を投げ飛ばしながら叫んだ。

「殺すな、後が面倒になる！」

「ハア？ チッ！」

面倒臭いと舌打ちした燕に、今度は短刀を抜いた出っ歯が突っ込んで来る。しかしその動きは、緋雄と修練している燕にとって緩慢

だ。強く突かれた切先を軽々と交わし、燕はそのまま脛に回し蹴りを見舞った。

「ぐ、うあつ！」

思わず出っ歯が引っくり返り、衝撃に苦鳴を洩らす。燕にその腹を更に蹴り上げられ、短刀を握ったまま白目を剥いた。

一方緋雄は、自分よりも一回り大きな禿の巨漢と対峙していた。

巨漢の手には、抜き身の脇差が握られている。それを睨み付けた緋雄は脇差も抜かず、楽し気に口の端を歪めた。

「随分鈍った刀だな。血曇りばかり付けやがって、そんなんじゃ俺は斬れないぜ？」

「うるせいや！」

そう唸る巨漢が一気に振りかぶり、緋雄へ走り寄る。袈裟に薙ぐ刃をふわりと避け、返す刀に跳んで逃げる。その意外な身の軽さに驚きながらも、巨漢は更に脇差を握り直し、腰だめに構えた。

「ウリヤアツ！」

鋭く突き出した切先が見事緋雄の腹に吸い込まれたと、一瞬喜んだのも束の間。瞬きする間に白い着流しは消え、次の瞬間、それはすぐ眼前に現れた。

「え？」

目で追えぬ速さの動きに、巨漢は刃を突き出した格好のまま唾然とした。身を引かねばと戦^{おの}いた矢先、緋雄の両手に喉を捉えられ、ぎゅうと締められた。

「う、うぐ……」

息が、止まる。同時に体から何かが抜け出る異様な感覚に、巨漢は固まった。

「あ、面と同じでやっぱり不味いな」

頭から血の気が引き、視界が緋色に染まり、体から活力が消えていく。霞む意識に緋雄のおどけた響きが回るうちに、巨漢は地に崩れ落ちた。

ばたばたと仲間が倒されて行く中で、兄貴は一人、悔し気に歯軋

りした。周囲の人垣からは、意外な強さを見せる二人に称賛が沸いている。

このまま全員のされては、山城一家の面目丸潰れだ。そう苦々しく思う耳に、遠くから呼子の甲高い音が響いた。誰かが番屋の岡っ引に知らせたのだ。

「チツ、これまでか。おい、テメエ等！ 命拾いしたな。今日はこの辺で勘弁して……グワツ！」

負け犬の遠吠えを唸る兄貴に、燕を抱えた緋雄が、思い切り体当たりをかます。情けない悲鳴を上げた兄貴が吹っ飛ばされる間に、二人はあつという間に赤刻門を抜け、暮れかけの闇に紛れた。

三人の岡っ引が、ようやと乱闘の場に駆け付けた頃。

そこには死にかけの鮪のように横たわる山城一家の悪相共と、往來の端で腕を押さえ悶絶する兄貴が残されていた。

妖星ノ巻 其ノ七

「ハハハハ！ ああ面白かったなア！」

「うつ、げほつ、ごふつ、も、もうちょい丁寧に扱え、この馬鹿ツ！」

往来から少し逸れた、小路の目立たぬ場所。ようやくと地べたへ下ろされた燕は、苦し気に咳込んだ。

先程の乱闘の最中に、いきなり背から抱えられ、胸を絞められたせいで息が次げなかった。現れた岡っ引に捕まらない為逃げたのは判ったが、それにしても手荒である。

まだ苦し気な燕の背を暫し撫でた後、緋雄はふと顔を上げ、鼻をひくつかせた。

「少しそこらを冷やかしてから帰るか。良い匂いがしやがるぜ」

「この格好でかよ？ 俺は嫌だって……あ、コラ待てツ！」

燕の呼び掛けを笑顔で流すと、立ち上がった緋雄はすたすたと小路を進む。その背が角を曲がり見えなくなって、燕はようやくと後を追った。

走り出た往来には人が溢れ、何やら賑わいを見せている。人波から頭一つ抜きん出た緋雄に、燕がようやくと追い付くと、目の前にはたくさんの提灯が揺れていた。

「うわ……」

小さな神社であるが、照らされた赤い鳥居の向こうには、屋台が軒を連ねている。燕は目を輝かせて緋雄を追い抜き、境内へ入った。屋台には実に様々な物が並べられ、あちらこちらから甘く香ばしい匂いがする。燕は一つ一つ覗いて、小間物や煎餅や、餡の菓子を眺めた。

中でも熱い小釜の中から取り出される飴が、滑らかに練り上げられ、銚一つで鳥や猫や兎に変わる様が堪らなく面白い。年端の行かぬ子供等に混じり、じっと見詰める燕に、緋雄は一人苦笑いを洩ら

した。

「兄さん、一つくれ」

飴屋の職人にそう告げ小銭を渡すと、職人が既に作り上げた飴の動物達を差し出す。燕は暫し迷い、うつすらと桃色をした兔を選んだ。

「すごいな、これ。何をどうやって兔になるんだ？」

「知るか。飴ってんだから、多分食い物だろ」

「それって、前におゆうが土産に持って来た、丸いのと一緒にか？」

繁々と兔を眺める燕が、そう問うのに、緋雄は緩い笑みで応えた。それから一頻り兔を舐るとこ機嫌で煎餅ねぶを買い、団子を食べ、お面が欲しいと緋雄にねだる。訊けば犬の面が良いと言うので買ってやると、燕はにんまり笑って被り、緋雄の物真似をした。

「この餓鬼、待ちやがれ！」

「うわ、怒ってやんの。ああ怖ええ、ハハハハ！」

見た目は若い女に見えるが、燕の行動はやんちゃな子供と変わらない。初めてこんな体験をするのだから仕方無いのだと、緋雄は怒りに引くつく頬を、無理矢理抑え込んだ。

燕は祭の戦利品を手に、目を輝かせて店をぐるぐる回る。緋雄がうろつろと後を追ううちに、突然腹に響くような、重い破裂音が響いた。

「ヒッ！」

驚き身を屈める燕をよそに、周囲の客達が沸き、木々の向こうの夜空を眺める。そこにはきらきらと輝く、大輪の光の華が咲いていた。

「おお、上がりやがったなア！」

「え？ うわ！」

「来いよ、もつと良く見える場所がある」

続けて鳴る打ち上げ音に驚く燕を、緋雄がそう誘う。そのまま境内を抜け人気の無い森へ入り込むと、夜空へ向かってそびえたつ大木へ近付いた。

「上るぞ」

燕に有無を言わず肩を抱くと、緋雄は軽々と枝に飛び乗る。そうして梢近くまで上ると、燕を枝元に座らせた。

「な、良く見えるだろ」

「…… 本当だ！」

そこから眺める花火は綺麗な円を描き、夜空へ次々に咲き誇る。

地べたで見上げるより遥かに大きく見えて、燕は思わず感嘆の溜息を吐いた。

「すげえや…… あれって、どうやって光らすんだ？」

「さあな。魔術か、人魂か。それか、神の光かもな」

「馬鹿にすんな。はなびって、人間の作ったもんだろうが。俺だって、それくらい判るつつうの！ でも……」

「アア？」

「見せてくれて…… ありがとう。俺、お前が居なかったら、こんな処まで来られなかった」

素直な感謝の言葉とは裏腹に、燕はばつが悪そうにそっぽを向き、また兎を口に含んだ。その横顔が爆ぜる花火に照らされ、光が散る毎に暗くなるのを、緋雄は黙って眺めた。

元々燕とは贅として、そして未熟な刺客として出逢った。それが三年経った今、何の因果かこうして並んで、花火を眺めている。

何の気なしに拾い、一つの見返りも求めずに暮らして来た。何故か喰らう気も、手に掛け組み敷く気も起きなかった。

だが。

こうして女らしく衿を扱き、細い項を露にした燕は、酷く艶かく見える。着物を纏うその体は、男女どちらの徴しるしも持ち合わせ、心に至っては男だと言うのに。

「どうしたよ。もしかして、そんなに食いたいのか？」

黙り込み眺める緋雄の様子を何と察したか、燕がにこりと笑い、舐っていた兎を差し出す。そんな涎にまみれた物を食えるかと、緋雄は悪態を吐いて目を逸らした。

逗留する旅籠に戻った頃には、既に玄關の光は落ち、丁稚は奥に引つ込んだ後だった。緋雄と燕は玄關から上がらずに、裏へ回り垣根を越えて離れへ入った。

「ああ、しかし楽しかったなア！　こんなに楽しいなら、毎日祭があれば良いのに」

燕は既に敷かれた布団の上に大の字になると、ごろりと腹這いになり、先程買つて来た醤油饅頭の包みを開いた。

香ばしさが香る傍らで、緋雄はこれまた買つて来た酒を開け、瓶から直接呷っている。その様子を見て、燕は少し不思議そうに頭を傾げた。

「なあ、緋雄。お前、こういう珍しいもんも食わねえのか？」

「ん？　ああ、まあな。いや、食えることは食えるが、あんまりそそられねえんだよ」

「そうなのか。じゃあ酒は美味しいのか？」

「まあ、饅頭よりはな」

「へえ……」

そう緋雄に応えられても、あまりぴんと来ないようである。訊いたくせに気の無い答えを返した燕は、一つ目の饅頭を平らげると、もう一つに齧り付いた。

「んん、これ本当に美味えや」

もう一つ買えば良かったとごちながら、急須に手を伸ばし、茶を淹れて啜る。そうして燕が満足そうに溜息を吐いたところへ、緋雄はごろりと横になり、少しふてた声を上げた。

「ああしかし、そろそろ俺も腹が減ったなア。そっぴや旅に出てから、何にも喰らってねえや」

「嘔吐け。さつきナントカ一家の禿頭、喉からちよつと吸ってただろ」

「お、知ってたか。さすがお燕ちゃん、察しが良いようだ」

「そのお燕ちゃんって止める！ 大体何だ、俺に女みたい格好させやがって、おまけに顔まで色々塗りやがって、戯言でも笑えねえっての」

燕は緋雄を睨み付けると、そう憎々しげに唸った。だが、氣に入らぬからと脱ぐ訳にも行かない。元々着ていた旅装束は、着替屋へ総て置いて来てしまったのだ。意に反した姿に燕が益々苛つくのを感じながら、緋雄はにこりと軽く笑った。

「お前は女でも通るぜ。身の丈は小せえし、腰は細いし。口さえ訊かなきゃ、器量だって悪くない。いっそ、女になってみるか？」

「はっ、ナニ馬鹿言ってるんだよ？ だから俺は、男だってえの」

「じゃあ、その胸は何だよ」

「……え？」

そう問われ、思わず燕は固まった。

僅かに膨らみを帯びゆく胸が疎ましくて、恥ずかしかった。放つて置けば尚育ちそんな氣がして、少し前から晒を巻き始めたのだ。

緋雄は立ち上がると、燕の肩に手を掛け仰向けに転がした。そして有無を言わず、浅く合わされた衿元を広げた。

「やつ、何をす……！」

「どうして隠すように、こんなもん巻いてんだ？」

「だから、これは……そう、腹、腹弱えんだって！ だから俺、夏でも冷えねえようにしてんだ、そうそう！」

「嘔吐け、乳隠してんだろうが。さつき赤刻門から逃げる時、何だか変だと思……痛てっ！」

「この助平！」

予告無しに振るわれた燕の右手が、緋雄の頬を打つ。それにもめげず、緋雄は更に燕を引き寄せ、鼻の頭を擦る程に近付けた。

「俺は、お前に乳があるうが、野郎の一物が付いてようが、そんな

事は気にしねえ。ただな、燕。俺は今、腹が減ってんだよ」

「なっ、ま、まさか」

「魂は喰わねえ。邪気も入れねえ、だからちょっとだけ、生気を吸わせろ」

「ハアア？」

驚く燕の鼻先で、見る間に緋雄の瞳が鮮やかな色を帯びる。そして抗う間もなく組み敷かれ、燕の唇に緋雄のそれが重ねられた。

「ッ！」

薄い皮膚の温かさと柔らかさを感じた途端に、ぬるり、と濡れて滑らかな感触が、燕の唇を舐る。^{なぶ}するとそこから痺れが来て、体の中にある何かが抜け始めた。

「止め、ひゅ……」

顔を背けようとすれば阻まれ、力で離そうとすれば抑えられる。痺れはやがて甘い快樂へと代わり、逆に燕の喉を下り体を侵した。

眼前の緋の瞳が一層輝くと注がれる感覚は強まり、ゆるゆると四肢の先まで廻る。それが下腹に溜まり熱を持ち始め、心の臓と共に高鳴るのに堪らず、燕は眼を瞑った。

「——息を次げよ、死ぬ気か？」

「うっ、はあっ、はあっ」

「ご馳走さん。大変美味しゅうございましたぜ、お燕ちゃん」

薄目を開ければ、緋雄がそうおどけながら身を離す。燕は霞を散らすように、ふるふる頭を振ると一気に頬を染めた。

「ひ、酷えッ！ いきなりこんな事しやがってッ」

「アア？ ちょっと生気吸われたくらいでオタつくな、餓鬼。ここまで連れて来てやったんだ、少しくれえ俺の腹を満たしてくれたって、バチは当たるまいに」

「う……」

緋雄にそう言われると、燕は弱かった。

こうして街に滞在する事も、あちこち物見する事も、緋雄が連れて来てくれたから出来た事であって、自分一人では一生叶わぬ体験

だ。その恩を緋雄の望む形で返したいと言つのに、燕も吝やうやかでない。だがその一方で、緋雄に『口付け』られる事は、燕にとっては羞恥に身悶えするほどの行為に値する。況してやこんな急に迫られれば、戸惑い固まるのも無理はない。

緋雄は布団の上に引っくり返つたままの燕を眺めると、にやにやと口の端を上げた。

「心配すんなよ、若いお前なら一晩眠りゃあ、ちゃあんと戻つてつから。ホラ、裾直せ。じゃねえと遠慮無く犯すぞ、お燕ちゃん」
「うっ、煩えッこの助平犬が！」

気付けば足をがつぱり開き、裾どころか腰巻まではだけで、下帯が丸見えである。燕は跳ね起きると慌てて裾を直し、先に寢床に入つた緋雄へ酒瓶を投げ付けた。すると今度は緋雄が罵声と共に枕を投げ、そのうちに煎餅や座布団までが宙を舞つた。

——離れの大騒ぎに、本館で寝ずの番をしていた奉公人が、何事かと顔を真っ青にして駆け付ける。そうして一騒動ののち、二人がようやくと眠りに就いた頃には、既に空は蒼く変わっていた。

妖星ノ巻 其ノ八

翌日は生憎の小雨であつた。しかし時々薄日が差し込むのを見て、二人は予定通り塹へ戻る事にした。

女將に頼んで新たな旅装束と合羽を調達して貰い、逗留していた旅籠を出たのが丁度昼過ぎ。それから燕の飯を買い求め、ついでに手土産も選んでから、街道を北へ進んだ。

「ああ、眠い。昨日はあんまり眠れなかったからな」

緋雄の隣に並んで歩く燕が、ちらりと編み笠を上げ、恨みがましく横眼で睨む。緋雄はそれを軽く受け流すと、昨夜の件を思い出していた。

——昨夜初めて燕の生気を吸つたのだが、それは今まで緋雄が味わつた事の無いものであつた。

人間の生気にしては濃く、僅かに魔物の邪気に似た苦味がある。人間とも魔物とも判断が付かなかつたのは、燕が双成りと言う、特殊な体を持つ故なのだろうか。否、もしかしたらあの義兵衛の言つたように、本当に人間と魔物の『合の子』なのかも知れない。

それをはつきり確かめる術は他にもある。しかしそうして確かめた処で、己を人間だと固く信じる燕に何の得があるう。

編み笠の下に吹き込む霧雨に目を細めながら、緋雄は隣に行く燕に眼を遣つた。

「どうだつたよ、人間の街は」

「ああ、すげえ楽しかった。たくさん美味しいもん食つたし、花火も見れたし」

「そうか」

屈託無いようすで燕がそう返すのへ、緋雄は曖昧な笑みを浮かべた。

「なあ、燕。もしも、お前がそのままの成りで住める街があったら、住みたいか？」

「へ？　おいおい、何だよ急に」

「この国の南の方は、南蛮と交易があるんだ。そこには少ないが、毛唐も住み着いてる。お前が紛れ込んでも、きっと違和感がないだろう」

「なんばんって……十二？」

「ああ、遠くの――他所の国の事だ。南蛮の人間、つまり毛唐って呼ばれてる奴等は、髪も目の色も、お前みたいに鮮やかなんだ」

「……本当、か？　本当に、そんな奴らが居るのか？」

はつと目を見開いた燕の声が、僅かに上ずる。それを一抹の希望の表れと感じつつも、緋雄は燕から視線を外すと、行先に広がる鉛の空へ眼を向けた。

「本当だ。二十年ほど前から、幕府が秘密理に交易してるんだ。だが、故にその界限は監視もきつい。少し骨が折れるかも知れねえが、お前を紛れ込ませるくらいなら、何とかなるだろ」

「俺を、紛れ込ませる？」

「おう」

そう告げて燕を見下ろせば、その表情は笠に隠れ窺えない。そのうちに燕の足が遅れ始めたが、緋雄は構わず歩き続けた。

「――なあ、緋雄」

「アア？」

「それは……俺一人で、生きろって事か？」

背から掛けられた声は、少し強張っている。緋雄が歩みを止め振り返ると、燕は顔を伏せて立ち止っていた。

「燕、お前はそのまま死ぬまで、俺の傍に居る気か？」

「……」

「いつまでも居て、そのうち爺になって。死んだら俺に、骨を拾ってくれってか？」

緋雄が静かにそう問うが、燕は黙り込んだままである。暫く動かずにいるうちに、雨足が強くなってきた。

街道を歩く人々は、早足で雨宿りに姿を消して行く。このままで

は埒が開かぬと、緋雄は燕を促し先を急いだ。

少し行くと街道は二つに別れ、右は最寄りの大きな村へ、左は巖岳へ続く山道へ続いている。緋雄は左へ進むと、すぐに現れる二本杉の下へ身を寄せた。燕も少し遅れて木陰へ入って来たが、未だ押し黙ったままだ。

重苦しい雰囲気、緋雄が小さな溜息を吐いた矢先、山の中から細い悲鳴が聞こえた。燕がひくりと眉を上げると、また聞こえてくる。

「何だ？」

「女だなア、こりゃあ」

山裾を見上げる燕に、緋雄がそう答えた途端。燕は腰の脇差に手を添えると、木陰を飛び出した。

「オイ、何処行くよ！」

「助けなきや」

「止める、関わるな」

「でも、もし襲われてたら、放って置けねえよ！」

「燕ッ！」

鋭い呼び掛けと共に、追い掛けた緋雄が細い肩を素早く掴む。だが燕はそれを振りほどき、あつと言つ間に山へ飛び込んだ。

木々の間を縫い、茂る下草を踏みつけ、濡れた緩い斜面を駆け上がる。山道から死角になったならかな場所まで上ると、そこで二人の侍らしき輩共が、旅装束の女を組み敷いていた。見るからに手強めへ及ぶ最中である。

「な、何だ貴様は！」

女の腕を押さえていた太眉が叫ぶのに怯まず、燕は編み笠を捨て、腰から外した脇差を抜きつつ走り寄った。すると侍達は素早く女から離れ、揃って腰の太刀を抜いた。

「邪魔するか、この若造が」

「我等に刃を向けるとは、命知らずな輩だの」

太眉と共に、額傷のある男が齒を剥き威嚇する。燕は二人と女の

距離を計りながら、じりじりと探り足を入れた。

——右に太眉、左に額傷。どちらも手練らしく隙が無い。

その緊迫した様子を、緋雄は少し離れた処から、顰め面で眺めていた。

女が襲われていても、自分達には関わりの無い事である。助けに入れば却って騒ぎが大きくなり、下手をすればこちらの正体が露見する恐れもある。それを知っている筈なのに、燕は自ら火中へ飛び込んだ。その行動は人間として正しいのかも知れないが、緋雄と共に行動する者としては避けねばならない。

「ひいっ！」

睨み合う三人の脇に転がる女が、ようやと事態を把握し、這って逃げようとする。恐怖と焦りから上げた小さな悲鳴が、場の膠着を破った。

「イヤアッ！」

燕の右側から太眉が走り寄り、上段から薙ぐ。それを燕が左に交わすと、既に近付いた額傷が左脇を狙って来た。

がつり、と硬い音を発し、重く鋭い太刀を鞘で受ける。途端に左掌がびりりと痺れるのに、燕は思わず顔を顰めた。

見れば鞘を軋ます額傷の刀身は、太く長い。まともに受け続ければ、脇差の鞘などいずれへし折られるだろう。

「ハッ！」

圧される勢いに逆らわず、身を捻り燕が逃げる。そして間を取ろうと目論むが、一步早く踏み込んだ太眉に阻止された。そのまま鋭い呼気と共に、太眉が燕の延髄を狙って来る。それを避け身を屈めると、燕は素早く泥を蹴散らした。

「うわっ！」

派手に被り怯む太眉へ、燕が鞘を素早く投げ付ける。それが太眉の鼻柱に当たる間に、額傷が上段から斬り込んで来た。

「死ねエ！」

「くっ！」

燕が脇差を両手で支え、これまた重い斬撃を受け止める。そして絡んだ鎬を捻り、一気に懐へ入ると、踏ん張っていた額傷の右膝を思い切り蹴った。

「ぐっ！」

怯む額傷の顎へ、容赦無く頭突きを見舞う。一瞬力を失った額傷の刃を弾くと、燕はその腹を左から一気に薙いだ。

「ぐわああっ！」

絶叫した額傷が、血の帯を曳きながら水溜りへ倒れ込む。大きく波打った泥水が赤黒く染まるのを眺めながら、緋雄は徐に腰の脇差を鞘から抜いた。

「燕！」

呼び掛けて、その左脇に放る。それを左手で取った燕は、眼を瞬かせ鼻血を拭う太眉を睨んだ。

「おのれッ、イヤアアア！」

怒りを露わにした太眉が、踏み出すと同時に腹を狙い、鋭く突く。燕はそれを緋雄の脇差で受け流し、空いた太い胴を右手の小太刀で薙いだ。だが鋭い音を発した瞬間、強い衝撃と痺れが、燕の右掌に走った。

「うっ！」

「我は簡単には行かぬぞ、若造め」

見れば胴を薙いだはずの小太刀は、瞬時に抜かれた太眉の脇差に阻まれ、半ばに刃毀れはこぼを生じている。どこぞの名工の作かは知らぬが、太眉の持つ重厚な脇差は、燕の持つ小太刀より遥かに鍛えてあるようだ。

「糞ッ！」

互いに身を引くと、太眉は凄惨に嗤い、大きくかつゆつくりと二刀を構えた。すかさず燕も、利き手である右手に、緋雄の黒脇差を握った。

ひたひたと雨滴を垂らしながら、やや暫く睨み合った後。太眉がにたりと顔を歪めた。

「貴様……見た処、どこの者であるか判らぬな。町人ではなかつたが、侍でも忍でも無い。隠密同心にしては、年端が行かぬ」

「……」

「それよりも、あそこに居る貴様の連れ。真つ当な果たし合いならまだしも、脇差一刀放つたのみで、お前の加勢もせずに傍観はたみを決め込んでおる。何と薄情な事よ」

低い声が粘り、燕は不快そうに眉を寄せた。

太眉はこうして動揺を与え、隙を誘っているのだ。だがそれを見抜けぬ若い燕は、苛つきを露にした。

「だから、何だ？」

「連れは既に丸腰、貴様が死のうが、手を貸さぬだろう。どのような関係かは知らぬが、連れにとつてお前はその程度」

「うるせえ！ このお喋り眉毛めッ」

「ほう、一人前に悪口あくぐちを吐くか。思慮の足らん貴様に、我が親切に知らせてやつたのに」

「何だとツ、この！」

そう吠えた燕が一気に駆け寄り、右の黒脇差を打ち込む。それを脇差で弾いた太眉は、本太刀で燕の左肩を割らんとした。

互いに二刀で受け、斬り、弾く。そのうちに燕が僅かに早く踏み込み、太眉の胸へ左の小太刀を突き出した。

「うつ！」

弾かれる感触に続き、鋭く甲高い音が響いた刹那。燕の小太刀が半ばからへし折れた。

強い衝撃が左掌から手首、肩まで一気に疾り、思わず気を散らした瞬間。太眉は血走った眼を見開くと、鋭く叫んだ。

「隙有り！」

「グアッ！」

しまったと感じた時には遅く、燕の左肩に灼熱が疾った。咄嗟に身を振り首元は外したものの、頭から音を発て血の気が引いて行く。斬られた左肩からは生温い血がだらだらと溢れ、雨に流

され腹まで赤く染めた。

視界は激痛に揺れ、既に力を無くした左腕は動かない。それでもまだ刀を手放さずに立つ燕へ、太眉は嘲笑いながら間を取ると脇差を鞘に収めた。

「逃がしてやつても良いぞ、若造」

「誰が……退くかッ」

「ほう、その傷で、まだそんな口を利くか。良からう、その気概に免じて、一太刀で切り捨ててやる」

太眉は口元を歪めたまま正眼に構えると、一気に燕へ踏みこみ、防御に掲げられた右刀を軽々と弾き飛ばした。そして高々と刃を振り被ると、燕の脳天目掛けて討つ。

しかし致命をもたらずはすの斬撃は、突如割り入った影により阻まれた。

「な……ッ！」

「これ以上斬るのは止めてくれ。こいつが死んじまうだろ」

「う、うおおッ！」

静かに呟いた緋雄は、まるで棒でも握るように太眉の刃を素手で受け止めている。そのあり得ない光景を見て、太眉は驚愕の叫びを上げた。

必殺の一撃を放ったのだ。普段ならばその手ごと、燕の脳天まで切り裂ける筈であった。

しかし刃を受け止めた緋雄の掌は、全く傷を負っていない。それどころか、ごく無造作に握られているにも関わらず、達人に白羽取りされたが如くびくともしない。

動転した太眉は、必死に刃を引き抜こうとしながら冷汗を垂らした。

「何故、何故斬れぬのだッ！」

「さあな。お前の刃が斬れないからだろ」

そう答えた緋雄の双眸が、ぐわりと見開かれ輝く。見る見るうちに燃える緋へ染まるのに、太眉が戦いた。

「ま、魔物！ う、ゲエツ、ゲウウ……」

怯んだ太眉の喉を、緋雄の手ががつりと掴む。その指が軋んで食い込み、堪らず額傷は刃を落とした。

「う……」

限界が来たのか、背後で燕が呻きながら崩れ落ちる。緋雄はそれを見ず、藻掻く太眉の喉を締め上げ、遂にそのまま握り潰した。

「ひ、ひぐ……！」

魂消る喘鳴と喉仏がひしゃぐ音を最期に、呆気無く絶命する。それを芥のように放り捨てると、緋雄はようやと燕へ振り向いた。

「この馬鹿ッ、だから言わんこつちゃ無えつての！」

「はっ、はっ、ごめ……げふっ、ガフッ！」

「良いか、こんな面倒二度とやるなよ、糞餓鬼め。次は絶対、手なぞ貸さねえからな」

そう怒りを吐き捨てると、緋雄は屈み込んで燕の着物を裂き、傷を調べた。

刃は左肩から鎖骨を砕き、深く燕の体を傷つけている。咳をする度に血が溢れ流れるのを見て、緋雄は傷に口付け、邪気で簡単な血止めを施した。それから左腕を固定するよう脇にぴたりと這わせ、着物と合羽でしっかりと燕を包んだ。

「移動するぞ。ここじゃ、何も出来ねえ」

緋雄はそう唸りながら笠を脱ぎ捨て、結界を解いて獣耳を現した。すると、途端に木立の中から悲鳴が上がった。

逃げた筈の女が、そこに潜んでいたのだ。

緋雄が魔物だと気付いた女は、脱兎のごとく走り出した。

「ひいつ、たっ、助けてえッ！」

泥に足を取られつつ必死に逃げる背が、視界から消える寸前。緋雄はそつと燕を地に下ろすと、疾り出し軽く地を蹴った。そして一息で女に追い付くと、後ろからその体へ抱き着いた。

「きゃッ！」

「悪いな。見られたら仕方無え——諦めてくれ」

「ひっ、ひいつ、いや、ギヤアア！」

耳に掛かる息に尚戦き、半狂乱になりながらも振り向けば、済まなそうに笑う魔物の牙が目端に輝く。息が止まるほど固く抱き締められ、抗う視界を塞がれ、首に鋭い痛みを感じた直後。震える女の体に、えも言われぬ快樂が訪れた。

「ひっ……あ、あう、はうっ……」

恐怖に固まった体が解けるにつれ、助けを求め伸ばした手が、泳ぐようにゆっくりと下がって行く。少し陽に焼けた女の健康的な肌は、次第にくすんで張りを失い、見る見るうちに皺くちやになった。やがて女の魂を喰らい尽くすと、緋雄はその骸を木立へ投げ棄てた。そして口元に残った血を袖で拭くと、急いで燕の傍らへ戻った。

「……ひ、ゆう」

「喋るな。取り敢えず移動する。ちと痛むだろうが、舌なんか噛むなよ？」

正直、かなり様子は良くない。血止めしたとは言え、このままでは燕は死ぬだろう。

緋雄はまた燕を抱き上げると、埒の方角へ疾り始めた。

妖星ノ巻 其ノ九

雨はようやと上がったものの、まだ雲が垂れ込めている。濡れた枝は滑りやすかったが、緋雄は足を取られる事もなく、塹を目指し木上を進んでいた。

腕の中の燕は辛うじて気を繋いでいるが、顔色を失い震えている。邪気で血止めしただけでは、長くは持たない。なるたけ早急に、安全な場所で傷を治療する必要があった。

「はあつ、はつ、う、コホツ、ゲホツ！」

大きな咳と共に、燕が血を吐く。その様子に塹まで持たないと判断した緋雄は、舌打ちと共に進路を曲げ巖岳の麓へ回った。

木立を飛ぶように抜ければ、背の低い荊が群生する台地が広がっている。そこを回るように少し移動すると、注連縄しめなわの施された赤岩が見えた。

「どこ、行く……？」

「取り敢えず、お前の傷を癒せる場所だ。もう少し辛抱しろ」

苦し氣に問う燕にそう答えると、緋雄は赤岩の向こうにある洞窟へ足を踏み入れた。

中は暗く湿り、高い天井からは、尖った長い岩が幾つも伸びている。時折それを伝う水滴が澄んだ音を発て、点在する水溜まりへ落ちた。

奥へ進むほどに闇が拡がり、足元すら見えない。だが緋雄は戸惑う様子もなく、最奥の拓けた場所まで進むと、徐に声を上げた。

「亜俱里あぐり！」

反響する声は幾重にも響くが、答えは無い。緋雄が更にもう一度呼ぶと、岩壁の一部がふるりと揺れ、俄に立派な寺院の扉へと変わった。

「——珍しいお客がいらっしやいましたね」

鈴の音を思わせる女の声に続き、扉が鈍く軋む。ゆっくりと観音

に開いた向こうには、壁に連なる蠟燭に照らされた、朱塗りの廊下が浮かび上がった。

「――ようこそ緋雄殿。まずは奥へ」

声に誘われるまま、緋雄が足を踏み入れる。その背後で扉が重く閉ざされると、廊下の向こうから巫女装束の少女が、若い侍を伴い現れた。

この少女が亜俱里であり、狛が言う処の、例の『陰陽師くずれ』である。

彼女は大層優れ、それなりの高位に就いていたが、齢四十を超えた辺りから怪しげな研究に没頭し始めた。ある日それが禁術であると発覚し、法院処を追われてからは、この洞窟に棲みついている。

本当ならもう八十を超えている筈だが、何をどうしたものか、眼の前の亜俱里はどう見ても十四、五にしか見えない。恐らく何らかの術を施しているのだろうが、魔物の緋雄から見ても、海のものとも山のものともつかない不気味な女である。

亜俱里は小首を傾げて緋雄と燕を眺めると、見てくれに似合わぬ妖艶な笑みを浮かべた。

「おやおや、濡れていらつしやる。外界は雨なのですね。ところでその姿、どこか旅にでもいらしたのですか」

「ちよつと近くまでな。ところで亜俱里、急ぎの頼みがある」

「まあ、何でしょう？」

「一晩、邪魔の入らねえ場を貸して欲しい」

「私の住まいで逢引ですか？ とは言え、その腕の方のご様子だと、楽しく戯れる訳にも行かぬようですが」

「タダとは言わねえさ。俺の爪をやる。前にしつこく寄越せつて言っただろ」

「それは素晴らしいお話ですわ。貴方は少し珍しい魔物ですから、是非貴方の一部が欲しいと思っておりました。しかし、以前はあれほど拒まれたのに、何故心変わりを？」

「コイツを今、死なせる訳にゃ行かなくてな。なアに、部屋一つ貸

してくれたら、お前に迷惑は掛けねえ。何もせずに貸すだけで、しかも俺の爪が手に入るんだ。安いもんだろ？」

「そうですね……」

亜俱里は勿体ぶるように、袖口を唇に寄せ緋雄を眺めていたが、にこりと笑って更に持ち掛けた。

「雨にも降られたようですし、着替えとお膳、湯もご用意いたします。勿論、お連れの方も一緒に。その代わり、もう一つ頂きたいです」

「何を？」

「まあまあ、そんな訝しい顔をなさつては、折角の美形が台無しでございますよ。ええ、爪や髪と同じようなものですから。後ほど構いませぬ、必ず下さると仰って頂けたら、直ぐにでもご案内いたします」

どうもこの駆け引きは、亜俱里が有利である。緋雄は渋い顔で提案を受けると、早速若侍の案内で奥の部屋へ通された。

たくさん並ぶ障子の、突き辺りから左の二番目に入ると、そこは前日まで宿泊していた旅籠よりも広く豪華であった。特に、南蛮風の天蓋が付いた珍しい寝台は柔らかく温かで、燕を三人寝かせても余るほどである。

「では、ご入り用の物がございましたら、何なりとお申し付け下さいまし」

男としては少しなよなよい若侍が、上目遣いで緋雄へ微笑み去って行く。障子がぴたりと閉まるのを確認すると、緋雄は合羽を脱ぎ捨て、寝台の上で切れ切れに息を継ぐ燕の傍へ寄った。そして巻いた合羽を解き、着物を上だけ肌蹴ると、その細い腹の上へ馬乗りになった。

「何、を……ゲホッ、ゴホゴホッ！」

「静かにしろ。これから、傷を治してやる。ちと苦しいだろうが、耐えろよ」

「うっ……」

「始めるぞ」

そう鋭く告げると緋雄は瞳を伏せ、胸の前で毬を持つように両手を構える。するとたちまちその中に赤光が渦巻き、熱を伴い始めた。「縛、結、繫、張——微塵の胞を賦みつきとさせよ……」

呪言と共に緋の瞳が輝くと、手中の赤光は凝縮され回転を早める。凡そ片掌まで小さくなったところで、緋雄は燕の割れた肩に赤光を押し付けた。

「う、ぐあ、ウアアア！ ウツ、ああっ！」

燕の絶叫と共に、光は傷口へめり込み拡がり、そこから肉の焦げるような臭いが立ち上る。かなりの苦痛なのだろう、蒼い顔にはあつという間に脂汗が滲み、見開かれたままの瞳からは涙が零れた。

逃れようと必死に悶える体を抑え込み、断ち切られた筋や血管、砕けた鎖骨を繋げ、一気に賦活させる——さすがにこれは、緋雄にとつてもきつい技らしい。燕の傷口が少しずつ癒えるのに反し、緋雄は次第に肩で息を継ぎ、全身から汗を滴らせた。

そうしてどのくらい経っただろうか。

燕の絶叫が勢いを失い、すっかり嘔かれてしまった頃。緋雄は表情を緩めると、ようやくと傷口から手を離れた。

「もう、良いだろ……良く頑張ったな、燕」

見れば生々しく割れていた傷口から血の色は消え、桃色の肉が盛り上がり始めている。ここまですればもう開かぬだろうと、緋雄は安堵の溜息を吐き、額を拭った。

「あー、疲れた！ あそこであの女喰らつといて良かったぜ……なあ燕よオ、お前も懲りただろ。だからもう、本っ当に勘弁してくれよな」

「……」

「燕？」

何の反応も示さぬのに、緋雄が顔を覗き込む。すると燕は顔を歪ませたまま、既に失神していた。

「仕方無え奴だな、まったく。ありがとの一言くれえ、言えって

の」

そつと触れた燕の頂からは、かなりの熱が伝わって来る。だがこれは、緋雄の施術から来る好転反応だ。呼息も落ち着き、顔色も赤みを戻しつつある。このまま一晩眠れば、明日には移動に耐えられるだろう。

すっかり崩れてしまった山吹の髪を解き、汗と涙で汚れた顔を拭いてやり、雨泥の染みた着物と上掛けを取り去る。それから薄い肌掛けて燕を包むと、緋雄は力尽いたように長椅子へ倒れ込んだ。

眼を閉じ深く息を吐くと、邪氣を使ったせいで無性に腹が減って来る。するとそれを見計らったように、障子の向こうから声が掛かった。

「失礼いたします。お召し物の替えなどをお持ちいたしました」

そう断りを入れ姿を現したのは、先程ここに案内してくれた若侍である。彼は燕の様子をちらりと見遣った後、傍らの脚付卓へ着物や白湯を並べた。

「他に果汁などもございますので、ご入り用でしたらお申しつけください。それから、緋雄殿」

「アア？」

「湯のご用意が出来ております。宜しければご案内申し上げますが」

「……湯、か」

良く見れば己の体も、雨泥と燕の血でかなり汚れている。緋雄はぼりぼりと頭を掻くと、若侍に着いて湯殿へと向かった。

湯殿は広く、岩の上に並んだ大小の行燈が、緩々と流れる湯気をぼんやりと照らしている。

緋雄は熱い天然湯で汚れと疲れを洗い流し、黒曜石のような美し

い岩風呂に脚を投げ出して浸かった。そしてじわじわと温まる感覚を味わいながら、先程から傍らに控えたままの若侍を盗み見た。

亜俱里が何処から連れて来たのかは知らぬが、武家の子にしては上品で物腰が柔らかい。恐らく亜俱里に、客人の世話をして来いと言われたのだろう。しかしわざわざ湯殿の中まで着いて来て、三助のように背を流そうとしたのには、流石に緋雄も困惑した。

何かの謀りか、単に世話好きか。それともこの若侍自身が、頗る飢えているのか――裸の胸や腰にこっそり注がれる、彼の舐めるような視線を感じながら、緋雄は僅かに口の端を曲げた。

「衆道か……まあ嫌いじゃねえが、さて、果たしてそれだけか？」
何れにしろ、この空腹を満たしてくれるならば別段文句は無い。

顔を洗い髪の水気を絞ると、緋雄は湯を散らしながら立ち上った。何処も隠さぬまま脱衣処へ向かうと、立ち上がった若侍は顔を赤くしたまま、大判の拭布を差し出した。

「あの、御体をお拭き下さいまし」

「ん？ 面倒だな……なあ、お前が拭いてくれよ」

「宜しいのですか？」

「おう、構わねえよ」

そう緋雄が人懐っこい笑みを浮かべると、赤面したままの若侍は緊張に震える手で、黒炎の文言に染められた大きな背と腰を拭う。そして肩や腕、胸や腹と回って来ると、緋雄はその体を腕中に捉えた。

「なあ、お前。亜俱里に何と言いつけられて来たんだ？」

「え？ あ、あの、湯をお勧めしてから、お食事を馳走するように」と

「へえ。じゃあ、俺の食い物が何か知ってるのか？」

「はい……魂までは差し上げられませんが、私の生気をお召し上がり下さいませ」

「お前の？」

そう訊き返すと、若侍が媚びるような笑みを浮かべる。その瞳の

奥が欲情に澱んでいるのを見て、緋雄は遠慮無く若侍の帯を解きにかかった。

とても腹が減って居た。そして、眼の前の若侍は美味そうな匂いがする。帯を落とし腰紐を外し、衿を開いて項に口付けると、若侍が浮ついた声を上げた。

「そつ、それから、緋雄殿」

「んん？」

「貴方様の精を、私へ存分に注いで貰えと……亜俱里様が」

「精？ クツ、ハハハハ！ こりゃあ参ったぜ。畜生、亜俱里の野郎め、欲しいのは子種かよ」

緋雄はさも面白げに笑うと、そのまま若侍を床に組み敷き覆い被さった。耳を舐り薄い胸をゆっくりなぞれば、若侍がふるふると肩を揺らし、女かと思うほどの甘い声を洩らす。

やたら、愛撫される事に慣れている。きつと亜俱里に相当仕込まれているのだろ。それを表すように、下帯の隙間から探った内は既に柔らかく湿り、直ぐにでも緋雄を受け入れる準備が整っていた。

「もう香油を塗り込めてんのか。随分用意が良いんだな、お前は」

「はい……緋雄殿に御手間を取らせる訳には、参りません、ので……ンッ！」

下帯を解かぬまま軽く扱いてやれば、若侍は瞳を潤ませ腰を擦り寄せる。そうしながら半開きで迎える唇に口付けると、緋雄の舌先に生温かい生気が溢れて来た。

獲物が快楽に溺れる程に、生気の味は甘さを増す。そうしてゆっくり味わう遣り方を、緋雄は好んでいた。

若侍が求めるように、緋雄の手を腰へと導きつつ一杯に脚を開く。急かすようなその仕草に対し、緋雄はそっけなく手を引き笑った。

「おいおい、急いちゃつまんねえんだよ。なあ、お前の名は？」

「……慎之介、です」

「へえ、身持ちの堅い名を付けて貰った割に、随分とはしたない体してやがるんだな」

「申し訳、ありません……あ、ッ」

「俺が腹一杯に満足したら、ちゃんとお前の中にくれてやるよ。だから心配しないで、勝手に善がってる」

「あ、ンンッ！」

緋雄の手が慎之介の体を這い、そこかしこを焦らすように弄ぶ。

その度に慎之介は嫌々と快楽に震え、身を擦らせては緋雄の胸にしがみ付いた。

揺らぐ光の中で、岩壁に薄く映し出された影が重なり、離れ、再び深々と重なり合う。その度に甘い声が反響し、湯気満ちる湯殿の中を彷徨った。

やがて慎之介の嬌声は必死な悶えを含み、何度も塞がれ、遂に懇願の泣き声と変わる。それを揶揄する緋雄の声は益々愉しげで、まるで獲物を死ぬまで嬲る獣のようでもあった。

妖星ノ巻 其ノ十

翌日の夕方。

燕は無事意識を取り戻し、未だ歩く事はおぼつか無いものの、体を起こして居られる程度に回復した。これなら塙まで帰る事が出来ると、緋雄は早々に亜具里の元を出る事にした。

再び旅支度を整え、燕を抱いた緋雄が門を潜ろうとする。すると見送りに出た亜具里が、引き攣った笑みを見せた。

「お早い御発ちですこと」

「望みのものはちゃあんとやっただろ？ これ以上は何にも出ねえから、早々に退散させて貰うぜ」

「何もお出し出来ないのは、私も同じでございます……まさか一晩で、慎之介があんなにやつれるとは」

亜俱里はそう言う袖を口に寄せ、少し恨めしそうに緋雄を眺めた。

「アイツには悪かったが、腹が減っててよ。ついついたらふく頂いちまったぜ、ハハハハ！」

悪びれずからからと笑う緋雄は、腹を満たしたせいか、いつにも増して調子良い。亜具里はそんな様を見て、益々不機嫌そうに口を曲げた。

「馳走するとは申し上げましたが、毀れ物にされては困ります」

「なアに、魂は喰らっちゃ居ねえんだ。お前がちよいちよいとすりや、治せるだろ？ 流石、凄腕の陰陽師サマだ。他にもあの体にや、色々仕込んであつたしなア」

そう緋雄が意味深に笑うと、亜俱里は大きな溜息を吐いた。

「仕込んだなんて大げさな」

「あれが普通かよ。まったく……お前、慎之介の腹に仕掛けを施してただろ？」

「あら、ご存じでしたか。それならご協力下されば良かったのに」

「男子を孕ます趣味はねえよ」

「私があります」

つらりと言い放つ亜俱里の様子に、緋雄は呆れたように肩を竦めた。

「何にしろ、約束は果たした。ちゃんと上から注いでやったから、欲しかったら体ン中でも浚ってくれよ。さ、これで貸し借りは無しだ」

緋雄はそう言い切ると、ぺろりと舌を出し踵を返した。

「貸し借り、無しですか——フッフ、貴方らしいわ。ああ、そうそう。一つ、お願いがございます」

「何だよ」

「これから暫く、此方には来られぬ様になさって下さいましな」
「ハア？」

緋雄が少しだけ振り向くと、亜俱里は薄ら笑いを浮かべている。

その心地の悪さに、緋の瞳が鋭く光った。

「それは、どういう意味だ？」

「あの星が、参ります。その時は、私はここを封じ、魔物を狩りに出ねばなりません」

「いつ、来る？」

「凡そ、一月以内には。くれぐれもご忠告申し上げます。私とて、貴方を狩りたくはありませんからね」

恐らくそれは、亜俱里の本心なのだろう。真意はどこにあるか不明だが、緋雄と余計な戦いはしたくないと言う辺りか。

緋雄は暫し亜俱里を見詰めた後、不敵な笑みを浮かべた。

「……そうか。俺もお前を喰らいたく無えや。アクが強くて、腹壊しそうだしなア」

「まあ、失礼な。私の魂は、きっと格別な味がいたしますよ」

「へえ、そりゃあ凄えや」

互いに怖気の走る笑みを浮かべるのを、合羽の隙間から、燕がこっそり見遣る。二人の言う『星』が何なのかは知らないが、今それ

を問える雰囲気ではない。

緋雄はそのまま背を向け、洞窟を去るべく歩み出した。その背後で亜俱里の気配は、閉まる門の軋みと共に消えた。

こうして、また埤で共に暮らす日々が戻って来た。

『あの星』に関してや亜俱里との関係など、燕は様々な疑問を感じていた。しかし己の体が消耗していることもあり、特に緋雄へ問わずに過ごしていた。

だがその間も、目に見えぬ『あの星』が近付いて来る。

その影響なのだろうか。燕が回復していくにつれ、今度は緋雄の様子がおかしくなってきた。

木立の間を傾ぐ陽は柔らかく、夏の名残を僅かに残している。その中を、燕は独り歩いていた。

傷を負ってから、およそ十と三日。例によって川で魚を捕り、沐浴を済ませた後である。偶然見つけた野莓を食べながら社へ戻ると、燕は閉ざされた戸越しに声を掛けた。

「帰ったぜ、緋雄」

中から返事はない。燕は静かに戸を開け、内の格子を押した。

薄暗い社へ差し込む光に、床に散る黒髪が光る。燕は魚を戸口の側へ置くと、こんこんと眠る緋雄の傍らへ寄った。

「また、寝てんのか。このぐうたら野郎め」

呆れた声を作り覗き込むが、どうやら深い眠りに落ちているらしい。軽く髪を引っ張り、更に普段嫌がつて触らせない耳を摘んでみるが、ひくりと動くだけで起きる気配は無かった。

——ここ数日、陽の上っている間。緋雄はこうして死んだように眠っている。そして夜になればふらりと姿を消し、朝方血の香と共に塹へ戻って来た。

恐らく何処かへ行き、人間が何かを喰らって居るのだろう。それが緋雄の『食事』なのだから、燕に咎める気持ちは無い。だが毎晩喰らうような事は、今までは無かった。

一体彼に、何が起きているのか。

何度も理由を訊いたが、緋雄は何も答えず、適当にはぐらかすばかりだ。それが燕にとっては、認められて居ないようで悔しかった。「一体、どうしちまったんだよ、お前は」

閉じられた瞼は、無反応である。燕は寂し気に眉を寄せると、緋雄の頬に掛かる髪を、そつと手櫛で梳いた。

そんな状態が幾日か続いた、ある夕方の事だった。

珍しく陽の残る時間に起きた緋雄は、社の戸口の辺りに座り込み、黙って空を眺めていた。

東からは月が上り、それが濃藍の夜空を引き連れ、陽を地平の彼方へ押し遣って行く。やがて山の端を縁取る残光が、薄らぎ始めた頃。緋雄の瞳に、天高く輝く紅い箒星が映った。

「う……」

途端にぞわりと蠢く感触が、緋雄の体を奔る。いよいよ、あの星が訪れてしまったのだ。

緋雄は深く息を吐くと、境内の片隅で魚を焼く燕へ呼び掛けた。

「おい、ちよつとコツチ来い」

「何だよ？」

燕が訝し気な顔で近付くと、緋雄は立ち上がった。

「お前、今夜は何があつても、社から出るなよ」

「ハア？」

「星が、来たんだ」

「星？ 何言つてんだよ、お前……ん？」

緋雄が空に眼を遣るのに釣られ、燕もついそちらを見上げる。そして暫し宙を眺めてから、あつと声を上げた。

「何だよあれ？」

「見えんのか？」

「俺、盲じゃねえぞ。ちゃんと見えるつての！ しかし、変な形してやがるな。尾っぽの着いた星なんて、初めて見たぜ」

そう答えた燕を暫しまじまじと眺めてから、緋雄はまた空を見上げ言葉を繋げた。

「……あれは、妖星だ」

「あやしほし？」

「何百年かに一度、一晩だけ現れる。あれが来る夜、人間は魔物餘けの護符を貼って閉じ籠もり、震えながら朝を待つんだ」

淡々と告げる横顔は、薄暗闇に半分隠され表情を失っている。それに違和感を感じた燕が名を呼ぶと、緋雄はくつくつと肩を揺らした。

「何だよ、いきなり笑いやがって。何か可笑しいかよ？」

「いや、そうじゃ無え。むしろ、嬉しいんだよ……そうか、あれが見えるのか」

「ハア？ う、うわあつ！」

いきなり肩を掴まれ、燕が驚いた途端。緋雄は燕を担ぎ上げると、そのまま社の中へ放り込んだ。

勢い良く板間に転がされた燕が、何の真似かと怒り身を起こす。そして戸口に立つ彼を睨みつけた途端、その露草の瞳が驚きと恐怖に見開かれた。

見れば緋雄は邪気をじわじわと発し、凄味を帯びた笑みを浮かべている。瞳は煌々と輝き、口元には鋭い牙が伸び、背で靡く髪が触手のようだ。

「何を、驚いてやがる」

言葉を発す口元にちらつく、鮮紅の舌先がやたら生々しい。そのままひたり、と緋雄が近付くのを見て、燕の中に恐怖が沸き上がった。

「まさか、お前、俺を……」

「喰らう気が、ってか？」

「っ！」

にたり、とつり上がる口角に、今迄見た事の無い魔物の本性が刻まれる。それが己に向けられて居ると感じ、燕は一気に総毛立った。

——喰われる、間違いない喰われる。

しかし次の瞬間、緋雄は燕の予想を裏切り、勢い良く社の内格子を閉めた。

「……緋雄？」

「数多の事象、五重の匪へ寄り合わせ閉させ……」

続けて外戸も閉じられると、その向こうから緋雄の低い呪言が伝わって来る。それが止むと、瞬く間に戸の隙間から赤光が漏れ出し、戸口に取り縋る燕を撫でた。

「大人しくしてろ、朝には帰る——多分、な」

「緋雄？ おい、待て、待ちやがれって！」

がんがんと拳を戸に打ち付けるが、燕の力ではびくともしない。どうやら結界を張られてしまったようだ。

渦巻いていた緋雄の気配が、あつと言う間に遠退いて行く。虫の声すら無い静寂の中で、引き留める燕の叫びだけが響いた。

どのくらい経っただろうか。

小さな灯の傍らで、燕は座り込み膝を抱えていた。

痣が出来る程に力一杯蹴り叩き、しまいには太刀で打つてみたが、緋雄に閉められた戸はびくともしない。どうやらこのまま、朝まで待つしか無いようである。

「ちく、しょう……」

こめかみが疼くほどに歯噛みしながら、燕は頭を抱えた。そして己の非力さに、腹が立った。

もしも自分が魔物だったならば、この結界を破り緋雄を追う事だつて、出来るかも知れないのに。

いつも、こうなのだ——どんなに修練を積もうが、己が人間である限り緋雄には敵わない。そして人間である限り、きっと緋雄はいつまでもはぐらかすのだ。

お前の助けは要らぬ、と。

ならば己が魔物になれば、緋雄は己を信頼し、すべてを語ってくれるのだろうか。

しかし、仮にそう望んだとしても、方法の有無すら燕には判らない。無知の悔しさに床を拳で叩いていると、突然背がぞわり、と逆立った。

「何……？」

息を詰め、見えぬ壁の向こうを探る。異様な雰囲気社を包むのを感じながら、燕は脇差を手にとると、灯りを吹き消し気配を殺した。

闇に耳を澄ませば、微かに獣の様な低い唸りが聴こえる。

恐らく、魔物であろう。それらが醸す邪気はやがて密度を高め、燕を息苦しくさせた。

魔物はじわじわと、社へ近付いて来る。それは社の傍らに取り縋ると、不意に大きな雄叫びを上げた。

「……っ！」

ぐらりと社が揺れる。同時に発せられた強い邪気が、燕に耐え難い恐怖と吐き気をもたらした。揺れる社が、ぎしぎしと軋む。しかし次に別の甲高い叫びが迫り、取り縋る邪気とぶつかった。

「え……？」

たちまち揉み合いながら離れ、転がり落ちる。争い叫ぶ声と、殴打、荒く唸る息遣いが混じり合ううちに、燕の耳を一際高い叫びが貫いた。

「ギヤアアッ！」

「ごぶごぶと発つ水音と共に、強烈な酸の臭いが流れ来る。続けて硬いものが弾け、千切れ、それをにちやにちやと咀嚼するような様子が伝わった。

「食らって……る、のか？」

そう勘づくくと、益々胸を怖気が締め上げる。燕はいよいよ堪らず、床に這いつくばり吐いた。

「ぐ、ええっ……げふっ、うっっ」

夕餉を食して無かったのは、不幸中の幸いだったようだ。これ以上どんなに吐いても大した物はない。

燕は口元を拭くと、変わらず続く重い息苦しさと恐怖の中で、脇差を胸に抱いた。

「これが、理由……か？」

社から出るなど告げた緋雄の声が、燕の脳裡に蘇った。

気配は消える事無く、また一つ、二つと現れる。人間の赤子のような、または猿のような悲鳴に、虎のような咆哮。そして、地鳴りが近付いたと思うと、幾つも断末魔が響き渡り、社の壁を震わす。

尋常ではない。こんなにも魔物が次々に現れるとは、まるで何かに引き寄せられるようではないか。そして魔物達は、どれも狂気を孕むほどに荒れている。

魔物達は戦い、ひたすら喰らい合う。それが時折咆哮を上げて社に取り付き、屋根や壁を激しく殴打した。

恐怖の渦中でこの身を守ってくれるのは、緋雄が掛けて行った結界のみである。それが万一解けたなら、何の力も持たぬ燕は、たちまち八つ裂きにされ喰われてしまうだろう。

「緋雄……ッ！」

小さく震える眩きすら喰らわんと咆哮が響き、また社が身震いつ
つ軋む。

終わりの見えぬ暗闇の中、燕は息を詰め、ひたすら解放を願った。

妖星ノ巻 其ノ十一*

——妖星。

それが何処から来て、何処へ行くのかは判らない。何の為に存在し、どんな仕組みで魔物達へ影響を及ぼすのかも定かではない。

だが、あの星が現れる時。全ての魔物の腹の底に宿る『本能』が目覚めるのだ。

それを恐れる人間達は神仏に縋り、僧侶や陰陽師の呪禁と護札で身を守る。対して魔物達は、戦い食らい尽くすまで本能のままに闇夜を巡る。破壊と殺戮を求め無差別に命を欲する行為は、星が朝陽に溶け消えるまで、止む事は無い。

虫の声すら止んだ、闇の中。緋雄は疾る脚を緩め、木上から地へ降り立った。

鬱蒼と茂る深森の奥である。社からは既に遠く、此処まで来れば、誤って燕を手には掛ける恐れも無い。そして自分の命が続く限り、社に張った結界によって、燕は他の魔物から護られるだろう。

燕が生き延びるために、自分も生き延びねはならない。その事実に気付いて、緋雄は思わず鼻で笑った。

「しかしあの馬鹿、間抜けな顔しやがって。何にも気付いてやしねえ……」

脳裡に、まるで他の人間と同じように、自分を恐れた燕の顔が浮かんだ。

共に三年過ごして来たとは言え、緋雄が魔物の本性を見せたのは初めてだ。勿論、喰らう気など更々無い。だがそれを見抜けず戦い

た燕が滑稽だった。

そんな彼に真実を知らせたならば、一体どんな顔をするだろう。人間を凌駕する強い力を得られると喜ぶか、それとも本当に魔物との合いの子だったと知り、己を嫌悪するか。夜が明けて互いにまだ生きていたならば、教えてみるのも悪くは無い。

妖星は普通の人間に、見えないのだと。

そう思い付き微笑んだ緋雄の腹の中で、どくりと脈打つ音が響いた。

「う……」

体が熱くなり、脈が次第に規則を持って刻まれるに伴い、感覚が研ぎ澄まされて行く。

感情は凍て付き麻痺し、代わりにふつふつと沸いて来るのは、斬り裂き命を喰らう事への、抗い難い衝動。

丹田から充ちる禍々しいそれは、腹から胸を通り、喉から脳天まで一気に駆け巡る。そして四肢を蔓延なく焼き、最後に獣の咆哮となり響き渡った。

「——！」

不意に背後で、小枝がぴしりと音を発てる。それと共に黒い塊が飛来し、緋雄の喉元に齧り付かんと牙を剥いた。

「クアアア！」

振るわれた斬撃に塊が絶叫し、真つ二つに割れた体から濁った血潮が吹く。それが地に落ちる前にわらわらと毛塊が現れ、緋雄をぐるりと取り囲んだ。

毛現けげんの群れである。大きさは子供の頭ほどで、普段は死肉しか喰わない、大人しく非力な魔物だ。しかし今夜は彼等も、妖星の影響を受けているらしい。百を超える程の群れを成し人海戦術を用いて、生物まで喰らっているようである。

「喰へ……」

真中に光る黄の単眼が見開かれると、その下の口がぱっくりと大きく割れ、鑢やすりのような乱杓らんくいは歯が零れ出る。鮫のように二重三重と生

えたそれは、雄牛の腿など一発で食い千切るほどに鋭い。

毛現達は一斉に歯をがちと噛み鳴らし、涎を垂らしながら緋雄を威嚇する。その甲高く障るような音に耳を伏せると、緋雄は抜いた本太刀をそのままに、左手で小太刀を抜いた。

「喰へ、喰へ……」

囁くような毛現の声が、辺りを包み込む。緋雄は半身で構えると、黒い刀身へ邪気を注ぎ込んだ。見る見るうちにその流麗な刃が、長く黒炎の舌を持つ魔刀と変わる。

「黙れよ、この毛玉共が！」

そう唸りながら力を見せつけるように一振りすれば、まるで黒炎が大旗の如く尾を引き、禍々しい欠片が千切れ飛ぶ。それに却って油を注がれたのか、毛現の高まるざわめきは、やがて絶叫と化した。

「喰へ、喰へ、喰へエエエ！」

一番体の大きな毛現が、唾を散らして叫ぶ。それを合図に、毛現達は四方八方から一気に襲いかかった。

「ウオオオオオ！」

「ギャイイ！」

飛び掛かり、突っ込み、跳ねる。緋雄はそれらを、片っ端から二つに斬った。

尾を引く黒炎に触れただけでも、毛現が燃え上がり、地べたへ転がり落ちる。それが十を越え、二十を越えると、やがて緋雄の周囲に黒い輪が生まれた。しかし毛現達はそれに構わず、次々と緋雄へ雪崩れ込んで来る。

「キエエエ！」

緋雄の視界を埋める程に、毛現が束になり同時に飛び掛かる。それらが一斉に口を開き、粘る唾液を浴びせて来た。緋雄がそれを飛び退いて防ぐと、今度は背後から同じ様に、毛現が涎を引いて襲い来る。横に逃げ、斜めにとんばを切るうちに、数に勝る毛現は包囲を狭め、緋雄を追い詰めた。

「！」

咄嗟に付いた緋雄の左足が、地に溜まった唾液に取られる。するとまるで鳥糞とりもちの如く足裏が粘り、緋雄の動きを鈍らせた。その隙を勝機と見た毛現達は、口々に叫びながら緋雄目掛け殺到した。

「喰ラヘエエツ！」

完全に毛現の眼光と、唾液に包まれる。足元から頭上まで円く包囲され、牙が迫り来る中。緋雄はにやりと笑うと、眼前で二刀を十字に交差させた。

「黒龍、蛇妃！」

俄かに緋雄の瞳が輝き、同時に名を呼ばれた二刀が赤光を放つ。その眩しさに毛現が眼を細める間に、刃から吹き出した禍々しい邪気が緋雄の全身を包んだ。

「ギイイ！」

邪気は爆発する勢いで膨張し、迫る敵を次々に黒く染めて行く。

包囲円はぼろぼろと崩れ、千々になり消えた。そうしてほぼ毛現を飲み込むと、今度は急速に萎んで行く。生き残った幾つかの毛現が目を瞬かせる前に、異形となりつつある緋雄が現れた。

しかしその姿は一瞬で消えると、あつと言う間に手近な毛現へ走り寄り、刀で両断する。立て続けに悲鳴が上がり、体液が飛び散る中。遂に最後の毛現が、袈裟に斬られた。

「グヒイ！」

「クククク、ああ、やり過ぎちゃった。まあ、良いか。お前等は頗る不味そうだからな」

嘲る緋雄の瞳は白目まで緋に染まり、その目元から頬、更に首から下には黒炎のような文言が拡がっている。身に纏う着物は檻褸ぼろと変わり、手足は黒い獣毛に覆われ、鋭い爪が光っていた。

累々と転がる毛現は既にどれも動かず、あるものは灰になり、あるものは半分焼け爛れている。胸を病むほどの異臭が漂い、まるで黒い死の絨毯が敷き詰められたような中。緋雄はふと耳をそばだてると、次の瞬間高く跳躍した。

すると間髪入れず黄色い火球が撃ち込まれ、まるで爆発するよう

な衝撃が、先程まで緋雄が立っていた地面を襲う。轟音と共に大量の土と毛現の死骸が巻き上げられ、濛々と視界を濁らせた。

「美味そうな獲物を見付けたぞ——緋雄」

奈落から響くような低い唸りと共に、濁りの中から大きな影が現れる。それは緋雄に三步近付くと止まり、薄らぎつつある濁りの向うで何かを噛み千切った。

「……狛、か」

「何せこの辺には、力の弱いモノしかおらんようだな。どれを喰らっても、薄味で飽きて来たところだ。貴様ならば、きっと寝かせた強い酒の如く、芳醇かつ美味であろう」

手にした小守らしき肉塊を無造作に放りながら、狛は血濡れた牙をにたりと晒した。

見れば既に相当喰らった後らしく、その体は普段よりも倍近くに膨れ上がっている。纏った黒甲冑は肩や肘、膝に太い棘を生やし、刃などまるで歯が立たぬ様子だ。右手に握りられた大鉈は、今やその刃を黄色く光らせ、狛の瞳と共に煌々と輝いていた。

緋雄は狛を真正面から睨み付けると、恐れるどころか煽るように嗤った。

「俺が美味そうか？ 残念だが、喰われるのは狛、お前の方だ」

「ほう、我を喰らうとな。ならば試して見よ、そして——敵わぬと知れ！」

そう言い放ち、狛が大鉈を振り被ると、一気に振り抜く。すると刃が火球を放ち、緋雄へ襲い掛かった。

「ハッ！」

同時に緋雄が邪気を込め、本太刀を右から振るう。火球の中心に斬りつけると、互いの邪気がまるで爆発するように、勢い良く四散した。

狛はそれに構わず二撃、三撃と火球を放つ。緋雄は見えぬ程の速さで駆け寄ると、素早く狛の喉元に小太刀を突き出した。すると狛が、大鉈で切先を防御する。

ぎしり、と小太刀が鳴くのを構わず、緋雄は次に豹の足を狙い、本太刀を右から低く薙ぐ。しかしそれは豹の甲冑に阻まれた。

「ちっ！」

やはり手足ですら、甲冑を刀で斬る事は難しいようだ。

緋雄の舌打ちを合図に、互いに一旦身を退く。そして再び駆け寄ると緋雄は跳躍し、豹の頭目掛け本太刀を振り下ろした。

わざと大蛇で弾かせ、その隙に左の小太刀で豹の瞳を突こうとした瞬間。緋雄は左脇腹に重い衝撃を受けた。

「ぐ！」

豹の岩のような右拳に、飛ばされながらも身を捻る。足から着地しよるめく緋雄へ、豹は駆け寄り大蛇を振り下ろした。狙うは緋雄の頭である。

がちり、と金属音を響かせ、緋雄が頭上に上げた二刀で受け止めた。しかしその足は少しずつ地へめり込み、明らかに力の差を示している。豹はそれに勝利を予感し、赤く濁った涎を舌尖から引いた。「このまま、貴様の刀を砕いてくれる。そして腹から二つに裂き、先ずはその中の柔らかな臓腑から喰らってやろう。次はその輝く目玉だ。思い切り恐怖と怒りに染めて置くが良い。その方が美味いだろうからな」

刃を包む黒炎が豹の邪気に圧され始め、一段と足が地に沈んだ矢先。緋雄の背後から黒い尾が伸び、豹の首元に巻き付いた。

「ウグツ！」

「調子に乗んなよ、この熊野郎が！」

罵倒と共にぎゅうと締め上げるが、豹も素早い。咄嗟に大蛇から左手を離すと、腰に差してあった刺刀で、締め上げる緋雄の尾を掻き切った。

火花を散らして大蛇を弾き、緋雄が後方へ間合いを取る。豹は残された尾がまだ首元を締め付けるのを、無理矢理力で引きちぎった。「おのれ、往生際の悪い事よ、そして我は熊では無い、狼だ！」

そう憎々しげに吐き捨てた豹が、仁王立ちして天を仰ぐ。そして

分厚い胸を膨らませると、獣の咆哮を上げた。

すると黄の邪気が沸き上がり、竜巻のように辺りを舐め、ぐわりと開けられた狼の口に吸い込まれる。途端に体がみしみしと音を鳴らし、尚も巨大に膨らんだ。

「チツ、まだ育つのかよ？」

吹きつけられる強烈な邪気に眉を寄せ、緋雄が指笛を鳴らす。すると背後の地面がぐずぐずと揺れ、中から黒炎の犬達が二匹現れた。

「お前等、憑け」

主の低い命令に、犬達が一斉に駆け寄って来る。そして大きく跳躍すると赤光の塊と身を変え、緋雄の背から体へと融合した。

「いよいよ犬を呼び、更に力を得たか。だが、それがどうした？」

今や狼の身の丈は、緋雄の約三倍へ達する勢いだ。狼は一旦左足を引き半身を取ると、今度は腰ために大鉈を構えた。

「決めるぜ、覚悟しやがれ！」

その叫びと共に、緋雄が狼へ駆け寄った。

「ガウウウ！」

咆哮と共に狼の大鉈が唸りを上げ、より大きな火球が撃ち出される。対して緋雄は走りながら刃を振り被り、前方に黒炎の壁を作った。

火球はそれに衝突し爆発したが、同時に黒炎も吹き飛ばされる。再び視界が濁る中、狼の眼前に、一瞬にして緋雄が現れた。

「うおおおおッ！」

叫びと共に、緋雄の全身が濃黒の邪気に包まれる。狼も竜巻のように黄の邪気を纏い、咆哮し大鉈を振り上げた。

——正面から激突し、目も眩む光と衝撃波が辺りを舐める。

高密度の邪気が霧のように広がり、そこに生える草木から命を奪った。

やがて光は明度を失い、まるで冬のように色を失う大地を闇に染める。その中でゆらりと、緋の瞳が光った。

「——残念だったなア」

笑みを含んだ緋雄の声が闇に響く。そしてその中で、骨肉を断つ鈍い音が響いた。

にちやにちやと掻き回すような音がし、やがて黄に燃える珠が現れる。掌に収まる程のそれへ鼻を付けると、緋雄は血に濡れた顔を歪めた。

「だから、俺が喰らうつて、言つたろ——狛よ」

暫しくつくつと笑つてから、緋雄はその珠を吸い込み始めた。

熱く芳しい狛の魂が、口中から喉、胸から腹へ流れ込む。すると全身に力が漲り、受けた傷がみるうちに治癒して行つた。そうして緋雄が珠をすべて吸い込んだ頃には、再び腹の奥から本能の鼓動が響いた。

『喰らえ』

衝動は強く、抗う術も、理由も無い。緋雄は欲するまま、元の大さに縮んだ狛の胴体を転がし、その甲冑の隙間から小太刀を突き入れた。

何度かそうして狛を二つに割ると、適当に手を突っ込み、肝らしき臓腑を探り当てる。引き摺り出したそれは重く、美味そうな匂いがした。

他の臓腑から力で引き千切り、端から構わず齧り付く。牙を穿てばだらだらと血が零れ落ち、緋雄の体を伝い濡らして行く。

「く、クククク……！」

やはり、美味い——緋雄はそうして暫く、笑いながら狛を貪った。そんな彼の様子を、周囲の木々の影からじつと狙う眼が幾つも光る。そう、狛を仕留めたとして、まだ夜は終わらないのだ。

——妖星は変わらず長く尾を牽きながら、東の空へと流れ落つ。その輝きは紅く煌々として、未だ勢いを保ったままであった。

c
o
p
y
l
i
g
h
t

K
·
A
i
b
a

妖星ノ巻 其ノ十二

気付けば社の回りは、静寂に包まれていた。

どうやら途中で気を失ってしまったようだ。燕は薄く目を開けると、縮めていた体をゆっくりと伸ばした。

余程力んでいたようで、体のあちこちに痺れるような鈍痛が奔る。噛み締めていた唇は渴き、吐いたせいで口の中が粘ついていた。

魔物達の気配は無く、壁の小さな隙間からは薄光が射している。もうすぐ夜明けだと気付いた燕は、立ち上がると内格子へ近寄り、そつと引いた。

「結界が、解けてる……？」

そのまま開け、軋む外戸を恐る恐る押す。すると戸が開いた途端に、血腥い臭いが鼻を衝いた。

「何、だよ……こりゃあ」

社の境内に広がるのは、たくさんの血の跡と魔物の骸と、若しくは食い残された残骸。燕は凄惨な光景と臭いにまた吐き気を催したが、口許を強く押さえ堪えた。

空にあの箒星を探せば、それは白々と明ける東の淵に吸い込まれるように、蒼い中をゆっくりと落ちて行く。見る間に紅い輝きが失われ、完全に消えた後。入れ替わる様に朝陽が薄く顔を見せ、新しい光を發した。

ようやと迎えた終鳶である。すると累々と横たわる魔物達の骸は、まるで朝陽に浄化されるが如く、煙を上げ始めた。

「え？」

燕は初めて目の当たりにした『魔物の死に際』に呆然としていたが、端と我に返ると、目を凝らし緋雄を探した。そのうちに、眺めるだけでは埒が開かないと思ったのだろう。左手に小太刀を取ると、

草鞋も履かずに社を飛び出した。

「緋雄！」

取り敢えず名を呼ぶが、彼が何処に居るかは判らない。

煙の満ちる境内を突っ切り、正面の鳥居を抜け、苔むした石段を飛び降りる。続く細い山道へ出て進みあぐねていると、ふと風上から血の匂いが流れて来るのに気付いた。

「こつちか？」

確証は無いが、勘が告げるままに走り出した。

大きく曲がる上り道を駆ける合間にも、所々に転がる魔物の骸は大小を問わず、どれも煙と化して消えて行く。言い知れぬ不安が胸を過るのを感じながら、燕は走った。

「あ！」

見れば山側にある大きな杉の根元に、黒い影が寄り掛かり俯いている。手足は獣の毛で覆われているが、髪色と獣耳、体に刻まれた文言から察すると間違いないだろう。横に転がる血濡れの黒刀も、彼の物だ。

「緋雄、おい、緋雄」

しゃがんで呼び掛けるが、反応は無い。まさか死んでいるのかと焦った燕は、更にその血濡れた両肩を掴むと何度か揺さぶった。

「緋雄、しっかりしろって、なア！」

「……ウルセエ、って」

ひくり、と耳が動き、ゆっくりと頭が上がる。燕は被さる黒髪を掻き分けると、その血塗れの頬を両手で拭った。

「大丈夫か？」

「大丈夫、夫……じゃ、ね……ッ」

薄く開けられた瞳は濁り、開いた口元から血が溢れ出る。大きな外傷は見当たらないが、相当弱っているようだ。

「動けるか？」

そう問いながらも、燕は緋雄の腕を己の首に回すと、その大きな体を立たそうと試みる。しかし僅かに腰が浮いただけで、緋雄はま

たぐらりと座り込んだ。

どうすべきか。早々に罅へ移動させねば、先ほど溶けていった魔物の骸のように、緋雄も事切れて消えてしまいかもしれない。燕はそう焦りながら、必死に手立てを考えた。

「緋雄、黒雅達、呼べるか？」

「無理、だ。アイツ等も、弱……ぐッ！」

再び吐いた血で汚れる緋雄の口元を、己の袂で拭いながら。燕は唇を噛み締めると、自ら緋雄の腿を跨ぎ、その頭をぎこちなく掴んだ。

浅く不規則な息を繋ぐ緋雄へ、前触れもなく口付ける。それはぶつかるとような拙い遣り方だったが、緋雄を驚かすのに充分であった。

「何、を……」

「吸えよ、俺の生气。そしたら、自分で血止めくれえ出来んだろ？」

「……」

「早くしろ。ここにいつまでも、転がってる気か？」

そう唸りながらも、燕の頬はみるみるうちに赤く染まる。緋雄はそれを少し眺めてから、細い溜息を吐いた。

「良いの、か？」

「訊くな馬鹿、気が変わるだろッ」

半ば自棄に吐き捨てる燕へ、緋雄は来いと言うように顎を上げた。

「チッ……」

まるで自分から望んで行うようで癪だが、為さねば緋雄は死ぬかも知れない。燕は思い切り歯を食い縛ると、そのまま緋雄へ口付けた。

しかし、吸われる感触は感じられない。どうすれば良いのか戸惑っている、緋雄がぼつりと呟いた。

「舌……」

「ふへ？」

「出せ」

「ふが？」

言われるままに、恐る恐る燕が口元を緩める。そして僅かに舌先を出すと、緋雄の舌がぬるりと触れ、燕のそれに絡まるように蠢いた。

「う……ッ」

むっとするような血の香が溢れた途端に、驚くほど強く生気を吸われた。

身震いするような快楽が流れ込み、それが喉を走り抜けて背を泡立たせ、心の臓を急激に高まらせる。しかもその満ち方は、以前旅籠で感じたような、生易しいものではなかった。

一気に酩酊するような感覚に襲われ、快楽が手足の爪先まで駆け巡り、腸の奥深くを熱く疼かせる。このままではどうにかなくなってしまいかもしれない——未知に触れる恐怖に燕が戦くと、緋雄はその細い体へ腕を絡めた。

「止め、ッ」

「まだ、だ……俺を、助けたいん、だろ？」

「それは……」

「助けたい、なら……拒むな、すべて受け入れろ」

眼前に揺れる緋の瞳が、仄暗い光を帯びている。燕はそれに射竦められたような気がした。

拒否は出来ない。ここで緋雄を助けられるのは、己のみだ。燕はそう自分を叱咤すると緋雄へ委ねた。

——そこからは、燕にとって初めての体験であった。

容赦無く生気を吸われ、直に手足が言う事を訊かなくなった。それに比例し熱が体内を渦巻き、全身が沸騰するような錯覚に陥る。

それでも唇を離す事を許さぬ緋雄が、こみ上げる血を何度も燕に送った。それを飲まされる度に、強烈な快楽が燕を蝕み、丹田の底で膨張する凝こわと化して行く。

「ひ、ゆ……ッ」

切れ切れに呼び助けを乞うが、緋雄は瞳を少し細めるだけで、まったく止めようとしない。それどころか、いつの間にか燕の股ぐら

にまで手を伸ばしていた。

「あ、ッ！」

拒否を叫ぶ間も無く、そこに滾る熱を布越しになぞられる。その感触に、燕は思わず眼を瞑った。せり上がる強い衝動を、止める事が出来ない。

「くっ、ッ！」

引きつるように、燕が身を震わせる。するとそれを待っていたかのように、緋雄は息を荒げる唇を一際強く啜った。

「んぐっ！ はっ、う……っ」

「ごちそう、さん。美味かった」

ようやと唇を離れた緋雄は、燕の股ぐらから手を抜くと、再び木に凭れて眼を閉じた。

まるで修行僧が瞑するような表情を浮かべる彼に対し、燕は半泣きで彼の腿から降りた。

「う……」

ぬるつく口元を拭った手の甲は、互いの唾液と緋雄の血でべつとりと染まる。まだ震えの残る全身は汗にまみれ、下帯の中に至っては、生温い何かが溢れて気持ちが悪い。思わず燕がそこに手を突っ込むと、白く糸を引くものが指先に絡んだ。

「何だ、これ……？」

初めて見るそれは、独特な生臭さを放っている。燕が呆然と眺めていると、緋雄は薄く目を開いてその手を掴んだ。

「知らねえ、のか？ お前の、精だ」

「せい？」

「ああ、まったく、お前は本当に、餓鬼なんだな……」
「……くッ！」

ようやとその意味を理解した燕が、勢い良く緋雄の手を振りほどく。そして見る間に怒りを露わにすると、固く握った拳を振り上げた。

だが緋雄は再び眼を閉じると、僅かに眉を寄せる。すると刻まれ

た文言から緩やかに赤い邪気が発され、全身を這うように包んだ。

上半身に絡む文言が徐々に縮み、手足を覆う獣毛かさぶたが消える。鮮赤を湛えた体の傷は、あるものは乾いて薄い瘡蓋かさぶたとなり、あるものは濃桃色の肉線と化した。

どうや回復へ向かいつつあるようだ。燕は怒りに歯噛みしながらも、掲げた拳を下ろした。

「動けるか？」

「ああ……肩、貸して、くれ……」

ゆっくりと開けた瞼の下の瞳は、弱いながらも輝きを取り戻している。

燕は少しよためきながら再び緋雄の横に回ると、屈んで肩を組んだ。

この後。

社へ戻った燕は、緋雄の求めるまま生気を与えつつ、彼の様子を見守っていた。

生気を吸われる度、燕の腹は熱を孕んでずくと疼き、初めて精を溢した時の感触を全身に思い出させる。それは燕にとっては堪らない程の羞恥であったが、緋雄の体が戻るまでと己に言い聞かせ我慢した。

そんな一方で、緋雄は一日の大半を眠って過ごしていた。日増しに傷は癒えて来たようだが、まだ何処かに治癒し切らない部分があるのかも知れない。峠を越えたとは判っていたが、こんな無防備な状態の緋雄から離れる訳にも行かぬと、燕はずっと傍へ着いていた。

そうして、凡そ三日の後。

久々に外出した燕が、初めてそれらに遭遇したのは、社から少し西へ離れた山中であった。

妖星ノ巻 其ノ十三

妖星が去ってから三日。曇天の昼下がりに、燕は山中を歩いていた。

緋雄は寝てばかり居るものの、目覚めた合間に減らず口を叩くようになって来た。それを回復の兆しと安心した燕は、久々に社から出て来たのだ。

いつも魚を獲る川から西へ向かうと大きな林檎の木があり、その界限では野莓や山葡萄、あけび 妾なども採れる。そろそろ何か収穫があるに違いないと思い、燕は軽い足取りで獣道を歩いた。

やがて鬱蒼と繁る木々が割れ、下草生い茂る野原を渡ると、枝振りの良い林檎の木が現れた。見上げればまだ青い実が多いものの、南側にあるものは半分ほど赤く色付いている。

燕は腰に差した二刀の小太刀のうち、真つ黒な柄を握った。

「こんな事に使われてるなんて知ったら、怒るだろうな」

そう可笑しそうに呟き抜いたのは、緋雄の脇差『蛇妃』である。大して手入れをしている様子も無いのだが、やたら切れ味が良いので勝手に借りて来たのだ。

燕は蛇妃を握り直すと、頭上の枝へ目星を付けた。深く腰を落とし、跳躍する。そして軽く一閃すると、枝が断たれ落ちて来た。

手慣れた様子で刃を収めると、枝から林檎を外す。実は他のより赤く甘そうだ。燕は着物の腹で皮を拭くと、早速齧りついた。

「あれ？」

皮の色艶は良く果汁も溢れているのに、味がぼんやりとして良く判らない。どうやら既に惚けているようだが捨てるのも惜しく、燕はもう一口齧った。

そのまま歩きながら探すと、今度は妾が実っている。手に入れると、身は爆ぜ割れていて甘い香りがした。これは美味いだらうと踏んで中の綿を口に含むが、何故かそう感じなかった。

「おかしいな。これも惚けてんのか？」

例え惚けていたとしても、これ程味気無いのは初めてだ。もしかしたら己の舌が鈍ったのかと首を捻りつつ、燕は違う妄に手を伸ばした。

——実は妖星が現れた夜から、燕は食物を一切口にしていなかった。

普通なら三日も絶食すれば、人間は体力が落ち動けなくなる。更に夜間も何かしらの危険に備え、ほとんど睡眠を取っていないければ尚更だ。だが不思議な事に腹は減らないし、大した眠気も催さない。寧ろ体が軽く感じ、力も付いたように燕は感じていた。

実のところ、これは緋雄の血を飲んでしまった事が原因である。

だが燕は、魔物の血が人間に与える影響を知らない。

最近の行いをあれこれ思い出し、疑問の答えを探す。そうして思考は唯一つ変わった点、つまり緋雄へ毎日生気を与えている事に行き着いた。

「……あ」

燕の足取りが、突然止まった。

ちらりと思い出ただけなのに、生気を吸われる感触が体に蘇り、心の臓が俄かに早鐘を打つ。羞恥の熱が喉元から頬へ上がって行くのにつれ、丹田の奥がどくり、と脈打った。

「お、思い出すな、思い出すな畜生ッ！」

腹の底の異変を鎮めようとするが、まるで別の生物でも棲んでいるように疼く。それに狼狽えて身を擦った直後。背後でがさり、と草が鳴り、えも言われぬ気配が襲い掛かって来た。

咄嗟に左へ転がり、起き上がると同時に蛇妃を抜く。そして敵を見た途端に、燕は眼を見開いた。

「何ッ？」

見ればそれは犬であったが、不思議な事に全身が下草と同じ緑色である。体格は大きいが枝のように細く、こちらを見た眼は真っ白で感情が無い。

犬は後からもう一匹現れ、唸りも上げずに燕を両側から挟み込む。燕はその動きを窺いながら、腰にあるもう一刀の小太刀へ左手を掛けた。

燕が緑の犬達と遭遇する少し前、緋雄は浅い眠りの中にいた。

白く濁る視界が、鮮やかな橙に染まり上がる。焦点が合うにつれ、夕陽に染まる空と山々が現れた。

肩や背に感じるのは、冷たい大地の感触。四肢は重く感覚を失い、口中には血の香が充ちている。

（――緋雄）

懐かしい声に呼ばれ、頸を軋ませながらそちらを見遣ると。そこには刀を携えた相棒が笑っていた。

（生き延びる……必ず、お前の許へ戻るから）

彼の胸元は赤く染まり、顔色も蒼い。傷付いた状態で戦えば、恐らく生きては戻れぬだろう。それほどに敵は強く、数も多かった。

崖を吹き上がる風が、微かに封香の臭いを運んで来る。相棒は刀を置いて立ち上がると、緋雄に背を向け崖端へ進んだ。

（例え輪廻を経ようと、必ず戻る。その証に、刀は預けたぜ）

獅子のたてがみを思わせるような金髪が、夕陽の中できらきらと揺れる。

行くなと叫ぶが声は出ず、腕を伸ばすにも動かない。ようやく身を僅かに上げ、眼だけで追い縋るその先で。背に翼を広げた相棒は鮮やかな夕陽に身を染め、崖端から飛び立った。

「獅燕ッ！」

緋雄が叫び身を起こすと、そこは見慣れた社の中であった。

随分古い光景を、夢見たものである。そう溜息を付きながら、緋雄は額にかいた汗を左掌で拭い、辺りを見回した。

このところ付きつきりだった燕の姿が見えない。緋雄はゆっくり立ち上がると、社の戸へ近付いた。

久々に戸を開け、湿り気を含んだ外気に触れる。僅かにふらつくが、体の痛みはもう無い。燕が生気を与え続けてくれたお陰だと思ふと、少し口元が緩んだ。

それにしても、燕は何処へ行ったのか。緋雄が音と匂いを探りながら、外へ足を踏み出した矢先。背筋を小さな気配が駆け抜けた。

「蛇妃、か」

眼を閉じ、意識をそれへ集中する。すると刃が何かを斬る感触が伝わって来た。

「あの馬鹿、勝手に持って行きやがって、何に使ってやがるんだ」
くつくつと笑いながら社の戸を閉め、緋雄は再びこなれた寢床へ戻った。

そのまま横になり、刀の感触を暫く探る。だが突然かつと眼を見開くと、慌てて起き上がった。

「燕……」

何を感じ取ったか、表情は頗る険しい。緋雄は胡座を搔くと、再び眼を閉じ意識を集中した。

「くそッ！」

燕は蛇妃を構え、襲い来る犬を右から薙いだ。一匹は勢いで吹っ飛ばしたが、その後ろからもう一匹が跳躍して来る。燕は左の小太刀で鋭い牙を受けると、犬の細い腹目掛け蛇妃で突いた。

だが、手応えがおかしい。確かに突いているのだが、効かないの

だ。

咄嗟に地べたへ叩き付け、噛まれた刃を無理に抜き去る。しかし犬は怪我一つ負わず、直ぐに頭を振りながら立ち上がった。

冷たい汗が一筋、燕の額を流れる。

犬達から感じる様子から察するに、魔物ではない。いや、生き物でないと言った方が的確だろう。感情はまったく見えず、まるで操られている脱け殻のようである。

手前の犬が身構え、高く跳躍する。牙と剥き空から襲い掛かるのを、燕は左の小太刀で受け流した。

すると今度はもう一匹が足を狙って来る。燕は咄嗟に飛び退り、犬の頭を斬り付けた。だが頭は割れず、殴打の鈍い音が響く。

「畜生、何で斬れねえんだよ！」

そう吠えてみるが、犬達は燕へ間を与えぬよう、交互に若しくは同時に仕掛けて来る。そして燕はそのうちに、低木が垣の如く生えた場所へ追い詰められた。

じりじりと下がると、肩や背に触れた木枝がちくちくと針のように刺さる。その鋭い痛みには歯噛みしつつ、燕はゆっくりと近付いて来る犬達を睨みつけた。

逃げ場が、無い。

唐突に手前の一匹が仕掛けて来る。燕がその動きに気を取られた一瞬、もう一匹の姿が視界の端から消えた。それを追う間もなく、近付く犬を蛇妃で左に払う。またもや斬れぬと動揺した瞬間、燕の右大腿に激痛が疾った。

「グアアアッ！」

隙を付かれた。着物越しに噛み付いた鋭い牙はがっちりと大腿を穿ち、そのまま食い千切る勢いだ。堪らず燕は地べたへ倒れ、引き摺られた。

叫びながら犬の頭を刀の柄で殴るが、一向に離れない。そのうちにもう一匹が、いよいよ止めとばかりに襲い掛かった。

——殺られる！

そう感じた途端、腹の底がどくり、と息づいた。

視界が固まり、燕の周囲すべてが一気に静止する。高鳴る腹の鼓動が聴覚を支配し、一際大きく響く。するとそれを合図に、鼓動に合わせ周囲が緩く動き出した。対して己の動きは、それに制限されない。

戦いの最中に起きた不可思議な現象に、燕は眼を瞬いた。

「何、だ……これ？」

近付く犬は鋭い爪と牙を剥き、燕目掛けてゆるゆると迫り来る。だがその真つ赤な口の奥に、何故か白く浮き出た『式』と言う文字が見えた。

——貫け。

何かがそう囁く。途端に燕は思い切り目を見開き、右手に握った蛇妃の切先を、その文字目掛けて突き出した。

「きゅん！」

途端に生き物の声とは思えぬ、耳を刺すような甲高い破音が響く。すると口を貫かれた犬は瞬時に掻き消え、燕に噛み付いていた犬は慌てて身を引いた。

視界が元の世界へ戻ると、急激に傷が痛んで血の気が引く。気を失うまいと唇を噛む燕の目前で、地べたが戦慄き、土塊と共に黒炎が吹き上がった。

「くろ、やび？」

蠢く土中から現れた黒雅は威嚇の唸りを発すると、燕を背に庇うよう立ちはだかる。すると緑の犬は脱兎の如く逃げ出した。

下草に紛れ木々の影へ身を隠そうするのを、黒雅が追う。その姿が消えた辺りで、再びあの破音が響いた。

「どうして……」

突然現れた味方に感謝しながらも、燕は驚きを隠せないまま、己の体を確認した。

骨は無事だが、大腿にはしっかりと歯形が刻まれ、点々と穿たれている。燕は流れる血を袖で拭うと、着物の裾を裂いて傷を固く縛

った。

そして蛇妃を先に収めると、小太刀を杖にゆっくり立ち上がる。静寂を取り戻した辺りをよるめきつつ探ると、白い短冊のような紙が落ちてゐるのに気付いた。

「何だ、これ？」

拾いあげたそれは半ばまで割かれていたが、何やら難解な筆文字が模様のように書かれ、その真中に『式』と一際大きく記されている。どうやら何かの札らしい。燕はそれを懷へ突っ込むと、痛む右足を引きながら歩き出した。

嫌な予感がした。早く社へ戻り、緋雄へ知らさねばならない。そう焦るが、歩みは遅く覚束ない。そのうちに前方から黒雅が駆け寄って来た。

「大丈夫だ、歩ける」

そう苦痛を隠しながら、見上げる緋の瞳へ笑い掛ける。すると黒雅は何かに気付いたように、燕の体へふんふんと鼻を寄せ、いきなり頬擦りした。

「うわ！」

黒雅の無謀な仕草に、燕は仰天した。緋雄の邪気を纏わずに黒雅へ触れれば、人間は燃え死んでしまう。だが慌てて覗き込んだそこは異常無く、発火する気配すら無い。

これも緋雄の血の効力なのだが、それを知らぬ燕は不思議だとしきりに頭を捻った。

黒雅は何度も頬擦りした後、燕の右袖を咥え、物言いたげに引いた。

「乗せてくれるのか？」

足を引く燕を氣遣ってくれたのか、それとも緋雄の許へ急ぎたいのか。いずれにしろ、それが一番早く社へ帰れるだろう。燕は黒雅の滑らかな背を跨ぐと、その太い首にしっかりと掴まった。

社へ着くと、戸が半分程開けられている。黒雅は燕を乗せたまま、躊躇無く中へ飛び込んだ。

「おい、緋雄ッ……！」

「判ってる。今すぐここを出る」

見れば緋雄は既に起き、身支度を整えている。それを見て戸惑う燕に近付くと、緋雄は腰に愛刀を差しながら、にやりと笑った。

「黙ってそれ、持って行っただろ」

「あ！」

「俺と刀は邪気で繋がってる。だから、お前がそれを抜けば判るんだよ」

「ほ、本当に？　じゃあ、黒雅を寄越したのも……」

「おう。つつか、他人の腰のモノを林檎狩りに使うな、馬鹿が！」
「痛っ！」

べちん、と平手で頭を叩かれながらも、刀を黙って持ち出した手前文句も言えない。燕は顰め面で黒雅から降りると、先程拾った紙を懷から取り出した。

「なあ、これ、何なんだ？　変な緑の犬と戦った後に、落ちてたんだ」

「ああ、これは式鬼使いの扱う呪札だ。犬に為したって事は、大方魔物を探してんだろ」

「どういう事だ？」

「魔物狩が始まったって事さ」

その言葉に、燕が眉を寄せる、緋雄は呪札を黒炎で燃すと、戸口へ向かいながら言葉を続けた。

「賞金や地位が欲しいのか、それともそんなに俺達が憎いのか。妖星のお陰で数はだいぶ減ったが、生き延びた奴等は大概弱ってる。狩るなら今って訳だ」

「……狩る？」

「ああ、人間は魔物を狩るんだ。前に言っただろ。人間は弱い。だが、束になればそりゃあ残酷なんだって」

その声音には皮肉と怒りが滲んでいる。それに気付いた燕が応えに迷っていると、緋雄は振り返り燕をじっと見詰めた。

「……な、何だよ？」

「一緒に来い、燕。そして、俺の相棒になれ」

「相棒？」

「ああ。嫌か？」

そう問われても、余りに唐突で判断がつかない。燕は束の間眼を泳がせた後、小さな声で呟いた。

「……相棒って、何すんだ？」

「判らねえか？　じゃあ、取り敢えず頷いとけ」

「へ？」

そう燕が怪訝そうにすると、緋雄は可笑しそうにげらげら笑い、燕の頭を撫でまわした。

何だか、普段と違和感があるような気がした。何故ならこの類の掛け合いになった際、いつも緋雄は燕を小突くか、悪口で返すかのどちらかに出る。しかし今日は何故だか嬉しそうに笑って、頭まで撫でた。

もしかしたら彼の頭の中にも傷があって、まだ治っていないのかも知れない。やはりまだまだ心配だと思いつつ、燕も愛用の小刀や櫛などを懐へ突っ込むと、社を出る緋雄の後を追った。

「黒雅！」

主の呼び声に、周囲を警戒していた黒雅が現れる。そして燕を再び乗せると、駆け出す緋雄の後に付いて疾り出した。

「なあ緋雄、どこ行くんだよ！」

「詳しい話は着いてからだ、しっかり掴まっとけ！」

「うあ、ま、待てッ」

振り落とされぬよう黒雅の首へしがみつきながら、前に行く黒い

背へ呼び掛ける。しかし緋雄はちらりと振り向くと僅かに微笑み、樹上へふわりと跳躍した。

続いて黒雅も同じく地を蹴り、太く張り出した枝へ乗る。跳ねる振動が傷に響くが、燕は痛みを堪えて、振り落とされぬよう黒い腹へ足を絡めた。

景色は風に飛ばされる如く後ろへ流れ、緩い起伏を残して遙か彼方へ消える。頬に当たる温度は冷たさと湿り気を増し、やがてぽつぽつと雨を孕み始めた。

燕は知り得なかったが、緋雄の判断と迅速な行動は正解であった。二人が立ち去った半刻ほど後、緑の犬の別動隊が社を嗅ぎ付けたのである。

犬達はそこに残った緋雄の邪気を辿り、直ぐさま跡を追った。邪気は途中で地面を離れ、枝に転々と着いていたが、おおよそ北へ向かっているようであった。

この地の最北には、前人未踏の山々が幾つもある。その中には発見されては無いが、古から魔物の巣と噂される場所もあり、人間が足を踏み入れるならば、それ相応の用意と覚悟が必要だ。

巖岳近郊、とある街道にて。全身を真っ黒な鎧に包み、印を組んでいた小肥りの男が、溜息と共に両手を解いた。

「強く黒い邪気、詳細不明の生氣、そして使役魔――」

「黒い邪気、か。なにやら強そうだな」

「賞金首だとお考えですか？」

「さあ、そうかも知れぬし、違うかも知れぬ。生憎俺は千里眼では無いのでな」

小肥りの隣でそう言いたのは、同じ黒鎧を纏い立派な髯を生やした、厳つい面の男だ。

男はやや暫く顎髯を撫でていたが、再び小肥りを見遣った。

「彼奴はどちらへ向かっている？」

「恐らく、北かと」

「北か……」

言葉に僅かな迷いが滲む。それを定めんと、髯面は鉛色に染まる北の空を眺めた。

追うべきか、追わざるべきか。

命は惜しい。だが身分の低い出である髯面は、賞金首を仕留め功を立てたかった。否、この小隊自体が法院処では下位の輩として、上位を占める貴族出身の連中から蔑視されている。

「ここで諦めるおつもりですか？」

髯面と同じ装束に、髑髏に似た面を着けた者達が四人、口々に力強く応える。髯面は口の端を上げると眼光を鋭くし、自らの面を手にとった。

画して小隊は馬を駆り、雨中の街道を北へ向かう。その黒い姿はやがて訪れた闇に紛れ、蹄が地を打つ音も雨に溶けて消え失せた。

妖星ノ巻 其ノ十三（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

一旦更新を一休みいたします。

その間改訂を行い、平行して今後の公開先を検討する予定です。

下書きストックも尽きましたんで（笑）、連載再開は早くても秋ごろとなりますが、なにとぞ素人の作品ゆえご了承くださいませ。

重ねてありがとうございます。

昂月ノ巻 其ノ一

一、魔物とは、古より人の世へ害を為す物也。

一、之を滅し若しくは捕へて、人の世の未来永劫なる繁栄と平穩を守るべし。

一、日々の修行に励み、有事には身を呈し自命を以て邁進すべし。

一、不迷不惑、不情確滅、不諦総滅を忘るるべからず。

（幕府法院処・初心得書より）

幕府法院処——その主な職務は、国中にはびこる人間の天敵、即ち魔物の退治及び捕獲研究である。

組織の頂点に立つのは將軍だが、実権を握るのは朱、黒、白、青の『四色の師』と呼ばれる長であり、それぞれ五、六程の小隊を抱えている。

この組織は凡そ半分が貴族出の陰陽師、残りが僧侶及び武士、平民で構成されている。中では貴族、僧侶が上位、武士が中位、平民が出が下位と位置付けられていたが、特殊な職務内容のため実力があれば平民でも師の側近にまで上り詰める事が出来た。そのため下位の士気は高く、特に『魔物狩』の際にはより戦勲を立てんと勇む傾向があつた。今ここで野営している彼等も、そんな下位小隊の一つである。

彼等は緋雄達を追い、雨中の街道を北に進み、いよいよその端まで辿り着いた。これより先の道は荒れて細くなり、眼前の連峰へ向かってゆるゆると続いている。

六人の先頭に立つ男は馬に跨つたまま、着けていた『闇眼鏡』と

面を外した。するとそれまで鮮明に見えていた景色が一変し、夜に変わった。

「やれやれ、この先はいよいよ恐岳か」

そう言ちて顎鬚をぼりりと搔くと、男は背後に控える配下へ結界の用意を命じた。そして馬を降りると、同様に馬から降りた式鬼使いへ近付いた。

「使いを放て。どれだけ邪気の痕跡が残っているかは判らぬが、早々に追わねばな」

「承知しております」

式鬼使いは頷くと懷から呪札を取り出し、それをまだ雨で濡れている下草の中へ放り込んだ。そして印を結びながら低く呪言を唱えると、ざわざわと草が震え、緑の犬達が姿を現した。

犬達は眼を瞑ったまま式鬼使いの元へ寄ると、行儀良く座り頭を垂れる。式鬼使いは再び呪言を唱えながら、その細い頭を一つ一つ撫で再び印を結び、低い号令を発する。すると犬達は一斉に白い眼を開き、山道を北へと走り出した。

「さて彼奴等、一体何処へ行つたかな」

「必ず探し出して御目にかけます」

背後から掛けられた顎鬚の眩きへ、まるで己を叱咤するように、式鬼使いが応えた。

そこから一里半ほどの山中にて。緋雄と燕は小さな洞窟で小休を取っていた。

雨中を走ったため、着物は濡れて重い。滴る袖や裾を絞りながら、燕は緋雄がおこした焚火で冷えた体を温めていた。

「なあ、緋雄。一体どこ行くんだよ？」

良い加減に答えると訝しむ露草の瞳を眺め、緋雄は微笑んだ。

「それより、傷はどうだ？」

「は？」

「まだ痛むか？」

そう問われて、燕は端と己へ眼を遣った。

気付けば左手と左腿の痛みは既に消え、動かしてもまったく支障は無い。癒える早さに眉を潜めながら布を解いてみると、どちらの傷も牙の穿穴が点々と残る程度に治癒していた。

「治ってる……」

「そうか、良かったな」

さらりと答える緋雄は、悪態を吐くでもなく静かに炎を見つめている。その様子に、燕が少し眉を寄せた。

「こんなに早く治るなんて、何かおかしい……それに、緋雄」

「アア？」

「俺、お前の邪気を纏って無いのに、黒雅に触っても燃えなかったんだ。どうして？」

「知りたいか？」

「ああ」

「俺の邪気が、お前の体に入ってるから」

「ええっ？　いつそんな事を、つうか、勝手にしたのかよッ！」

驚きと怒りに、思わず燕が拳を固め立ち上がる。それをちらりと見た緋雄は、ゆっくりと傍らの小枝を取って火にくべた。

「あの朝、俺を助けた時。お前、俺の血を飲んだだろ」

「……あ」

「だから、もう邪気を纏わなくても黒雅に触れる。傷の治りが異様に早いのも、そのせいだ。正直腹だつて、あんまり減らねえだろ」

静かに告げられた内容に内心頷きながら、燕は言い辛そうに眼を逸らした。

「でも、お前の邪気を体に入れたら……」

「大した量じゃねえから、死んだりしねえって。それより、お前にまだ言つて無かったな」

「へ？」

「助かった。お前が居てくれたお陰で、俺は消えずに済んだ。礼を

言うぜ、燕」

緋雄はそう素直に言つと、燕を真つ直ぐ見て温かく微笑んだ。
初めて感謝されたと、燕は思った。

いつも庇護して貰う立場だった己が、ようやく緋雄の役に立てたのだ。感謝される状況に顔が綻びかけ、誤魔化しについ咳払いが出る。

知らずに緋雄の邪気を体内へ入れてしまったのは悔しいが、見方を変えれば、これでいつでも黒雅に触る事が出来る。ならば決して悪くはないと燕が頷いていると、緋雄がにこにこしながらにじり寄つて来た。

「ところでよ、燕」

「ん？」

「お前、これからも俺と一緒に居るんだろ？」

「ハア？ 何訊いてんだよ。お前の体も心配だし、それに俺……別に、行く処なんて無えし」

「そうか、それもそうだな。俺も何かあつたら、お前に助けて貰わねえとならねえしな。じゃあ、やっぱりお前に言わなきゃならねえ事がある」

「へ？ 一体何だよ」

「お前、妖星が見えただろ」

「ああ」

それがどうした、と口を曲げる燕へ、緋雄は一層につこりと笑つた。

「あの星はな、普通の人間にや見えねえんだよ」

「……へ？」

「つまりお前には、魔物の血が流れてるってわけだ。良かったなア、燕！ お前もつと強くなれるぜ」

緋雄は嬉しそうに笑つと、驚き固まる燕の肩に手を回した。しかし燕はその手を思い切り弾くと、がばりと立ち上がった。

「嘘だ、だって、そんな……ッ！ それじゃ、アイツが言った通り

「じゃねえかよッ」

「燕、落ち着け」

「煩えッ、俺は穢れじゃねえッ！ 何で、何で今ここでそんな事言うんだ、緋雄の馬鹿ッ！」

穢れという言葉の口にした途端、脳裡に義兵衛の罵倒嘲笑が過った。

繰り返し浴びせられた言葉に反発し、あの男を憎む事で己を支えて来たのに、今それが根底から覆されようとしている。例え真実たる証拠が上がっても、簡単に認められる訳が無い。

「ふざけんな、この野郎ッ！」

八つ当たりも甚だしい言葉を吐き、燕は緋雄の胸倉を掴んだ。だが殴り掛かるうとするのを受け止められ、逆に緋雄から抱き締められた。

「畜生、離せッ！」

「魔物になれ、燕」

「何言ってやがる、俺は人間だッ、魔物になんかならねえ！」

身を離そうとする燕の拳が、緋雄の左頬を捕える。痛みと熱を伴う衝撃に弛んだ腕の中から、燕は這うように逃げ出した。

「痛ってえ…… 何でこんな酷え事を」

「魔物は嫌いだ…… だって、お前はおゆうを……」

振り向いた燕は苦しげに顔を歪め、そう唸ると唇を固く噛んだ。

緋雄は暫し黙った後、勢いを失いつつある焚火に眼を遣った。

「俺があいつを、平気で喰らったと思ってるのか」

「……」

「じゃああのまま生かして置く方が、あいつは幸せだったか？」

「……」

「それとも、あいつを喰らった後、俺が骸に縋って泣けば納得出来たのか？」

「……」

「お前は、俺を何だと思っていやる」

そう告げた緋の瞳は、揺れる炎を映し影を帯びる。その様子がまるで泣いているようにも見えて、燕の胸に仕舞い込んだ悲しみを呼び起こした。

最後におゆうが抱きしめてくれた時の、温かみと柔らかさが恋しく感じられる。それを察した訳ではないだろうが、緋雄はそつと立ち上がり燕に近付くと、既に力を失ったその拳に手を掛けた。

「ずつと一緒に、居てえんだよ」

「……え？」

「もう、失うのは堪らねえんだ。お前が死に損なった時に、そしてお前に助けられた朝に、ようやく判った」

やんわりと握った拳が引き寄せられ、そつと緋雄の長い腕に抱き締められる。頬を乗せるよう宛がわれた肩は逞しく、不思議な温かみがある。その懐かしさに戸惑い固まる燕の頭を、緋雄は一つ撫でた。

「人間は脆くて弱い。そして生きられる時間も限られてる。お前だってそうだ、年を取って何れ死ぬ。いや、もしかしたら明日、敵に討たれて命を落とすかもしれない——だから燕、魔物になれ。そしていつまでも、俺の傍に」

途切れた言葉と共に、緋雄の腕に力が込められた。

本気なのだ。緋雄は本気で、共に生きる事を望んでいる——そう感じた途端、燕の胸中で渦巻き騒ぐ感情は、徐々に勢いを失った。

緋雄の温もりが触れ合う部分から注がれ、ゆつくりと心を満たすのが判る。回された大きな手が背を擦る度に心が凜ぎ、やがて不思議な安らぎが沸く。これは何と言う気持ちなのだろうとぼんやり考えながら、燕はその心地良さに目を閉じた。

「——燕。過去よりも、拘りよりも、今とその先を見る。そして、俺を選べ」

低い声に目を開けてみると、覗きこんでくる顔にふざけた様子は微塵も無く、澄んだ緋の瞳が真摯な輝きを放っている。直視出来ずに眼を逸らすと、緋雄はまた抱き締め薄く赤らんだ耳へ囁いた。

「なるよな、魔物に」

「……ならなかったら、どうすんだよ？」

「喰らう」

「ハアアア！？」

「嘘だ。だが、一緒には居られねえ。これ以上暮らせば、別れが辛くなるからな。お前は南の街へ行けば良い。そこなら見てくれだけは誤魔化せる。いつそ異国へ渡っちまえば、この国より住み良いだろう」

「南……？」

旅の帰路で告げられたのを思い出したのか、燕は眉を寄せると少し苦し気に呟いた。

「俺一人で、かよ」

「ああ」

「お前はどうすんだよ？」

「今迄通り、適当にやるさ」

「……」

緋雄は再び燕の瞳を覗き込んだ。

「俺と共に生きるなら、このまま北へ行く。人間のままで居るなら、南へ向かう。決めるのは今だ。追手が掛かってるからな」

そうさりと告げた眼が、燕の心を捉えた。

あの村で救って貰い、名前と生きる術を授けられた。そして命を助けられ、今ここまで望まれている。与えられた恩義に応え共に行く事と、己を人間だと拘り一人生きる事、果たしてどちらが大切だろう。

離れてはならないと、心の奥から呟きが聞こえる。それは深い湖の底から沸き上がる泡のように現れ、波紋を作り心を揺らした。

燕は細く息を吐くと、束の間眼を閉じてから、真っ直ぐ緋の瞳を見つめた。

「——行く。お前と、北へ」

「二言は無えな？」

「ああ、もう決めた」

「そうか……クク、フフフ」

「な、何だよッ？」

何か変な事を言ったかと、燕が戸惑いながらも口を尖らせる。緋雄は含み笑いを洩らしながら身を離すと、ふんぞり帰って胡座をかいた。

「そうそう、言い忘れてたが、お前みたいな奴を魔物にする方法だな」

「あ、ああ」

話の続きを聞き逃さんと燕が俄かに緊張した矢先、洞窟の入口で外を見張っていた黒雅が低く唸った。湿った夜の空気に独特な匂いが混じる。緋雄は小さく舌打ちすると立ち上がり、黒雅へ近付いた。

「ふん、追って来やがったか」

「え？」

「風下を選んで来やがったな、思ったより近いぜ」

外を探ると、その匂いは徐々に増してくる。緋雄は燕を再び黒雅に乗せると、霧雨の吹く闇中へ走り出した。

昂月ノ巻 其ノ二

ようやと足元が見える明るさを得た、夜明け近く。男達は荒く息を継ぐ馬から降りると辺りを見回した。

恐岳のおよそ七合目。見渡す限り岩肌が露出し、針葉松が地を這うように点在する。足元は崩れた小岩が不安定に積み重なり、気を抜けば転んでしまいそうだ。そこかしこから吹き出す水蒸気は硫黄のような臭気があり、眼下を満たす雲海に朝靄も加わって一際異様な雰囲気を醸していた。

「まるで賽ノ河原、だな」

洩れた低い呟きが無風の空を震わせる。無言の同意のなか式鬼使いはきよるきよると眼を遣り、やがて少し離れた岩陰で屈んだ。

「やはり我が犬達で仕留めるのは叶わず。だがしかし、それほど離れてはいないはず」

拾い上げた紙片に残留した邪気がそれほど散っていないのを確認すると、式鬼使いは山の頂上を睨みつけた。

「おい」

髭面の合図に頷くと式神使いはまた札を取り出し、今度は白い小鳥を創った。

「我が目となり探れよ」

言ちながら、頭を撫で眼を開かせる。それから曇天目掛け放つと、小鳥はたちまち翼を広げ頂上へと飛んだ。

辺りを探りつつ馬に水を飲ませた後、小隊は並足で再び斜面を登り始めた。暫く歩みを進めていたが、ふと先頭の式鬼使いが立ち止り、ついと肩口あたりまで左手を上げる。途端に面々の緊張が高まり、一斉に辺りを探った。

僅かに感じる邪気の気配に続き、ごりりと岩を踏む音がする。途端に小隊の左後ろを黒い影が横切った。

「居たぞ！」

そう鋭い叫びを発すと共に、一本の破魔矢が飛んだ。矢は白い尾を引きながら影を追い、弧を描いて消えた低木の向うへ吸い込まれる。撃ち込んだのは隊の後方にいた背の低い弓匠で、彼は破魔矢を自在に操る能力を持っていた。

しかしどうやら仕損じたらしく、影の気配は幾つかに別れ、離れては近付き誘う。緑の犬達が殲滅された手応えから使役魔が複数居ると察していた小隊は、三手に別れるとそれぞれ追跡を開始した。

己の身長に届くほどの長刀を背負った痩せぎすは、紅鞭を手にした仲間と二人で眼前の影を追っていた。

影は長い黒髪を靡かせた、かなりの長身である。だがすばしこく、容易には捉えられない。いつの間にか辺りに霧が増し視界を霞ませて行く中、このままでは見失ってしまうと紅鞭は眉を寄せた。

「糞ッ、逃がすものか！」

「はやるな、落ち着け！」

馬の腹を蹴り手綱で急かすのを見て痩せぎすが制するが、紅鞭には通じなかった。

紅鞭は鞭の名手だが、小隊の中では一番若い。初の遠征で焦れば、時にはそれが命取りになるかも知れない。痩せぎすがそう危惧した矢先、影が急に振り向き刀を抜いた。

「おお！」

間髪入れずこちらへ向かって来る。痩せぎすは刀を抜き、紅鞭は右手を大きく振り被った。

「イヤアッ！」

細くしなやかな鞭はあつという間に舌先を伸ばし、影の腹に括りつく。思い通りに巻き付いた手応えが伝わって来たと思いきや、影が強く鞭を引いた。

「おおっ！」

体勢が崩れ馬上から転がる一方で、痩せぎすが馬に跨がったまま鞭を断つ。紅鞭は伝わる勢いに吹っ飛ばされながらも身を翻し、見

事岩の上へ着地を決めた。

長刀を構え直した痩せぎすは迫る影と交え、襲い来る刃を弾き返した。

「雷珠！」

影が身を引いた隙に刃へ強く命じる。途端に刃は小さな火花を散らすと、太い稲妻を発した。一直線に影を貫き、轟音と衝撃が辺りの石砂を吹き飛ばす。撃たれた影はぐずぐずと縮み、やがて岩の隙間へ染みるように崩れた。

「仕留めたか？」

「さあ、どうだか」

背後から問う紅鞭へ気のない返事をする、痩せぎすは馬を降り煙を上げる影へ近付いた。刀を構えたまま覗きこむと、そこには液状の黒塊が蹲っている。動く気配がないところで滅してしまおうと、痩せぎすが懷から封札を取り出した瞬間、黒塊が爆ぜ犬のような獣が飛び出た。

「ぐああああ！」

咆哮が痩せぎすの右足首へ噛み付き、一気に引き倒して黒塊へ引き摺りこもつとする。このままあそこに引き摺りこまれれば恐らく命はない。紅鞭は咄嗟に腰の鞭を握り、痩せぎすの上半身へ巻き付けた。

「うおお、おの、れえっ！」

痩せぎすが引き裂かれそうな苦痛に唸りながらも、長刀で獣の頭を斬り付ける。断たれた獣は燃える緋眼をくわ、と見開き一気に足を食いちぎった。

「ぎゃああああ！」

悲鳴と血の帯を引きながら宙を飛ぶ痩せぎすを、紅鞭が引きつけ受け止める。勢いのまま地を転がり、その痛みに苦悶しつつ起き上がってみると、伏した痩せぎすの千切られた足から黒炎が上がっていた。

「こ、これは一体……」

「ひいいつ、き、斬ってくれ、足を斬ってくれえ、早く！」

焼かれ腐る苦しみに、痩せぎすが狂ったように叫ぶ。未体験の危機にたじろいだ紅鞭に、頭を割ったはずの獣が死角から飛び掛かって来た。

「ぎゃっ！」

頸動脈を穿たれ、脊椎が碎かれる鈍い音が響く。一撃必殺の噛みは紅鞭の命を断ち、さらに痩せぎすへ狙いを定めた。飛び掛かってくる獣を土色の顔で睨みつけながら、痩せぎすは印を切ると切っ先を獣へ向けた。

「雷珠、連弾……」

刀身が光を孕むが、時既に遅し。獣は鋭い牙を剥きながら痩せぎすの顔面へ噛み付いた。

二人が斃された一方で、弓匠と法螺貝を背負った巨漢は別な影を追っていた。

影は例えれば虎のような、大きな四足の獣だ。黒くしなやかな背には鮮やかな山吹のたてがみが揺れている。左右不規則に跳ねながら走る背を狙い、弓匠が馬上で矢を番えた。

「射よ！」

破魔矢が空を切り一直線に獣を狙う。しかし獣は急に左へ逃げる。と斜面を駆け降り始めた。

つられるように弓匠と巨漢も後を追う。たちまち地形は角度を増し、転がりおちんほどの急斜面に入った。望む谷は深く、跳べば下まで落ちてしまいそうだ。

「ここで我等を振り切るつもりか。だが、そうはいかぬ！」

巨漢がそう吠え、馬を走らせたまま法螺貝を構えて強く吹いた。通常のものとは違い音はしないが、代わりに不可聴の音域が辺りの地面をぐらぐらと揺らし、獣の足元に地滑りを起こさせる。巻き込まれかけたたらを踏む獣の背に、先ほど放った破魔矢が迫った。

これで終いだ——弓匠が勝利を確信した次の瞬間、矢は一刀両断

され、獣から山吹が飛び下りた。

「人間？ いやまさか」

小太刀を携えこちらを振り向いた体は女のように細身で、走り去る獣を一瞬忘れるほど鮮烈であった。

「お、俺が行く。お主は獣を！」

湧いた感情に支配された弓匠は焦ったように叫び、巨漢から離れた。

「待て、おい！」

追う声を構わず馬へ鞭をくれ、山吹目指し走る。番えた鏃の先には、燃えるような瞳がこちらを睨んでいる。

生け捕りにして封札で縛り上げ、泣きながら命乞いさせてやりたい。力の差を思い知らせ、下僕として傳かせてやるうか——浅ましい煩惱に自嘲が洩れた瞬間、目の地面が勢いよく弾けた。

「うわっ！」

土塊と共に獣が飛び出し、弓匠の跨がる馬へ食らいついた。右前脚を碎かれた馬が断末魔の悲鳴を上げながら暴れる。傾ぐ馬上で弓匠が姿勢を崩した矢先、散りゆく土塊の向こうから山吹が出現した。

「なにっ！」

駆け寄り獣を踏み台にして跳躍し、頭から両断せんと刃を振り下ろして来る。弓匠が咄嗟に左腕の手甲ではねのけると、山吹は体勢を崩しながらも身を捻り、蹴りを放って来た。

「うぐっ！」

まるで猫のようだと、右のこめかみを割るような激痛のなかでぼんやり思う。やがて弓匠は馬上から落ち、脳天を強かに打った。

ひくひくと手足を痙攣させる弓匠を構わず、巨漢は馬から飛び降りると法螺貝を構えた。

「地岩流砂、我が音に水となれ」

続けて大きく回転しながら法螺貝を強く何度も吹く。すると獣と山吹の周囲がぐらぐらと泡立ち、あっと言つ間に土岩が液状化した。

「くっ！」

山吹が齒軋りしながら獣の背へ飛び乗る間に、土岩の流れは池となり湖へと成長して山吹達を飲み込まんとする。そして遂に獣の足が捉えられ、沈み始めた山吹達はなす術なく腹まで飲まれた。

思惑通り捕えたことに、巨漢が満足そうにほくそ笑む。しかしそれはすぐに、耳障りな風切り音によって崩された。

「何の音だ……まさか！」

音は徐々に大きくなり、やがて頭上の雲中を旋回する。そして稲妻が一閃したかと思うと、黒く輝く風が巨漢の眼前を横切った。それは一瞬の出来事で、巨漢の眼では何者が見極めることは出来なかった。ただ一瞬、黒曜のごとく美しい鱗が見えたと思った。

「……やられたか、くそう」

既に気配はなく、捕えたはずの獣と山吹も見当たらない。つまりはそれらを奪還されたのだと巨漢は悟った。そして同時に、初めて遭遇した巨大な魔物らしきものに、言い表せない恐怖を感じた。

がくがくと膝が震え、へたりと地べたへ座り込む。その弾みに転がった法螺貝は大きく割れ、鈍い音を発てた。

髭面と組み他の影を追っていた式鬼使いは、鳥のさえずりにふと頭上を見上げ眉を寄せた。

「やられてしまったか……」

空を舞う白い鳥が仲間達の様子を伝えてくる。式鬼使いは先を行く髭面の隣へ馬を付けると、手短にその様子を報告した。

「そうか、じゃあ本体は俺らの追ってるほうか」

「恐らくは。彼奴は黒炎を使います」

「黒炎か。確か三年ほど前に、北方の村がそれでやられたと聞いたことがある」

「本当に賞金首やも知れませぬな」

「もしそうなら大変だな」

瓢々とした顎鬚の言葉に頷くと、式鬼使いは逃げる影を睨みつけた。

ふつつつと怒りが滾り、早く仕留めんと気が逸る。夜通し動いたため馬達の限界も近い。

「仕掛けましょう、政直様」

「ああ、そうだな白藤」

髭面こと政直は頷くと、腰の刃をゆつくりと抜いた。

青い光を放つ刀身は通常の本太刀と変わらないが、その柄頭は拳大の薨に似た塊がくつついていて、何やら異様な形状だ。

一方、式神使いは例の如く懷から札を出し十匹の犬を創り上げ、盾となるよう自分たちの前方を走らせた。

「行くぞ」

「御意」

二本の鞭がしなり馬の尻を打つ。甲高いいななきを発した馬は小石を蹴散らしつつ、前方の影を迫った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8023i/>

暁空—あかつきそら—

2011年12月9日13時53分発行